
摩天楼の忍たち

古見蔵はしか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

摩天楼の忍たち

【Nコード】

N5102I

【作者名】

古見蔵はしか

【あらすじ】

藤林悠輔は日本最高学府東都大学のエリート学生だが、その裏の顔は伊賀藤林流忍術次期家元 現代最強の忍者の一人だった。ある日悠輔は正体をかくし付き合っている恋人進藤早紀とのデート中現れた通り魔を成り行きで半殺してしまう。その事件をきっかけに警察官であり甲賀忍者の頭目である上月静夜に正体を暴かれてしまい、悠輔と早紀の周りがにわか騒がしくなる 東京の摩天楼の下で5人の天才忍者が大バトル！！ この小説はビジュアルノベルです。挿絵が付きまますので必要であれば切ってください

登場人物紹介（前書き）

この度は「摩天楼の忍たち」を読んでいただき有り難うございます
これから登場人物紹介をさせていただきます
挿絵が入りますので必要に応じて切ってください

また、そんなのイラナイ！って方は2話の本文を読んでお受け取り
ください。
では未永くお楽しみください

登場人物紹介

> i 1 3 7 7 1 — 5 1 6 <

藤林悠輔

年齢：19 身長：174cm 体重：60kg 出身地：三重県

表の職業：東大生

裏の職業：伊賀藤林流次期家元

日本最高学府東都大学のエリート学生だが、非常に無愛想で友達を作りたいがらない一匹狼。だがちゃっかり合コンに参加して早紀をゲットしていたりするモテ男でもある。

だが眼鏡を外し真の姿になるとその無愛想さが逆に冷酷な怖さになり敵ならず味方までも畏怖の対象に陥れる。歳に似合わず非常に冷静沈着な忍者であり、非常にプライドの高い家元でもある。東都大現役合格を果たした知能で策謀もかなり得意であるが、逆に八メられると理性をなくすほど悔しがる。

両手に持った釵さいと針と呼ばれる棒手裏剣を巧みに操り、火遁かとんの術を使うのが得意である。また藤林家の血を引く者しか受け継がれないと言われるどんな高速攻撃も見切る異常な視力「赤眼」を極限まで操ることが出来る

> i 1 3 7 7 2 — 5 1 6 <

上月静夜

年齢：25 身長：180cm 体重：62kg 出身地：滋賀県

表の職業：警察官

裏の職業：甲賀忍者衆頭首

渋谷署の資料係に勤務するやる気のない警察官。その出世欲の無さから他の同僚からは馬鹿にされている節があるが本人はどこ吹く風。しかしその正体は警察組織そのものを裏で掌握している甲賀忍者衆の若き頭首。だが権力とかにはさらさら興味が無く、ひたすら他流

派の奥義を破ることに最大の喜びを覚えている。根暗で何を考えているか割らない面があり。悪知恵がよく働き謀事を考えるのが大の得意。かなりの粘着質で狙った獲物は逃さない

左右の手甲鉤で敵を切り裂き、水遁を好んで使う。また催眠術など暗示を使うのに長けており人を操ることも出来る

> i 1 3 7 7 4 — 5 1 6 <

仁科ともえ

年齢：18 身長：147cm 体重：40kg

職業：大学生（バイトはメイド喫茶） 出身地：長野県

萌え萌えのアニメ声を持つアキバで12を争うアイドルメイド。普段はかわいらしく振る舞っているが、実は深い闇を持つヤンデレちゃん。過去に悠輔のお見合い写真を見たことで運命の許婚と勘違いし以後激しくつきまとう。

その真の姿は戸隠流女頭目で日本で一番力ワイイく強い（自称）くノ一。悠輔ばかり追いかけているが忍者としてのプライドは非常に高く、馬鹿にされると激高してしまう。また欲しいものは殺しても奪えがポリシーらしく、その毒牙は一般人にむくこともある。また愛しの悠輔も殺してでも一緒になりたいと考えているらしく、やっぱりヤンデレ。

武器は自分の身長より長い鎖鎌と呪術。そして自らの声を七変化させ、人をたぶらかすこともできるし声自体を使って攻撃も出来る。

> i 1 3 7 7 5 — 5 1 6 <

風間英太

年齢22 身長：160cm 体重：55kg

職業：お笑い芸人 出身地：神奈川県（プロフィールは東京都になっている）

漫才コンビ「トーキョーハンター」のシツコミ担当。一応彼曰く渋谷HIPHOP系らしいが周りからギャル男と揶揄される。ものす

ごいお調子者で、目立つためなら何でもする。夢はM1優勝らしいが実力が伴っていないのが悩み
だがその真の姿は風魔忍者の唯一の奥義継承者である。ふざけた風貌をしているがかなりの実力を伴った忍者。忍ぶ世界を生きる忍者たちの間の中でも最強に目立ちたがりで、率先して伝説を作りたがっている様子。自分が主人公でいたいタイプのキャラなため、無視されるとものすごくプライドに傷をづけられるらしい。
武器は変形棍と言われる棒術を使い三節棍からヌンチャクまで自在に操る。またスピードに強自信を持っているため、姿を捉えるのが非常に難しい

> i 1 3 7 7 6 — 5 1 6 <

応野邦彦

年齢 27 身長：189cm 体重：78kg

職業：地方公務員（東京出向中） 出身地：青森県

普段はJAあおもりの職員だが今年になって東京出向を命じられ、今は銀座の青森アンテナショップでリングを売っている。気の優しいお兄さんだが身体が大きすぎるためどうしても子供には不人気。でも同僚からは信頼されている様子

しかしその真の姿は東北にただ一つ残された忍者集団奥州応変流の頭目。普段は争いを好まず、その力を見せつけるようなことはしないが、15年前戸隠との抗争を根に持っているようで再三ともえを狙う。また赤い瞳を持つ人間にも因縁があり、必要以上に悠輔を恐れている感がある。争うことは嫌いであるがいざとなればその絶大な力を使う覚悟は出来ている
武器は己の拳一つで、その破壊力はコンクリートも砕き大地もえぐり取るほど強力。また身体鋼化という特殊体質でトラックに轢かれても平気、刀も右手一本で返してしまう。

> i 1 3 7 7 7 — 5 1 6 <

進藤早紀

年齢18 身長：155cm 体重：45kg

職業：大学生 出身地：東京都

在京でお嬢様学校と有名な冷泉大学に通うごく普通の女子大生。東京都大との合コンで悠輔と知り合いいつの間にか男女の仲に。東京出身の都会っ子のため非常にわがままで時間にルーズ。デートは必ず彼女の方が主導権を握っている感がある。

だが悠輔と付き合っていると言うことが後に同じ大学に通うともえの反感を買い命を狙われるハメに。また次第に悠輔の真の姿も知りたいという願望に駆られることに。

1話 東大生、藤林悠輔

わが国最高峰の名門東都大学にこの日最後のチャイムが鳴り響く
六限目の授業が終わると窓の外は闇の中。

日は長くなったといってもこの時間になると真っ暗になるのは仕方がない

ふじはやゆつすけ
藤林悠輔は窓の外を見た後、大きなため息をつきGショックで時刻を確認した。

時刻は午後八時半。いつもの木曜の帰宅時間。

悠輔の木曜日はどういうわけか単位取得に関わる授業が畳み込むように入ってしまい、さらにこの時間に授業があるため開放されるのがとにかく夜遅くなってしまう。

嫌だなあ

悠輔はそのことがとても憂鬱で思わず顔をしかめた。

そこらへんに居る普通の学生はなんとも思わないだろう。

これから家に直行するなりバイトするなり合コンするなり思い思いの時間がすごせるのだから。

でも、自分は違う。そんな自由があるのならわけて欲しいほどのに

「よお、藤林。おっつー」

そんな悠輔に声を掛けてきたのはひよろりと茶髪で背の高い同級生の石野誠いしのまことであった。

だが、その問いに悠輔は不機嫌そうに黙ったまま机に出してある教科書やルーブリーフを片付け始めた。

「おいおい、シカトかよー。まあいつものお前らしいっちゃお前らしいけど」

「用件があるなら早くしてくれる？」

「……ホントお前って愛想ないな。まあいいや」

そんな悠輔を見て石野は骨っぽい顔に苦笑いを浮かべ言葉を続けた

「今日さあ、合コン入ってるんだ。」

「断る」

「おいおい。内容聞かなくていいのかよー。相手は美人ぞろいの日立川女子大っていうのに……」

「今日、僕は忙しいんだ」

「嘘つけ。ホントはこの前の合コンでゲットした彼女に示しがつかないからだろ」

「……………」

本当に能天気な奴だ。

そんな彼を見て悠輔はもう一度かれをじろりと睨んだ。

軟派者で不真面目そうに見える石野だが、こう見えても名門私立紅明高校出身で将来の夢は外務官僚とか言っている絵に描いたように典型的な東大生だ

だが、悠輔はそんな同級生たちの見た目と野望のギャップを見るたびに心の中で生まれる苛つきをどうしても隠すことが出来なかった。

「でも、いいよなあ。初めて合コンに行ったお前が合コンのプロである俺よりも早く女をゲットできるなんて……世の中って本当に理不尽にできてるよなあ」

その一言が悠輔の中に決定的な亀裂を生んだ。

悠輔はドンと机をたたきようにして席から立ち上がると、黒縁の眼鏡をぎらりと光らせて石野を睨み付け一言言った。

「どいてくれる？」

その一言だけでおしゃべりの石野はびたつと黙り込んだ。

いつも決して愛想のいい相手ではない藤林悠輔ではあるが、今の彼の眼鏡の奥の瞳は怒っているとかという次元を超えて恐ろしく冷たく不気味に光ったのだ。

それを見た以上、石野は息を呑んで黙って道を譲るしか出来なかった。

悠輔はそれを見て、悠輔は挨拶もせず急にリュックを背負い講義室を出た。

少しやりすぎたかもしれない。

会談を駆け下りながら先ほどの石野の表情を思い出して悠輔は少し反省の色を見せた。

だがその反省は軽蔑している軟派者の石野に対してではなく、同級生にほんの少し本当の自分の顔を見せてしまった自分自身への反省だった。

それを隠すかのように悠輔は平然とした顔をして第四講堂から出てきた。

外はどっぴりと日が暮れ、小さな街灯が古臭い第一講堂をぼんやりと照らしていた。

> i 1 3 7 1 4 — 5 1 6 <

日本最高峰の学校として燦然と輝かしい歴史のある東都大学

藤林悠輔は出身地である三重県内のさほど有名でもない進学校から現役合格を果たした十九歳の二期生だった。

見た目は暗い茶色に染めた髪に黒縁の眼鏡、背はさほど高いわけでもないが雰囲気はどこか大人びているように写るかもしれない。

二期生だから大学にはまあ慣れた方。単位はギリギリの状態だけどとりあえず留年しない程度にがんばっている。

だけど悠輔はそれほど大学生活に固執しているわけではなかった。

ほかの同級生が口走る総理大臣や事務次官とか言う大きな野望なども自分にはあまり存在しない

否、彼はそんな野望を持つことを極端に避けてきた。

理由はただ一つ。それが彼の家の問題であった。

藤林家は地元である伊賀上野ではかなりの名家であり、家長である悠輔の父親は地元選出の県議会議員もする地元の名士中の名士という存在だ。

自分の家がただの地元の名士であるだけならまだ事は複雑ではない。い。

自分の家は普通じゃない。そして自分自身も普通ではない。そのことは悠輔が生まれたときにはもう頭の中にすり込まれていた

結論から言えば悠輔は忍者であった

今の時代に忍者？ 冗談を言うものではない と言われそうだが、実際に今 この時代に忍者をしている者たちが本当に影で存在している。

それを裏で取り仕切っている悠輔が育った藤林家 否、伊賀藤林流であった。

そして、悠輔は一介のエリート大学生である前に、伊賀藤林流の奥義継承者である次期家元として現代の伊賀忍者を率いる若きリーダーであり、それこそが自分の本来あるべき姿だと思っていた。

でも、だとしたら僕は何故東都大学を目指したのだろうか？

それを考えると小一時間理由を考えるのに苦慮してしまう。たいした夢も野望も抱かず自分試しに入った学校なのだから。

ただ、今言えるのは軟派者の癖に野望だけはでかい同級生たちと自分は明らかに立場が違うということ。

それ故に悠輔はアフターを好き好きに過ごしている同級生たちが恨めしく羨ましく思えた。

僕は君たちとは違う。僕にはやるべき任務があるんだ

帰宅を急ぐ学生たちを横目に悠輔はすつと前を向いた。

日本一有名な校門といわれる東都大学の赤門前には一台の黒い車が止まっていた

それは決して目立つような外車ではなく、ごく普通のブルーバードシルフィであったが校門前で帰りを急ぐ学生たちはその様子に思わずはっとさせられた。

それは悠輔が知らず知らず放つ気高い空気に一瞬だけ気づいたのだろうか。

だが、悠輔は彼らを気にするそぶりも見せなかった。

どうせあと十分もたったら僕のことなど当に忘れてしまっただろう。目の前には輝くほどの娯楽が彼らを待っているのだから

迎への車に乗り込んだその瞬間、悠輔は昏間見せている平凡な学生顔を一気に脱ぎ捨てる。

この車に乗り込んだそのときには自分はまだ別の顔 東京に歩いての伊賀忍者を統べる若き頭目の顔に変わる。

悠輔は眼鏡の奥に潜む威圧的な鋭い瞳で若い男の運転手に合図を送る

それと同時に無言のまま車はゆっくりと校門を離れていった。

「お疲れ様です 家元」

運転手の男は悠輔よりも一回り近く年が離れているのにかかわらず丁寧な言葉で彼に話しかけた。

その一言を聞いて悠輔は後部座席にゆっくりもたれながらむつとした様子頭をかいた

「やれやれ……木曜日こんな約束とはね」

「そんなこと言わないでくださいよ。家元」

「だってさ、横目で同級生どもがこの後遊ぶだの何だの聞かされてみてよ。こっちだって気持ち抑えられないじゃんか！」

「それはまあ……そうですが」

「僕だって伊賀藤林流の家元である前に一介の大学生なんだよ。もっと自由な時間が欲しい」

後部座席でぶつぶつと文句を言う悠輔の顔は一瞬だけ天才忍者から我が侂な学生の顔に戻っていた。

それを見て運転手の男は苦笑を浮かべた

「家元、忘れないくださいよ。あなたは大学生である前に我々伊賀東京部隊を束ねるべき首領なのですよ。もっと自覚をもってください」

「少し口が過ぎるんじゃないか？ 望月」もちつき

悠輔は一言そう言い放つと、口元にひやりと冷たい笑みを浮かべた。

バックミラー越しに悠輔のその笑顔と鋭い瞳を見たその瞬間、望月と呼ばれたその忍者はそれ以上何も言うことができなくなった

「僕は別に他の奴らみたいに好き勝手に遊びたいなんて思っていないよ。気持ちを抑えられないって言うのは奴らに対して苛々しているだけ。それだけさ？」

運転手の望月にそういわれたのが相当心外だったのだろうか
悠輔はさらに不機嫌そうになりながら一息にそういつて見せた。

「申し訳ありません。そういう意味でしたか……」

「でも、まあ君たちの言い分もわからないわけじゃないよ」

そう言つと悠輔は深いため息をついて足組みした。

「東都大に入学する際も父さんにしつこく言われたからね。学業よりも忍者家業を優先しなさいって。ま、おかげで単位はいつもギリギリでこんな時間まで授業出る羽目になってるけどね」

「はあ……」

「でも、僕ってすごいと思わない？」

そう言つと悠輔は目を輝かせながら身を乗り出した

「伊賀 否、忍者の長い歴史を見てこれほどまでに忍術と学業を両立したのって僕だけじゃない？ 東都大出身の忍者なんて後先考えても僕しかいないかも！」

「そうですね……」

「まあ、父さんに言われた東京に進学する条件が伊賀東京部隊の指揮なんだから、学業が忙しいなんて文句にもならないね。それに、僕はこう見えても今の状況を楽しんでいるんだから」

「はあ……」

自信満々にそう言い放つ悠輔の表情を見て望月はそれ以上何も言

うことができなかった。

彼の表情には自分より年若き青年に対して深い畏怖の念があるようにさえも見えた。

「ところで、今日僕に会いたって人は誰なんだい？」

「は……」

そう言つと望月は前を見たまま落ち着いた口調で説明し始めた。

「その資料にも書いてあると思いますが……今日あなたにオフア―を出したのは警視庁情報管理室の相馬泰警部。そごまやすしおそらくですが」

「警察が僕の 否、伊賀の力を求めてるってことか……」

悠輔はそう言つと深いため息をついて後部座席に深く座りなおし、手前の座席ポケットに入っていた資料にざつと目を通した。

警視庁の相馬泰警部か その名をつぶやきながら悠輔は資料に添付されていた顔写真を見た。

歳は38歳、それにしても髪は灰色つぼく顔もやせこけていて悠輔の目には記載されてる歳の割りに老けて見えた。

「しかし38歳の警察幹部か……向こうも僕たちのこと少しは勉強してきてるのかな？」

「さあ……それは」

「どうも信じられないところがあるんだよね。こつ言つ關係の依頼
つて……警察が僕たちに協力を仰ぐのなんて今更つて感じがあるし、
裏でどこかと両天秤かけてんじゃないかなつて思つちやう」

「……………」

その問いに望月はそれ以上何も答えず黙つたまま車を進めた。

悠輔を乗せた車はどんどん都心へと向かつていく。

窓からは様々な街の光が絵の具のように混ざり合つて窓から車内
を煌々と照らした。

悠輔はその光に照らされた資料をじつと睨みつけそのまま恐ろし
いくらい押し黙つた。

その顔にはもはや今時の大学生の顔などひとかけらもない。鋭い
眼光と静かな殺気をまとつた彼は完璧に伊賀忍者を統べるべき若き
リーダーの顔になっていた。

その時だつた。しんと静まり返つた車内に携帯の着信音がけたた
ましく響いた。

悠輔は表情を崩すことなくゆつくりと携帯電話を取り出しディスプレイ
を見た。

叶陽一郎 かのうひつひしちゆういちろう 悠輔にとつて従兄であり彼が最も信頼する参謀であ
つた。

「よう、悠輔。学校終わったか？」

着信すると電話の向こうの声は思いのほか明るい声で悠輔に話しかけた

「今そつちに向かっていると」

悠輔は陽一郎のその声に笑いもせず冷たく答えた。

「で……何かわかったの？」

「まあな、お前の言われたとおり時間が許せる限り今日の件を調べたぜ まったくお前って人使い悪いよな。おかげでこつちは時間ギリギリで」

「いいから、情報だけ教えてくれない」

「……わかったよ」

呆れたような声で一言そつつぶやいた陽一郎は一息置いて今まで調べた限りの情報を悠輔に教えた。

それを悠輔は黙ったまま聞き取った。その表情はやはり先ほどとさほど変わらない。

むしろ先ほどより険しさと近寄りかたさが強くなったようなそんな感じが受け取れた。

「わかった……」

悠輔はじつと目を閉じると一言そつ言った。

「僕がそっちに行くのはあと十五分ほどだ。そういつことだから、
後は任せたまよ」

2話 刑事、相馬泰

今まで忍者など過去の遺物、または漫画やゲームの中での空想物と
思っていた

都心の一等地にある『ハリーアットホテル東京』の一室でソファ
に座り込み、ある人物を待っていた警視庁情報管理室の相馬はしか
めっ面でそう思った。

最初は悪い冗談かとも思った。

直属の上司である阿部雅弘あへ まさひろに今日の夜とある人物と秘密裏にあっ
てきてほしいといわれたが、その人物がなんと十九歳の東大生。

まさか、こんな時期に東大生の就活につき合わされるのか言うの
かと思つて反論しようとしたら阿部の口から信じられない言葉が飛
び出したのだ。

「彼は忍者だから手ごわい相手だぞ。こちらの真意を感じつかれない
ように心がけてくれ」

忍者　！　その言葉を相馬は何度も口にし阿部に確認した。

何かの間違いであつて欲しい。

今の時代に忍者だなんて　フィクションの上だけの話にしてほ
しい。

だが、阿部の口から出てきたのは現代の忍者たちと警察組織の強

い秘密のつながりであった。

阿部が言うにはこうだ。

「私も最初は驚いた。実際の忍者なんて時代とともに消え去った存在だといふ最近まで思っていたよ。しかしだな、相馬君。本当の忍者は消え去ってしまったわけじゃない。様々に変わる時代の色に合わせて彼らも変容してきたのだよ」

じゃあ、何でそんな忍者が警察組織に関わってくるんですか？

「早く言えば彼らと我々の利害関係が一致した結果だよ。信じられないかもしれないが彼らの情報伝達能力に機動力さらには戦闘能力すべて我々の想像を超える高さを誇っている。我々はそんな彼らを情報力を少し利用しているだけ。そして彼らも現代を生き抜くために我々を利用してしているのだよ」

と言われても、そんな現実離れた話など若い相馬には到底信じられない話であった。

半信半疑のまま相馬は警察と忍者との深いつながりを知り、機密事項である今回伊賀の若き頭目に会う理由をすべて教えられた。

阿部はその秘密を伊賀の若き頭目に絶対に悟られないようにしろと何度も釘を刺された。

しかし、相手は自分より二周りも年の離れた大学生だ。

いくら東都大学のエリート学生だとは言え警察官で情報管理の仕事をしている自分より優ることなどないと思ったのだ

彼に謙ることなどない。自分の方が絶対に立場が上に決まってる

そう息巻いて彼との待合場所である『ハリーアットホテル東京』の一室についたが、交渉相手の東大生忍者はまだ着てはいなかった

その代わり部屋に待ち構えていたのは無精髭をはやしたひよろりと背の高い男と反対に身なりの整った体型のいい男。どちらも三十前後の齡だった。

こいつらもやはり忍者なのだろうか　相馬は瞬時にそんな疑念を覚え二人を不審の目で見たが二人はあまりにもあっさりと自分の身分を明かした。

無精髭を生やした背の高い男の名は叶陽一郎と名乗った。日の丸テレビの報道記者をしていると言う。やたら陽気で明るいのが目に付き、緊張していた相馬に対し何回か冗談を飛ばして見せた。

そして、もう一人の身なりの整った男の方は青葉宗司^{あおばそうじ}。驚くことに相馬と同業者　警察庁の人間だと名乗った。だが口数が少なく物静かな性格なのかそれ以上のことは彼の口から聞き出すことが出来なかった。

彼らは表こそマスコミ関係や警察などそれなりの地位のある機関に所属している。だがその裏の意味を考えると相馬はなんとも重たい気分を味わわざるをえなかった。

警察もマスコミも日本の根幹を作っている重要な機関。もし彼らが仮に忍者だとしたら表の顔と裏の顔を使い分け彼らの意向でこれらの機関が動かしているでも言うのだろうか？

まさかな。

阿部に打ち明けられた警察の秘密と二人の男たちの見えない本性を考えた拳句それを何とか否定しようとした。

「冗談じゃない。過去の遺物みたいな忍者に今の日本を牛耳られているなんてあつてたまるか。」

俺は絶対に信じない。今の時代に忍者なんていることなんて絶対に信じられない！

「おい。まだ君たちのボスは来てないのか!？」

急いで理論武装した相馬は少しだけ強気な口調で二人の男に噛み付いた。

「すみませんね」

それを言ったのは社交的な性格の叶陽一郎の方だった。

「彼、こう見えても多忙な学生でしてね……確か今日はびっしり授業がつまっているとか」

「まったく……たかが大学生風情にここまで待たされるなんて心外だな。君たちは悔しくないのかね？自分たちより若い人間がトップだつて事を」

相馬のその一言に陽一郎と宗司は思わず顔を見合わせた。その口元はどこか苦笑いが浮かんでいた

「あなたはまだわかっていないようですね」

陽一郎は少し呆れたような顔を浮かべ言った。

「家元は確かに年齢は若く年功序列の組織を生きている相馬さんには彼が若輩者にしかみえないかもしれませんが。でもあなたは彼の恐ろしさをまだ知らない。彼が『あの名』を継いだ時点で我々伊賀藤林流の門下の者は彼に絶対服従するのです」

「……はあ？」

陽一郎の答えは相馬にはまるでちんぷんかんぷんの異国の呪文のよように思えた。

『家元』だの『あの名』だの　まるで謎の単語が相馬の頭をさらに混乱させた。その答えを考えているだけで相馬はだんだん自分の頭に血が上るのを覚えた。

だが、そんな相馬の様子を他所に目の前の陽一郎と宗司はもう一度顔を見合わせた。

そして客人の相馬にまったく悟られることない秘密の会話術『心読』で話し始めた。

(どうやら今日のお客さんは本当の素人さんかもしれねえな)

(警視庁も我々を舐めているようですね。こんな話のわからない相手を差し出すなんて)

(まあ向こうも二股かけてるんだから仕方ないだろ)

(それを家元には報告を　?)

(一応は入れておいた。悠輔もこの話がアブナイってことは気づいていたらしい)

(なるほどね……家元らしいですね)

(まあこの分からず屋の警察さんは悠輔が脅せば何とかなるだろう。後の問題は　警視庁が二股かけてるもう一方の相手がどう出るかってことかな?)

(甲賀ですか　)

「　　おい!」

どっかりとソファアに座っていた相馬はむっとした表情で二人の間に割ってきた。

「本当にいつまで待たせるんだ!　まったく……大学生風情に舐められたもんだ!」

「誰が大学生風情って言ったの?」

しんと静まり返った一室にその声が凜と響きわたる。

そこにいたすべての人々がその声にはっとして入り口に視線を集中された。

そこにいたのは黒い眼鏡をかけたいかにも頭のよさそうな二十歳前後の若者が立っていた

3話 忍者という職業

「彼が？」

相馬はその姿に驚き思わず息を大きく呑んだ。

その姿は彼が想像していたような、就活学生のようなスーツを着せられた若輩者の姿とは明らかに違う。

真っ黒なスーツ姿は様になっており、雰囲気は確かに若くはあるがそれを補うかのように彼の表情は落ち着き払っている。

否、あまりにも落ち着きすぎて逆に近寄りたささえ感じたのだ。

「お待たせいたしましたね。相馬泰さん」

彼は相馬を待たせたことを一言謝りはしたが、物怖じすることなく堂々とした足取りで近づいてくる。

その時、先に部屋にいた叶陽一郎と青葉宗司は彼が来たのを見すすつと足を一步引いて彼の後ろについた。

なるほど、家を継いだものにはどんなに若くても絶対服従か彼らの行動を見て相馬は背筋を伸ばし気持ち負けないよう彼らを威嚇した。

「ああ、ずいぶん待たされたよ。あと五分もしてたら帰っていたところだった」

「……そうですね」

相馬の威嚇の言葉にも彼は平然とした表情を崩すことはなかった。

その態度は年長のはずの相馬よりずっと堂々としているように思えて、相馬はさらに頭に血が上った。

「で、君が例の『家元』か？」

「ええ、そうですね」

そう言うと彼はニコツと始めて表情を解した。

「僕が伊賀藤林流次期家元の藤林悠輔です。まだ家を継いだわけじゃないんだけど、実質的にはここ東京の部隊を指揮してるのは僕だからみんな僕のことを『家元』って呼ぶんですよ」

あどけない笑顔を浮かべそう説明する藤林悠輔は一瞬だけだが今時の若者の顔を見せた。

この若者が『家元』　その言葉を聞くと何か茶道や踊りなどの芸事の家元制度を連想させてしまう。

彼らにとって忍者の忍術もいわゆる芸事なのだから『家元』だっているという理屈なのだろうが、まったく係わり合いのない相馬にとってはそのことが疑問だしおかしくも思えた。

「それで、今回警察が僕たちに依頼したいことって何でしょう」

藤林悠輔は口元に浮かべた笑みをやめじつと相馬の顔を見た

その瞬間、相馬は彼の眼鏡の奥の瞳に鋭く心臓を射抜かれたような気分になり、思わず顔を引きつらせそうになったが何とか悟られないようにすばやく繕った。

「今日は……なんだ、その……君たちの組織の情報力を見込んで提携の話しようと思ってね」

「へえ……」

「僕もイマイチ君たちの組織ってというのがわかんないんだけどね……上司が言うには君たちは表ざたにはなっていないけどすばらしい智恵と能力を持っているらしいじゃないか。そんな君たちと我々警察が組まないわけにはいかないだろう」

そう言うと相馬は取り繕ったかのような笑顔を藤林悠輔に見せた。

だがそんな彼を藤林悠輔は冷めた目でじっと見つめると深いため息をついて一言言った

「その言葉は本音ですか？」

「は？」

「だから、僕たちと組みたいって言うのはあなたにとって本音ですか建前ですか？」

藤林悠輔のその言葉に相馬は頭に血がカツと上っていくのを覚えた。

彼のあまりにも上から目線な態度に相馬は強烈な怒りを覚え膝の上で握ったこぶしをわなわな振るわせた。

だがそれを見過ごすことなく藤林悠輔は呆れたような顔を浮かべ言った。

「僕は本当のことを知りたいだけですよ」

そう言うと悠輔は物怖じすることなく怒り心頭の相馬を見た。

「話を聞いている限り、あなたは僕たちのことを信頼しているようには思えない。むしろ上の命令だから渋々やってきたという感じがしてなりませんね」

「それは……」

「警察が何を恐れるんですか？」

目の前の若者に一言言われたその言葉に相馬ははっと顔を上げた。

「僕たちはあなたに何を言われようとも気にはしませんよ。ただ僕はあなたの本音を知りたいだけです」

その言葉を聞いて相馬は一瞬戸惑いの顔を見せた

だがこの『家元』と呼ばれる若者にこうもかくにも言われるともはや黙っているわけにはいかなかった。

「ああ、あなたたちのことは信じられない。信じてたまるかって思うよー」

そう言つと相馬はキツと怒気のこもつた視線を藤林悠輔に向けた。

「こんな平和で豊かな時代、何故我々警察が前世紀の遺物のような忍者と提携しなければならぬんだ？ まったく……ちゃんちゃらおかしいよ！ あんたたちがどんな優れた能力を持っているのかは知らないが、えらそうな顔される筋合いなんてまるでない。どこの馬の骨だかわからないあんたたちを 信頼なんかできるか！」

相馬の渾身の罵声はしんと静まり返つた室内にむなしく響いた。

あまりの勢いで罵つてしまつたためか相馬は席を立つたままハアハアと息を切らした。

だが、ちらつと確認した藤林悠輔の顔はまるで先ほどの罵声などなかつたものかのように平然とこちらを見ていた。

「言いたいことはそれだけですか？」

そう言つと藤林悠輔は口元に笑みを浮かべ優しげな言葉をかけた

「あなたの言いたいことはよくわかりました。大体最初はみんなそういう反応だよ。まさか現代に本当に忍者がいるなんて信じられないのが当たり前だよね」

「そう……そうだろう！」

予想外の彼の態度に相馬は安心したように彼の会話に乗った。

「今でも思うんだよね、今日の仕事が悪い夢で終わって欲しいって

……だってあんたたちが本当はこの国の行く末を裏ではたいているなんて正直悪い冗談で終わらせて欲しい」

「それが冗談じゃないんだよ」

その言葉を放った藤林悠輔の顔を見て相馬は先ほど抱いた安心を打ち砕かれた。

先ほどの柔和だった瞳はその言葉を言ったとたん激しい鋭さを見せたのだ。

「昔でも今でも知らなくてもいいことなんてそこら中たくさんある。あなただってこんな仕事していなければ僕たちのことなど知らなくてもよかったかもしれないのに……残念だったね。真実を知ってしまっ」

その言葉を聞いて相馬は思わずきょとんとしてしまった。

真実　そう、それは前世紀の遺物だと思っていた忍者が現代にしぶとく生きていくということ。そして彼らがこの国の根本に関わっているということ。

ああ、やっぱり自分が懸念したことは本当だったんだ　そう思った瞬間、相馬は急激に身体の力が抜けていくのを感じた。

へたりと座っていた椅子に腰掛けると目の前にはいつしか勝てない強敵と化していた大学生の若き家元が表情一つ変えずに座っていた。

「一つ聞いていいかな？」

その一言に相馬はもう答える元気もなかった。

それを見て藤林悠輔は初めて身を乗り出して気力を失った相馬に聞いたのだ。

「あなたは僕たちに会う前に警察と忍者との関係を一通り聞いたはずだと思うけど……」

「ああ、聞いたけどそんなの信じられる」

「だとしたらあなたの上司から僕たち以外の忍者の存在も聞いているはずだね」

「え？」

藤林悠輔のその一言を聞いて相馬はやっと我に返った。

彼ら以外の忍者の存在　それは上司の阿部雅弘が明かした警視庁のもう一つの提携者の名前だった。

阿部曰く、今日会う伊賀よりもいち早く警視庁の協力を取り付けた勢力が存在し、その勢力は伊賀と長年の対立関係にあると言う。

警察といち早く提携し伊賀と対立する者の名前　その名は甲賀

信じられないことに時代劇や小説とまったく同じ軸で二つの忍者勢力は現代でも対立していると言うのだ

つまり、我々はその対立する二つの勢力といわゆる二股をか

けるってことですか？

相馬のその問いに阿部は笑いながら答えた。

『向こうは不快に思うかもしれないがこちらは選ぶ権利があるんだよ。どちらが優れている流派なのか　それを見極めてから決めてもいいだろう』

「相馬さん、聞いてます？」

藤林悠輔のその言葉に相馬は再び我に返った。

目の前の彼はいつになく険しい表情でじつと相馬を見ていた否、不快そうな目で睨んでいた。

「素直に答えてくださいよ。あなたは重大なことを隠しているってことはこちらはわかっていいるのですから」

「　　なんのことだか。わからないな」

そう言うと相馬はとぼけたように笑ったが、藤林悠輔は表情一つ変えなかった。

「率直に聞くよ」

その瞬間、藤林悠輔はつけていた相馬を睨み付けて一言言った。

「警視庁は僕たち伊賀と先客の提携先の甲賀　両天秤にかけようとしているのかい？」

相馬はそんな彼を見て思わず息を呑んだ。

その時の彼の瞳は先ほどより色が違っていた。

すべての心を見透かすような澄んだ瞳から怒りに燃えたような真紅の瞳に変わっていた。

その瞬間、相馬は初めて目の前のこの若者が怖いと全身全霊で感じたのだった。

「あなたたち警視庁の考えは伊賀と甲賀どちらが優れているか図りかねているんだろっね。出来ることなら一番優れている流派にすべてを預けたい。本当の本音はそんなところだろっ」

「そんなこと……俺が知るか！」

「もちろんあなたには聞いていない。僕たちの存在をつい最近知ったあなたに聞いても納得する答えは返ってこないだろっから」

そう言つと藤林悠輔は呆れたように一息吐いた。

そんな彼の態度に文句は言いたいのだが、もはや相馬に反論する力など残ってはいなかった。

「まあ、どちらにしろ今日はあなたみたいなのも知らない素人が交渉相手でよかったですよ。警視庁の真意もわかりましたし、こちらが有利に話がすすめられたし」

そう言つと藤林悠輔はすつと椅子から立ち上がった。

「でも、甲賀と比較されるのであれば僕たちも逃げるわけにはいかないね。この話とりあえず保留させていただくよ」

彼がそう言った次の瞬間だった。

バリーン！！

相馬のすぐ後ろにそびえていた東京の摩天楼を移していた窓が大きな音を響かせて一瞬で粉々に砕け散った

その様子を相馬は心臓が止まるかと思うくらい驚きを隠すことが出来なかった

まるで車が衝突したような衝撃だったが、ここは三十階のホテルの高層階。

そんなところに一枚ガラスが割れるほどの衝撃など　ありえない話だった。

「何なんだ　！」

相馬は思わず身体をのけぞらせるように割れた窓を見た

きらきらと輝きながら零れ落ちるガラスにはたはたと吹き込んだ風になびくカーテン。

驚くべきことにその向こうに一人の人影がしゃがみこんでいた。

「……これはずいぶん派手なお登場だな」

藤林悠輔は少し感心したようにあごを上げた

彼は少なくとも驚いてはいない様子だったが、その瞳は先ほどと比べ物にならないほど険しい表情だった。

彼は知っている。この人物が何者なのか、何の目的でここにやってきたのか

「こいつ、あなたの知り合いか？」

相馬は怯える子供のように椅子のクッションを年甲斐もなくぎゅっと抱き寄せながら藤林悠輔に聞いたが、もはや彼に相馬の声など聞こえてなどいなかった。

窓を突き破った侵入者と立ち向かう若き伊賀の家元 二人同時におぞましいほどの殺気がカツと放たれた。

もはや後の戦いは誰にも止められない、止めることの出来ないことだということを相馬はその空気だけで悟るしか彼には出来なかったのだ

4話 対決！

「悠輔！」

部屋の異変に気づきその場に駆け込んだ叶陽一郎を悠輔は手を黙ってかざして制止させた。

悠輔は周囲が騒ぐほどのこの緊急事態に焦りはさほど感じてはいなかった。

むしろそのあまりの落ち着きっぷりが周囲の者にとっては恐ろしくさえ思えたのだ。

「手出しは無用だ」

悠輔は一言そう言うとかけていた眼鏡を取り外した。

その瞬間、悠輔の瞳は燃えるような赤色に光り侵入者を鋭くにらみつけた。

「君たちは事をこれ以上大きくしないよう働いて欲しい。こいつの相手は 僕一人で十分だ」

そういつた瞬間、悠輔は陽一郎に向かって眼鏡を放り投げた。

それを受け取った瞬間、陽一郎は一瞬面食らった表情を浮かべたが悠輔に言われたとおり何も言わず部屋から出て行った。

> i 1 3 7 1 6 — 5 1 6 <

「さて……と」

窓を破り冷たく強い風が部屋に吹き込んでいく。

侵入者はぼさぼさの黒髪と黒いコートの裾をその風に任せるようになびかせた。

そして、彼はすつと立ち上がると両手につけたまるで中世の騎士のような手甲を横に広げた。

その瞬間、鋭い音を出しまるで日本刀のようなまっすぐで長い爪が手甲から生えた。

来る　！

そう思った瞬間、一際強い風が部屋に叩きつけるように吹き込んだ。

それと同時に侵入者は動き両手の爪を振りかざして悠輔に襲い掛かった。

だが、悠輔にとってそれは予想済みの行動であった。

侵入者の爪が悠輔の顔を抉り取ろうと振りかざしたその瞬間、彼は表情一つ変えることなくその爪を軽々とかわして見せた。

その瞬間、悠輔は初めて侵入者と目が合った。

なんと冷たい顔をした男なのだろう　その冷たい表情はどこか機械的に見え、そして瞳はたえず青白い光を出し悠輔を射抜き続けた。

だがそれはあまりにも一瞬であった。

次には白くきらめく爪がまたしても悠輔を襲ったが彼は見切ったかのようにそれを身体をそらしてかわす。

そのままの体勢で悠輔は飛び上がりくると宙で体勢を変えた。

そして着地する直前にそばにあったベッドのシーツを掴むとそれを侵入者めがけて翻し投げつけた。

しかし、その奥の手に侵入者は臆することなく投げつけられたシーツを横一文字に切り裂いて見せた。

だが、シーツが裂け視界が一瞬開けたその瞬間、まるで襲い狂う狼のごとく黒い影が侵入者の喉下めがけて突進してきたのだ。

侵入者は体勢を変え深く腰を沈めかがめると爪が伸びる元の手甲でその攻撃を防御したその瞬間、乾いた金属音と激しい衝撃が侵入者の右腕にのしかかった。

衝撃でずるずると引いていく侵入者の足。先ほどの一撃の衝撃は相当な力であった。

侵入者は防御した手甲とは逆の手の爪を伸ばし、悠輔の顔めがけて付きたてた。

だが、それと同時に右手にかかった攻撃はすつと糸を引くように引き下がった。

悠輔は無表情のまま顔に手をやる。

頬をぬらす赤い液をぐっと拭い取ると両手で釵さいという十手のような武器を回転させた

侵入者に向かってシートを投げつけたその場所に悠輔は釵を隠していた。

つまり彼は知っていたのだ。この会談は甲賀に筒抜けであり今日彼らが何かしらの邪魔をしてくることを

ただ、そんな用意周到の悠輔にとってたった一つの誤算は、邪魔しに来た侵入者がとてつもない強さを誇っていたこと。

自分と互角に戦える実力を誇りながらまだその力を隠している。それを悟った悠輔は落胆するどころか大きな悦びさえ感じた。

にやりと笑みを浮かべたその瞬間、悠輔は床を強く蹴り侵入者めがけて三度襲い掛かった。

だが、侵入者もさるもの。悠輔の釵の一撃を爪の刃の部分で封じた。

しかし、それも悠輔の狙いでもあった。彼は封じられた釵を柔らかい手のスナップを使ってぐるりと裏返す。

次の瞬間、侵入者の爪が逆に封じられた。

彼は一瞬焦ったように黒い前髪の間から青白い瞳をかつと見開いた。

だが、悠輔はその隙に間髪入れることなく大きく息を吸い込んだ次の瞬間、彼の口から炎が立ち上った。

巻き上がる熱気、立ち昇る赤々とした大きな炎　あまりのその大きさにホテルの火災報知機が鳴り響き瞬時に部屋からスプリンクラーのシャワーが降り注いだ。

だが悠輔はその攻撃ですべてが終わったとは思ってもいなかった。

もくもくと上がる水蒸気の中ゆらりと立ち上がる人影が浮かぶ。侵入者は瞬時にあの炎を避け後ろに引いていたのだ。

火に焦げた壁紙のにおいに降り注ぐスプリンクラーの水しぶき、そして割れた窓からひゅうふうふうと吹き込む強い風

侵入者は黒コートを風にはためかせ息を切らしながら気味なほど青白く光る目で悠輔をにらみつけた。

「火遁……か」

それが彼が発した初めての言葉だった。

気のせいかもしれないが彼の顔もどこか喜んでいるような表情に悠輔は見えた。

どちらも気持ちは同じであった。最強かつ最高の相手に出会えたその喜びに打ちひしがれているのだ。

「どっつするの？」

悠輔は意を決して侵入者に話しかけた。

「僕はここで決着をつけたってかまわないよ。でも、そうなれば騒ぎはこれ以上大きくなるのは君だってわかるよね」

侵入者に交渉に入っても悠輔は固く閉ざされた表情を崩すことはなかった。

否、戦っていたときよりもずっと濃度の高い殺気を彼は絶え間なく発しているようにさえ見えた。

相手に舐められるわけにはいかない。勝負を捨てたと相手に思われるのが悠輔は最大に嫌悪していた。

「今なら僕たちの力でこの騒ぎをなかったことにすることは可能だ。そっちの方が君たち甲賀にとってもいい選択だと思うけど？」

悠輔はあえて伊賀の威光をかざすかのように侵入者に話しかけた。

幾分かハツタリも含んではいるが、これも侵入者より少しでも優位な立場で交渉を進めるためだ。

「ふ……おもしろい」

その問いに侵入者は初めて口を開いた。

口元に柔らかそうな笑みを浮かべてはいるが、やはり表情はどこか機械的で冷たい印象だった。

「お前たちの力でこの騒ぎを収めるだと……それは見ものだな」

「ちゃんと僕の質問に答えるよ」

そう言つと悠輔は侵入者をキツと睨み付けた。

「君に残された道は2つ。このまま手を引いて騒ぎを収めるか、またはこのまま戦つて騒ぎをさらに焚きつけるか 選んだからにはこの後は君たち甲賀の責任でお願いしたいところだ」

「手を引けといたいたいのか？」

「だって、今日は場所が悪いと思わない？ これ以上このホテルに迷惑かけられないからさ」

その一言に侵入者は一瞬考え込むように顔をうつむけたが、すぐに彼は蔑んだような笑みを浮かべて悠輔を見た。

「お前……その若さで伊賀の頭目なのか？」

「まあ、そういうことになるかな」

そう言つと悠輔はくすつと笑つた。

「そういう君も相当な実力者だね。甲賀の幹部クラスだろ」

「それはお前の想像にお任せするよ」

そう言つと侵入者は破壊した窓ガラスのほうへと一歩また一歩引いた。

絶え間なく吹き付ける風で彼の黒コートは音を立ててはためいた。

「今日は楽しいショーをありがとう。伊賀の若き家元さん」

侵入者は悠輔を見てにやっと笑みを浮かべた次の瞬間、そのまま後ろへ飛びホテルの高層階から飛び降りた。

すぐそばにいる警察幹部相馬泰はそれを見て驚きを隠せない様子だったが、悠輔自身はさほど驚きは感じなかった

彼のことだ。ここから飛び降りたといっても無事に地上に降りれる段取りは出来ていることだろう。

「やれやれ、本当に厄介な相手と出遭ったものだ」

悠輔はため息混じりに一言そう言うと、先ほど侵入者に傷つけられた頬の傷にもう一度触れた

彼は悠輔の問いに明確な答えは示さなかったが、間違いない。あの実力にくわえてこの秘密の会談を知っていたのだ。彼は幹部どころか自分と同じ頭目クラスの間人だ。

そう思うだけで悠輔は少し悔しい思いもしたがわくわくする気持ちも抑えられなかった。

彼と別れた後に急にもう一度彼と刃を交えたいという気分悠輔は襲われていた。

「……おい」

やっと落ち着いた悠輔を見て、呆然と経緯を見ていた相馬はびくびくしながら彼に話しかけた

それを見て悠輔は少し気の張ったように鋭い表情で相馬を振り返ったが、すぐに少し蔑んだような瞳で彼を見返した

「まだ、そこにいたんですか」

「そう言われても……」

逃げる暇なんかなかったんだ。仕方ないだろ。

相馬はそう言いたげな視線で悠輔をにらんだが、その視線はどこか迫力がなかった。

「ともかく、これが僕たちのやり方です」

そう言つと悠輔は踵を返して相馬をじっと見つめた。

「あなたは現代に忍者なんて信じないって言いましたが、これを見て存在を少しは思い知ったでしょう」

「ああ、まあ……」

「あなた方が伊賀か甲賀どちらと提携するか　それは今すぐ結論を出せなんていいませんよ。今日のことを見て決めるなんて……ちよつと酷ですよね」

「……………」

その一言に相馬は顔を引きつらせるばかりだった。

驚愕の事実慣れているはずの警察なのにとにもかくにもここま
で次元の違うものを見せられてしまうと　驚きを通り越してもは
や何も言えなかった。

「まあ、いいです」

悠輔は一言そういつと相馬から目をそらし部屋のドアの方へ歩い
ていった

それを相馬は静止しようとして立ち上がったが、その前に彼はにこっ
と優しいな笑みを浮かべ相馬を振り返った。

「相馬さんは何も手出ししないでくださいね。この事態は僕たちで
処理しますから」

「でも、こんな大事件……」

「僕たちの力を見くびらないでください」

そう言う悠輔の顔は笑っているのだがその視線は鋭くどこか気高
く怖い空気が出ている

そんな彼を見てもはや相馬に出す口など残ってはいなかった。

悠輔はそれを見て満足げな表情を浮かべ悠然とした足取りでガラ
スが粉々に割れた部屋を出た。

そして、この『ハリウッドホテル』であった一件は翌日にはどのマスコミにも報道されずに彼の言った通りなかったことになってしまったのだった。

5話　そして、また日常

どんなに非日常の夜をすごした後でも日常の朝は必ず悠輔の前に訪れる

いつもと変わらない曇りの日の金曜日。

昨日のことで若干節々が痛む中、悠輔の単位取得危機は変わることなくいつもと同じように大学に通わなければならないのだ。

だが、朝の東都大キャンパスはどこことなく落ち着きが足りない。

無理もない。一大イベントである年に一度の東都大学若葉祭があると二週間に迫っているのだから

いつもなら静かな朝のキャンパスだけどこ最近に限って言えば、大工仕事をする者、看板のイラストを書くもの、ストリートダンスの振り付けをチェックする者、演劇のチラシを配っている者たちでにわかな活気に帯びている。

だが、大学生活にさほど固執してない悠輔にとっては年に一度の学祭もどうでもいい存在であった。

それ故に学祭で浮かれほうけている学生が目障りで仕方がなかったのだ。

演劇のチラシを渡そうとした女子学生を悠輔は片手で追い払って深いため息をついた

たかが学祭で浮かれるなど考えられない。まるで別世界のことのように感じたのだ。

自分にはそんなことをしている暇なんてない。

そう思うとキャンパスで思い思いに表現している彼らがどこか疎ましくさえ思えた。

足早に教室に向かいながら悠輔は頬に手をやった。

そこにはあまりにも大きな絆創膏が強い存在感を放っている

さすがにこれは目立つであろう　そう思うとなんとも不名誉な気分が彼を襲った。

それは昨日あの黒コートに傷つけられた爪あと。

本当ならこんな情けない傷をさらして大学など行きたくなんかなかったけど、ギリギリの単位の中なのだから休むわけには行かない。

しかし、同級生たちにこの傷をつっこまれたらどうやって返そう　そう思うとどこか気持ちが少しソワソワしてしまった。

そう思いながらやってきた小さな講義室。大きな絆創膏を貼った悠輔が部屋に入ると一同みなそちらに目が行った。

ヤバイな。

そう思った悠輔はあえて学生が固まっていない窓際の席へ移動すると頬杖をついてその絆創膏を手で隠した

だがそんな偽装工作が学生たちには余計怪しく見えたのだろう。

そんな悠輔を遠巻きに見ながらひそひそと内緒話をする者、いぶかしげにじつと見つめる者、そして、彼に直接真意を聞くこととする者も

「おいおい、藤林よお」

その声を聞いて悠輔はさらに頑なにそっぽを向いた。

声を掛けてきたのはあの大嫌いな軟派者の石野誠だった。

「おまえ、あの後一体何をやらかしたんだ？」

「別に……」

「別にじゃねえよ。それでっかい絆創膏はなんなんだよ」

「これは……」

その問いに悠輔は思わず答えを言い淀んだ。

まさか、言えるはずがない。昨日忍者に襲われてちょっと怪我をしただなんて

「わかったぞ」

石野はそんな悠輔を見てにやっと笑みを浮かべた。

「お前、あの後女とデートだったんだろ」

「はあ？」

「隠すんじゃないよ。俺の誘いの合コンに行かなかったのはそういう意味だったんだなあ……」

何を勘違いしてるんだ、コイツ

悠輔は訝しげな表情を浮かべ悦に入って語る石野を見つめた。

だが、馬鹿な勘違いしてくれたほうが今の悠輔にとっては都合がいいのかもしれない。

下手にしゃべって自分の正体がばれるよりは人に虚像を見せているほうがまだ安全だ。

「で、昨日は相当大変だったのか？」

「さあね」

「さあね、じゃねーよ。あれか、例の彼女と喧嘩したのか？ その絆創膏の下は機能彼女に食らった平手打ちで痣ができたんだろ？」

「勝手に言えよ」

そういつと悠輔は隣で勝手に妄想と鼻の穴を膨らます石野を無視するようリユックから教科書を出した。

「ところでさ、お前の彼女ってなんて名前だったっけ？ たしか冷

「泉大学の娘だったとおもっけど……」

「早紀。進藤早紀だよ」

「そうそう、早紀ちゃん。あの娘かわいかったよねえ。あのときのメンツでは一番の上物だったあ」

名前も忘れてたくせに　悠輔は石野のことを馬鹿にするように鼻で笑った。

「で、結局あれから早紀ちゃんと仲直りしたのか」

「別に喧嘩したなんて言っていないよ」

「あれ？　そうなの？」

その言葉に石野は思わず目を丸くした。

「まずい　その瞬間、悠輔は思わず口を手でふさいだ。」

「喧嘩じゃなかったらその絆創膏は何の傷なんだ？」

「それは……」

その問いに悠輔は再び口を濁した。

ああ、なんて馬鹿なことを言ってしまったのだろう。悠輔は思わず頭を抱えそうな気分になった

あのまま喧嘩で収めていればこの下世話な馬鹿にここまで苦しめられなくてすんだと言っのに

そのときだった。

悠輔と石野の間でけたたましく響いた着信メロディ。

それを聴いた瞬間、悠輔は助かったと安堵のため息を漏らした。

「あ、早紀からメールだ」

悠輔はポケットから赤い携帯電話を出すと、石野のことなど無視してメール画面に集中した。

そんな彼を見てお馬鹿な石野は何を期待したのかそわそわと背伸びしながらその様子をのぞき始めた。

「え？　なんて書いてあるの？　昨日のお詫びかな」

そんな石野を軽くあしらうように悠輔はさらりと一言言った。

「石野君。ちょっと邪魔だから向こう行ってくれない？」

「えええー！　いいじゃん、ただのメールだろ」

「人の彼女のメールを覗き見るほど君は下世話な男なのかい？」

「それは……」

「人のことより自分のことを心配したらどうなんだ」

悠輔のその心無い一言に石野は完璧に返す言葉を失った。

その言葉に仕方なくおずおずと引き下がりがり自分の席に戻る石野を横目で見た後、悠輔は自分を救ってくれたメールにもう一度目を落とした。

【悠輔、明日暇かなー？ もし暇ならメールちょうだい！！ 渋谷で新しい服とか見たいからさ！ ついでにデートしようよ】

なんとも女の子らしいデコメと顔文字でチカチカするほど眩い早紀のメール。

それを見て悠輔は初めて顔を和らげ口元に笑顔を浮かべた。

明日ね……

悠輔は一瞬現実に戻り予定を考えたが、その前に自然に指が動き真つ先に返信メールを送っていた。

【いいよ。付き合っただけでも】

6話 女子大生、進藤早紀

翌日

土曜の午前中、絶え間なく人々が交じり合う交差点、渋谷。

そんな雑踏に身を任せながら、いつものようにあの日本一有名な犬の像の前で悠輔は待ちぼうけを食らっていた。

ふと横を見ると自分と同じ立場の男や女がひしめき合っている。

だけどそのメンツは常に絶え間なく入れ替わっている。

八チ公前で待ち合わせしている者は皆、連れ合いが来ればすぐにそこから雑踏の中へと姿を消していく。

その男女のローテーションのスピードは驚くほど早く、5分も経たないうちにまったく新しい男女に生まれ変わっていた。

それなのに、僕は一体何なんだ？

悠輔はそんな見知らぬ男女の出会いと別れを見て思わず大きなため息をついてしまった。

八チ公前で行われている男と女の早いローテーションに悠輔だけはまったく置いてけぼりにされているのは目に見えている。

まるでこの人の足が速い渋谷にただ一人時間を止められているかのような錯覚を覚えながら悠輔はただそこでじっと時間にルーズな

恋人を待ち続けた。

別に今日が特別ってわけでもない。早紀の遅刻はもはやデートのお約束化している感もある

だが、慣れたことだとはいえ八千公前の相手を見つけて去っていくカップルを永遠と見送っていると、やはりその怒りはふつつと心の中に蓄積していく

いつから待ったか覚えてないけど、その間メールを8通も送ったことはよく覚えている

だけど、早紀から帰ってくる言葉は【ごめん！あとちょっとだから】というこれまた眩いばかりのデコメだ。

東京の女の子ってみんなこんな感じなのだろうか。

悠輔は携帯片手に待ちぼうけを食らいながらただ気まぐれで我がままな恋人のことを思った。

そういえば出会ってから今までわがままな早紀に振り回されっぱなしだ。

数合わせのヘルプで行った冷泉大学の女の子との合コンで初めて出会ったのは3か月前。

同時に彼女のほうから積極的にアピールされて、悠輔はその気がないのになぜかその日のうちに男女の仲になった。

それからメアドを交換したはいいものの、多いときは5分に一回

のメール攻撃。

任務中にまでラブメールが入ってしまうものだからこっちはたま
ったもんじゃなかった。

デートをすれば時間にルーズだし遅刻するのは当たり前。

だけど主導権は完璧に早紀のもので、自分の好きなブティックや
雑貨屋を見つけると悠輔ほっちらかしてずっと居座ってしまう。

それにとんでもなくわがままですぐ拗ねる気分屋のところも手を
焼いている。

まったく 忍者の世界では誰もが恐れる伊賀忍者の次期家元と
して君臨している僕が、東京生まれの女の子相手にどうしてここま
で振り回されなきゃならないのだろう。

だけどそんな早紀を悠輔はどうしても嫌いにはなれなかった。

最初は少し疎ましく感じていたラブメールも、最近は少しだけ来
るのが待ち遠しく感じられるようになっていた。

彼女のわがままなところも少しずつだが認めるようになってい
る自分がいるのだ。

不思議なことにこれが恋って奴なのだろうか……

弱点なんてないと思ってた僕だけど、今は完璧に早紀が弱点だ。

そう思うとなんかこんな彼女に振り回されている自分がなんとも

情けなく感じるのだ。

そんなことを諸々考えてまた深いため息をついたその時だった。

「やつほー。悠輔、待ったあ〜」

そんな甲高い声に悠輔は不機嫌そうな顔をむっと上げた。

そこにはゆる巻きのロングヘアに青いチエニツクとシフォンスカートを合わせた進藤早紀がニコニコしながらこちらに寄ってきた。

「ああ、何分待ったかわからないくらいに」

「ちよつとー！」

「……ん？」

「悠輔、何その絆創膏！」

「え……」

そう言われて悠輔はふと自分の頬の絆創膏を触った。

そつえばこれをつけたままだったのをすっかり忘れていた。

「ああ、これねえ……」

「どーしちゃったの？ 一体……なんか怪我しちゃったの？」

「うーん、話せば長くなるんだけど……」

そう言って悠輔は苦笑いを浮かべた

「この前、ちよつとした不注意でさ……こけちゃったんだ」

「へえー、それでこんな大きな絆創膏ねえ……」

そう言つと早紀は訝しげな顔をしながら悠輔の顔をじろじろと見つめた

やっぱり、今の嘘を怪しんでいるのだろうか……ただこけただけでこんな絆創膏だ。怪しまないほうがおかしい話だ。

でも、現実離れた事実を話より見え見えの嘘を吐いたほうが彼女のためだ。

自分の本当の正体が知られてしまったら彼女だって危ない立場になるのだから……

そんな沈黙がしばし流れたその瞬間、早紀はふつと顔を和らげ笑つた

「やだなあ。悠輔つて意外におつちよこちよいなんだねー」

「あ……ああ」

「でもさ、私、悠輔のそういうところ好きだよ。なんか情けないところが守ってあげたい気分になつちゃう」

「情けない……」

悠輔は引きつったような笑顔を浮かべながら一言そうつぶやいた。
見せてあげられるならば、自分の本当の顔を早紀に見せてあげたい。

それさえ見せれば自分のことを情けないモヤシ大学生だなんて思わないだろうに

「でさ、今日行きたいお店なんだけど……」

「そうそう、それどこにあるの？」

「えーつとね……最低でも5件あるのよ」

「はあ？」

「とにかく私についてきて。早くしないと目玉商品売り切れちゃう！」

早紀は一言そういうと悠輔の手首を不意に握り締めるとそのまま雑踏の中へと走っていった。

それを見て悠輔は「ちょっと待って！」といったが時は遅し、彼女に誘われるまま雑踏うごめく渋谷のスクランブル交差点へと吸い込まれていった。

7話 渋谷の通り魔

最低五件とは言っても

たくさんのブティックの紙袋に囲まれながら悠輔はファッションビルの待ち合わせで不機嫌な顔をして立ち尽くしていた。

かれこれ何時間彼女のショッピングにつき合わされているだろう

悠輔はデートのつもりでやってきたはずなのに、いつの間にか決まったように便利な荷物運びになってしまっているではないか。

なんて情けないんだろう……

悠輔は疲れて落ち込んだようにその場につずくまった。

こんな姿門下の忍者たちに見られたらどうしよう　　とは言っても、彼らのことだ。

もうとっくに次期家元が一人の女の子に振り回される姿は彼らの笑い種になっているに違いない。

日本最強の忍者集団の長である僕がただの女の子相手にこれほど四苦八苦するなんて……

なんて情けないんだ。泣けてくるほど情けない……

でも、落ち込んでばかりもいられない。

悠輔はまた深いため息をついて立ち上がると、ちらつと腕時計で時間を確認した。

PM 1:45

そろそろ本気で昼御飯を食べたいところ。

これ以上早紀に付き合つてられないと思つた悠輔は、大きな紙袋を両手に握り締めながら早紀が居座っている雑貨屋に向かった。

かれこれ三〇分早紀はアロマ石鹸の品定めを続けているような気が悠輔にはしていた。

店から漂うなんとも鼻につくたくさんのアロマが混ざつた複合臭に悠輔は顔をしかめながら、店先の早紀に一言声を掛けた。

「ねえ、おなかすかない？」

「うーん。そうかな？ 今何時だっけ」

その問いに悠輔は「僕は便利な道具じゃない」といつもの調子で言いそうになつたが、その言葉を飲み込んで言葉少なに彼女に言った

「もう2時になる」

「へえー。もうそんな時間なんだ」

そういうと早紀はショッピングピンクの石鹸をかごの中に入れるとスタスタとレジのほうに向かった

「悠輔、ちょっと待ってくれる？ これだけ買ってからお昼にしよう！」

「ああ……」

その気持ち悪い色の石鹸も買った

早紀の買い物好きに悠輔は半ばあきらめの笑顔を浮かべそう思った。

しかし、やっと買い物地獄から抜け出せてお昼にありつけると思うとなんともいえない安堵感が悠輔の心の中を包み込んでいった。

そして、ふうっともうひとつため息をついて店から出ようとしたそのときだった。

「きゃああああっ！」

女の悲鳴がショッピングビルのフロア内に響き渡った。

悠輔ははっとそちらのほうを振り向くと、数人の若い女性が腹や腕を押さえぐったりと倒れこんでいた。

その隣では包丁を持った狂気めいた表情を浮かべた男。その様子はこのファッションビルに似つかわしくない狂気に包まれていた。

「通り魔よ……！」

近くを通りがかった女の人や全ホールに響き渡るような声でそう叫んだ瞬間、周りの買い物客たちはなだれを打つように彼から逃げ出し始める

それに反応して彼も声にならない叫び声を上げ包丁を振りかざしこちらめがけて走ってくる。

途中、追いついた人や転んだ人の足や胸を刺しながら、ずんずんと早紀のいるブティックへと近づいてきたのだ。

「悠輔　！」

周囲のおかしな様子に焦って早紀は悠輔の下へ駆け寄ろうとしたが、彼は彼女に向かって手をかざして強く言った

「来るな！」

それは彼女にとって今まで聞いたことのない悠輔の凜とした声であった。

その一言に早紀はびたつと足を止めるしかなかった。

悠輔の眼鏡の奥の瞳は自然と鋭い光を放ち始める。その時、彼は知らず知らずのうちに忍者としての顔へと変化していた。

逃げ惑う人をなぎ倒しどんどんこちらへ吸い寄せられるようにやってくる通り魔

そして、ついにその場に仁王立ちする悠輔めがけて彼は包丁を付きたてた。

早紀は思わずその様子に目をそらした。その場にいる誰しもが青年に降りかかる惨劇を予想したに違いない。

だが、こんな怒りに任せて振られた刃を交わすことなど悠輔にとっては朝飯前の出来事であった。

悠輔は身体を表情ひとつ変えず身体を少し横にそらせただけで通り魔の包丁を軽く避けていた。

そして、その反動で通り魔の身体は大きくぐらつとふらついた。その瞬間を悠輔は見逃すことはなかった。

悠輔はがらんどろになった通り魔の肩甲骨の辺りを狙って裏拳をたたきつけた。

> i 1 3 7 1 7 — 5 1 6 <

次の瞬間、通り魔は強い衝撃で派手に吹っ飛ぶ。

5メートルほど飛ばされた通り魔はそのままフロアに大の字に寝そべりそのまま動かなくなった。

あまりにも冷たい瞳でそれを見ていた悠輔であったが、周囲のギヤラリーの多さに思わずはっと我に返った。

やばい。ついつい本気を出してしまった……

悠輔はあわてて通り魔の男に近寄り手を触って脈を図ったが、案の定、彼は心肺停止状態だった。

「ねえ、ちよつと大丈夫!？」

その様子を見て早紀は真っ先に店から飛び出し呆然とする悠輔に駆け寄った。

「悠輔、怪我不い？」

「ああ……」

「ああ、じゃないわよ！　だってあなた通り魔をやっつけちゃったんでしょ」

「早紀」

そついつと悠輔は早紀の手をぎゅっと握った。

「え？」

「とにかくここから逃げよう！」

「何で！？　どう言うこと！？」

「説明は後でするから！」

悠輔は一言そう叫ぶと早紀の手を強く引き囲んでくる野次馬たちを割るようにその場を後にした。

おそらく早紀はまだ何が起きたかわかってないだろう。

だからこそ彼女が事実気づく前に悠輔はその場から早く逃げたかった。

これは間違いなく大事になる。

渋谷の超有名ファッションビルに出現した通り魔を取り押さえる
どころか半殺しにしてしまったのだから

でも英雄になどなりたくない。なってはいけないのだ。

伊賀忍者のトップとして自分の正体をやすやすとあらわにするわ
けにはいけないのだ。

「ねえ、本当にどうしちゃったの!？」

急いで事件のあったファッションビルを抜け出した瞬間、早紀は
いぶかしげな顔して悠輔の手を払いのけた。

「なんで悠輔があの場合から逃げ出さなきゃならないの!？ 理由を
教えて！」

「それは……」

「犯人が動かなくなってテンパっちゃったのはわかるけど、それっ
ていわゆる正当防衛ってヤツだから悠輔にはなんの罪もないと思っ
けど……」

「そういう問題じゃないんだ!」

そういうと悠輔は下にうつむき拳をぎゅっと握った

「今は君に深い訳は話せないけど……とにかく、目立つのが嫌だっ
ただけさ」

「目立ちたくないって……どういふこと？ 恥ずかしいの?」

「そうじゃない……訳は話せないけど」

「もう、それじゃあ意味がわかんない」

そういつと早紀はむっとした表情で悠輔の顔を覗き込んだ。

「私たち、これでも立派な恋人同士だよな？ 隠し事ってあんまりよくないんじゃないかな」

「そうはいつけどさ……」

本当のことなんて絶対に話せない。自分が忍者の頭目だなんて口が裂けても言えない。

もし打ち明けたとしても早紀がその現実離れた話を信じてくれるかどうかもわからない。

そんな前にも後ろにもいけない状況なのに、どう早紀に説明すればいいのか 悠輔にはまったくわからなかった。

「もう、何その沈黙！」

黙りこんでしまった悠輔を早紀はむっとした表情で見つめて言った。

だけど、悠輔はそんな彼女に何もいえなかった。

「ねえ、悠輔。私に話していない秘密でもあるの？」

「あるよ……」

そういつと悠輔は早紀に背を向け一言いった言った

「当たり前じゃないか。君に言えない秘密なんて星の数ほどあるよ」

「じゃあさー！」

「でも、今は話せない！！」

悠輔の強いその一言に早紀は思わず出しかけた不満を引っ込めた。

彼の背中はいつもととは違いどこか物悲しいものを感じた。

「ごめん。今日はこれでデート中止してもいいかな？」

「え？」

「こんな気持ちで君と付き合ってたら君に不快な思いをさせてしま
う気がする。それなら、今日はもうやめたほうが」

「でもさ、そんなこと私気にしないよ？」

「気が進まないんだ」

悠輔は一言そういつとつつむき加減に先を急ぎだした。

早紀はそんな悠輔に一瞬付いていこうと足を速めたが、初めて近
寄りがたい空気を出す彼を見てすぐに足を止めてしまった。

そのうち悠輔は渋谷の雑踏の中に煙のように消えていく。

そんな彼を呆然と見送りながら早紀は今日初めて見せた彼の別の顔にもう一度鳥肌を立てた。

今までただの無愛想で情けない彼氏だったのにほんの少し別の面を見ただけでどうしてこうときめくのだろう。

そう思うと早紀はますます藤林悠輔という男のすべてを知りたくなつた。

8話 事件現場

「今日の午後二時ごろファッションビル『シャイニーズ渋谷店』でまたしても通り魔事件が発生しました。午後のショッピングを楽しんでいた若い女性たちでにぎわっていた店内は大混乱。犯人は女性4人男性2人を切りつけ、うち2人は重傷を負って近くの病院に運ばれました」

悠輔たちが去ってまもなくしてあのファッションビルは黄色の規制線がぐるぐると張られていた。

いつも人でごった返している場所であるが、今日だけはさすがに様子が違う

たくさんのテレビカメラ、記者やライターなどのマスコミ関係者に制服を着た警察官、そして何十にも重なった若い野次馬たちがその店をぐるりと取り囲んでいた。

「しかし、この店にある救世主がいたと言つのです。目撃者によると犯人はある青年によって取り押さえられたという話です。彼はその後騒ぎのそばから姿を消してしまい行方がわかりませんが、彼がいなければこの事件はもつと大惨事になっていたことでしょう」

能天気カメラに向かってピースサインをする馬鹿な野次馬たちを抑えながら年配の女性リポーターは淡々と原稿を読んでいる。

その横を一人の男が規制線に向かってのそのそと近づいていった。

ぼさぼさの黒髪にいかにも眠たそうな瞳、服装は制服の警官であ

るがどことなく着崩していてどこかだらしない印象を与えた。

そんな彼を見て、近くにいたかつちりと制服を着た警察官は声を掛けざるを得なかった。

「ちょっと、君。どこの署の者だ？」

「俺？ 渋谷署だけど？」

彼はぼりぼりと頭をかきながら一言言った。

「じゃあ所轄のところのか……それよりも、君。何だねそのだらしない服装は！」

「これが普通ですけど？」

「そうじゃなくて……一応ここは事件現場で一般市民やマスコミがたくさん見ているんだ。そういうところくらいいつもより気合入れて」

「どうでもいいけど、早く入れてくれませんか？ 俺、仕事あるんで」

「仕事」

その言葉に警察官は彼を訝しげに見つめた。

いくら自分が警察官だと名乗っても彼の年や背格好を考えて中で捜査する立場の人間じゃない。

そんな彼を入れるべきなのか、否か

「聞いているのか？」

彼は特段にゆっくりと警察官に語りかけた。

いつの間にか眠たそうだった彼の瞳は奥で不思議な青白い光を放ち始めていた。

「俺はこの中に入らなければならぬんだ。後で後悔しなくてはそこをどいてもらいたい」

彼のその言葉を聞いて警察官は不思議な感覚に襲われた。

自分より年若く階級も明らかに低そうな男であるのに、彼の身体からは強い威圧感が見る見ると吹きだしている。

それに彼の眠そうであり鋭そうでもある不思議な瞳を見つめると、自然と彼の言ったことこそ正しいと思えてくるのだ。

頭の中がその不思議な感覚でぼんやりともやに覆われていった次の瞬間、警察官の身体は無意識のうちに動き出し彼に道を譲っていたのだ。

「どつぞ……」

その言葉もまったくの無意識のうちのもの。

次の瞬間、警察官はふと我に返りその言葉を訂正しようとしたがもう時は遅し。彼は悠々と現場のファッシュンビル内へと入ってい

った。

一体、何なんだ……あいつ。

頭を覆っていたもやを振り払うかのように頭を振るう彼の横でテレビ局のレポーターは原稿の結を読み始めていた。

「
なお、容疑者の男は心肺停止の状態で病院に運ばれ治療中
です」

9話 警察官、上月静夜

ファッションビルの中は水を打ったようにがらんと静まっている。

いつもなら女性客でこった返す午後のひと時、人っ子いない館内は寂しげに照明が落とされている。

館内にいるのは刑事や鑑識などの警察関係者に、それを心配そうに眺める店の従業員くらい。

そう、このファッションビルは突如として事件現場へと転落した。

午後のひと時急に現れた通り魔の男にそれを制止させた男 二人がこの場所に残した衝撃はあまりにも大きすぎた。

「しかしまあ……」

スーツを着込んだ若い刑事 海原つなほりは思わず感嘆の声を上げた。

「何でまたこんな場所を通り魔とはねえ……若い女の子にそんなにうらみでもあったのかな？」

「さあな、それは犯人に聞いて見なきゃわからんだろ」

フロアに点々と置かれた鑑識札をしゃがみこんで見ていた彼の上司である中堅ほそかわつばい刑事 細川ほそかわは不機嫌そうな声で一言言った。

「でも、犯人の田上たがみ明央あきおは今生死をさまよっているとかいう話じゃないですか」

「そうだ……」

「大体わけがわかりませんよ。何が起きたか知らないけど通り魔の
ほづが心肺停止状態って　　どういうことですか」

「つまり……あれだよ」

そういつと細川は困った表情を浮かべその場に立ち上がった

「目撃者の話では犯人を取り押さえた青年がいたというじゃないか
……そのときの格闘で犯人側がそうなったとしたか……」

「まさか細川さん、それを信じるわけじゃないでしょうね？　刃物
で武装した相手をねじ伏せるなんて警察でもなかなか出来ませんよ」

「まあ、そうなんだが……」

「まったく信じられませんか。ただの大学生風の青年が犯人を取り
押さえた反動で犯人が心肺停止なんて　　本当ならその青年、とん
でもない相手ですよ。このまま野放しにしてたら通り魔より危ない
かも」

最近の若い奴は好き勝手なことばかり言うなあ……

隣で不満をたらたらと言う後輩海原の話半分聞いていた細川
は少しむっとした表情を浮かべそう思った。

だが、彼の言い分もわかる。

こんなことありえない。武装した通り魔を素手で普通の青年が取り押さえるなんて 相当な訓練がないとそんなこと一般市民には無理だ。

それどころかその青年との格闘で通り魔の犯人は心肺停止に陥っているなんて 海原の言うとおり確かにそれはとても恐ろしい話かもしれない。

だが、一番事情を知っているはずのその青年は騒ぎに乗じてこのビルから消えるように去ったという。

犯人の意識も戻らず、彼も行方不明 こんな状況でどう捜査をすればいいというのだ？

「あ………」

海原はふとフロアの別の場所に目を移した瞬間、急に怪訝そうに顔色を変えた。

「 どうした？ 」

「 何で？ 何で上月（うづひ）がここにいるんだよ 」

「 上月 ？ 」

彼の言葉を聞いて細川はふと顔を上げると、その目の前にはいかにも場違いと言われんばかりののだらしなさそうな警察官がじろじろと現場を見つめていた。

「 まさかあいつが？ 」

「そう。上月静夜（しんじや）、俺の同期なんですけど、コイツがまたやる気がなくてだらしのない男でね……今は多分うちの署で資料係してると思うんですけど」

「資料係！？ 何でそんな奴が現場にいるんだ！」

「そんなこと俺に聞かなくてください。大体现場に上月がいるなんて……明日多分雪ですよ」

「お前、そうは言ってもあいつの同期なんだろう。それくらい聞いて来いよ」

「そうは言いますが……」

細川のその命令に海原は一瞬嫌そうな表情を浮かべたが、先輩の無言のプレッシャーに負けしげしげと彼のほうに近づく。

同期の海原でさえいつも資料室でぼけーっとしている姿しか頭に浮かばない上月静夜だが、今日の雰囲気はどことなくいつもと違う。

それは普段現場になんか出ないからそう見えるだけだろうけど、今日の上月は真剣を通り越してどこか近寄りたいくらい雰囲気を出しているように思えた。

「……よう。上月」

海原はそんな静夜の横に行き、彼の右肩をぽんと軽くたたいた。

その瞬間、上月静夜は強く反応し鬼気迫る表情でそれを強く振り

払ったのだ。

「何をする!」

上月は海原にたたかれた右肩を持ちながら彼をきつとにらみつけた。

その様子はどこか右肩をかばっているような風にも写った。

「何もしてねえよ! 何勘違いしてるんだ!」

その様子に海原はむっとした様子で反論したが、それを無視するかのように上月はまた現場をじろじろ眺めだした。

「って 聞いているのかよ!」

その一言に上月は淡々と一言言った。

「邪魔だから向こう行ってくれないか?」

それは俺たちの言う台詞だっつーの!

あまりにもつれない上月の態度にそう言いたかったが、なぜか今日はその一言が出なかった。

今日の上月静夜は自分の知ってる顔とは少し違う。

あのやる気がなくてとぼけている彼が何をかぎつけたかは知らないけど怖いほど真剣になっているのだ。

「なあ……」

海原はそんな上月の横にしゃがみこむと下手に一言聞いた。

「一体何の風の吹き回しだ？」

「何が？」

「だって、お前現場の人間じゃないだろ。なのに今日に限って……」

「個人的に興味を持っただけだよ」

そういつと上月は海原を避けるように立ち上がった。

「興味って……この犯人か？」

「いいや、違うね」

上月はそういつとにやつと不気味な笑顔を浮かべた

「通り魔を意図も簡単に心肺停止させてしまった彼に　　ね」

「……はあ？」

その言葉に海原は思わず頭をひねった。

上月が何に興味を持ったかは知らないが、いつもはやる気がない警察官で有名な彼がこれほどまで燃えている姿はとても奇妙に思えた。

「でもさあ、その男を捕まえてどうしようっていの？　もし容疑者がこれで死んじゃっても状況からして彼はどう考えても正当防衛だし、犯人逮捕に協力してくれたんだから警察は彼を表彰するしかできないだろう……」

「表彰か……それも面白いね」

そう言うと上月は海原のほうを向いて一言聞いた。

「容疑者が心停止してから何分立つかな？」

「そうだな……かれこれ事件が起き三〇分程度経つからなあ。もう容疑者はあの世かも知れんな」

「そうかな。案外息を吹き返してるかもしれないよ」

「へ？」

どういうこと？　そう聞きかけたその時だった。

静まり返ったフロアに携帯のバイブ音が響き渡った。

上月は表情一つ変えずに携帯電話を取り出すと恐ろしく冷静な口ぶりで淡々と電話に淡々と答え始めた。

何を話しているかわからないが、ただ海原には電話の対応をしている彼は近寄りがたい殺気に似た何かを出しているように思えてならなかった

やがて上月にかかってきた電話はすぐに切れた。

彼はひとつ息を吐くとチラツと横の海原を見て言った

「容疑者、息を吹き返したらしい」

「え？ それホントなのか？」

でも待てよ　上月の情報で少しだけ希望が持てたが、次の瞬間海原に大きな疑問がわいた。

容疑者が息を吹き返した情報が何故真っ先に彼に来るのだろうか。

やる気のない警察官である彼にそれを知る権限などない　はずなのに。

それを問いたただそうと海原が上月に向かって口を出そうとしたその時だった。

「それじゃ……俺、用事思い出したから」

「ちょっと待てよ。一体何の用事なんだ」

「あんたには関係ない話だ」

上月はそう一言言い放つと足早にフロアを去って言った。

一体あいつは何様なんだ　出世をあきらめたはずの同期の男を呆然と見送りながら海原はむっとした表情でそう思った。

ただひとつだけ言い切れること。今日の上月静夜がいつものやる

気のない男とは違う顔をしていたということだけ。

それ以外はまるで何もわからなかった。

10話 容疑者、田上明央

この事件の一報を聞いたときから上月静夜は不思議な胸騒ぎを覚えていた。

これが渋谷のファッションビルを襲った単なる通り魔事件だけだったのであれば、わざわざ現場に向かうことなどなかった

普通の事件など無能な刑事たちに事件を任せておけばそれでいいのだ。

渋谷署の資料係の自分が出る幕などないことは静夜にも重々わかっていていた。

だけど、今回はただの通り魔事件とはまったくの別次元の大事件が静夜の胸を響かせた。

それは通り魔がある若者によっていとも簡単に取り押さえられたという非常事態であった。

初めてそれを知ったとき、静夜はほかの誰よりも早くその青年がどんな顔を持つ人間なのかわかってしまったのだ。

それを教えてくれたのは、彼が通り魔を心停止にまで追いやった技だった

死の拳 人の神経が集中している肩甲骨あたりを強く殴打することで敵を一瞬にして気絶させるといふ忍者独特の技。

ただ加減が強いと一撃食らわせただけで心停止しかねない文字通りの死の拳

彼も手加減すればよかったものの素人である通り魔ごときに加減を怠ったせいでこの俺に忍者であるというシグナルを出してしまったのだから 本当に馬鹿な奴だ。

だが、そのおかげで彼を捜す手間が省けた。

ここまで来たら警察も彼の居所を捜すことに腰を上げなくてはならないだろう。そうすれば自然と自分を彼の元へ連れて行ってくれる。

それにこれほどまでの使い手だ。もしかしたら自分の捜し求めている相手かもしれない。

そう、おととい刃を交えたあの若き伊賀の頭目に行き着くかもしれない。

それを思うと静夜は高揚感を抑えることができなかった。

滅多に行かない現場にも足を運び、ついには犯人の田上明央が入院している病院にまで来てしまった。

すべては誰よりも早く通り魔を抑えたあの男に出会うため。

そして、いち早くその相手と刃を交わらせるため

静夜は誰にとがめられることなく、病院の奥へとゆっくりと歩いていく。

本来ならば入院している容疑者がいる病棟など自分みたいな平警察官が入れるような場所ではない。

だけど、彼はここに入るため少しだけ裏の人脈を使っていた。

普段は冴えない男を演じて隠し続けている本当の顔、それを知るものはほんのごく僅かな警察幹部の協力者だけである。

そしてそんな彼らの力を使って静夜は面会謝絶の田上明央の病室に入り込んだ。

すべては田上から件の男の情報を聞き出すため。その男を探し出すため

それは警察のためでもなんでもない。すべては甲賀のためだった。

静夜は面会謝絶と書かれた病室のドアをゆっくり開けると、部屋の奥で寝ている田上明央をじろりと見た。

息を吹き返したとはいえ彼は酸素吸入器を口に付け完璧なるこん睡状態だ。

だが、静夜はそれを気にするそぶりもなく淡々と田上のそばに近づいた。

そして、何を思ったか静夜はこん睡状態で絶対安静の田上の胸をすばやく一突きした。

その瞬間、田上はカッと目を見開いた。

そしてそんな彼の耳元に口を近づけある言葉を吹き込み始めたのだ。

「おはよう。田上くん。君はある男によって深く眠らされていたのだよ。でも俺が君の深い眠りを覚ませてあげる。だから、俺に真実を話して欲しいんだ。君を眠らせた男のことを俺に話してほしいんだ」

その言葉を聞いて田上はぎょろりとした目でゆっくりと静夜のほうを向いた。

それを見て静夜はにやりと不適な笑みを浮かべた。

「俺の手が君の胸から離れれば君は永い眠りから目覚める。そうしたら真実をすべて俺に話すんだ。これは命令だ」

そういうと静夜は田上に突き立てた手をゆっくりと離れた次の瞬間、田上はごほごほと咳き込み始めた。

そして、誰に言われることなく彼は勢いよく酸素吸入器を口からはずした。

荒く息をしながら意識が完璧に戻った田上はゆっくりと静夜の顔を見上げた。

彼は冷たい視線で田上を見下ろしながら、先ほどの暗示を促し始めていた。

「あ、あいつに……こ、殺される!」

田上は悲壮な声を絞り上げて一言そう叫び冷たい瞳で見下ろす静夜にすがりついた。

「な……何なんだ、あの男は　まるで機械のように、俺に襲い掛かってきやがった。俺は……あいつが怖い。あの赤い瞳が……怖い！」

「赤い瞳　？」

その一言に静夜の表情が変わった。

自然と高揚する胸騒ぎを抑えながら彼はゆっくりとした口調でさらに彼の真意を問うた。

「君を襲った彼はどんな風貌の男だったのかい？　何でもいいから覚えてることを言ってごらん」

そう言つと静夜は彼の目の前に手をはらって見せた。

すると先ほどの緊張し怯えきつた田上の顔がふつと糸が切れたように無表情になった。

そして淡々とした口調でまるで機械のように語りだした

「あの男の風貌は……背格好は175センチほど、髪の毛は短く渋い感じの茶髪、赤く鋭い瞳の上にはインテリ風な眼鏡をしてたけど、あれは完璧なイミテーションであるのは間違いない。それに」

「それに？」

「……」

そう言うと田上は右頬にかかるく触れて言葉を続けた

「ここに大きな絆創膏をしてあった」

「右に……大きな絆創膏？」

その言葉に静夜の細い目を大きく見開いた。

右頬の傷　それに静夜は大きな心当たりがあったのだ。

すべては3日前、あのホテルで激突してしまった我が甲賀と因縁の宿敵伊賀

あの時出会った若い伊賀の頭目と刃を交えたその瞬間、静夜は彼にその場所に傷を負わせたことをしっかりと覚えていた。

なるほど、そういうことか

疼くような鈍い痛みと同時に心のそこからこみ上げてくる熱い思いを感じながら静夜はぎゅっと右肩を手で押さえた。

あの時、彼の頬を傷つけたのと同時に受けた彼の一撃　まるで彼の動きに連動するようにそれが急に痛み出したのだ。

だが、その痛みは彼にとってとても心地のいいものであった。

なにせ、まさかもう一度刃を合わせたいと思っていた相手がこん

な形で自分に形跡を残してくれたのだから

それを思うと静夜はうれしくてたまらなかったのだ。

「ありがとう」

静夜は一言そういつとまた田上の目の前で手をゆっくりとかざした。

するとまるで深い眠りに落ちるかのように田上はぐったりと意識を失っていく。

彼が再び目覚めるとき、自分にあつたことはすべて忘れてしまっている。静夜はそういう暗示を田上にかけていた。

すつすつと気持ちよさそうにベッドで眠る田上を確認すると、静夜は音もなく彼の病室を去っていった。

しんと静まり返った誰もいない病棟の廊下。静夜は平然とした顔で携帯電話を取り出し通話し始めた。

「もしもし……俺だ」

前に進みながら電話をする彼の瞳は普段見せるダメ警察官のものではない。鋭い光と殺気じみた何かを秘めた誰しもが恐れおののく甲賀忍者の頭目の青白い瞳へと変貌していた

「伊賀の者のことは大体頭に入っているだろうけど、少し詳しく調べてもらいたい人物がいる。奴らを率いている人物の中に特段に若い忍者がいるはず。年は二十歳前後といったところだろうか。身

なりからして都内の大学に通っているらしいから、彼の身边を徹底的に洗いなおして欲しいんだ、それに」

そういうと静夜は歩いていた足をぴたっと止めた。

そして口元につつすらと笑みを浮かべて一言付け加えた。

「彼の居場所がわかったらすべて俺に報告しろ。それをどうするかって？ 後は俺に任せろ。今回の件で彼を罠にかけるのはそう難しくはない話だ」

11話 事件記者、叶陽一郎

本棚に並べられた分厚い哲学書や心理学の参考書を悠輔はこっそり取り出し乱暴にダンボール箱の中に詰め込んだ。

大学生の一人暮らしだから荷物なんて大したことないと思っていたけど、いざ引越しとなるとそれ相応に荷物はいろんなところから出てくる。

それをまとめるだけで貴重な時間が奪われていると思うと悠輔はなんとも憂鬱な気分になった。

「しかし、家元がこんな時期に引越しを決めるとはなあ……」

どこからか出てきた模型飛行機を飛ばしながら叶陽一郎は一言つぶやいた。

「理由はなんだ？ やっぱ例の通り魔事件か？」

「それ以外に何かあるって言うんだ」

悠輔はその問いに連れない態度で答えた。

「でも、そんな夜逃げみたいに逃げることはないんじゃないの？ 第一お前が犯人じゃないんだしさ」

「君は認識が甘すぎる。だからこそ住所を変える必要があるんだ」

「ほう……まるで警察に住所がばれるのを恐れているようだな」

陽一郎のその言葉に悠輔は否定はしなかった。

ダンボールに本を詰め込み終わってガムテープで封をしながら悠輔はため息混じりに答え始めた。

「あんなことをしでかしてしまったんだ。警察は僕を事件の参考人として捜しているに違いない。それよりも恐れているのは、その警察内部に他流派の人間が混ざっている可能性があるからだ」

「ほう……それはありえない話じゃないな」

「この前のホテルで甲賀に襲われた件だって結局は警察がらみだ。奴らが今回の件を使って僕を、伊賀を追い詰めることのできるまたとないチャンスなんだからさ」

「なるほどな」

それを聞きながら陽一郎は戻ってきた模型飛行機をキャッチしながら言葉を続けた

「でもさあ、もし悠輔の予想が本当だとしたら、いまさら引越したって無理だと思うなあ。だって向こうも俺たちと同じ忍者だぜ？」

「それくらいわかってる。僕はただ時間を稼ぎたいだけだ」

悠輔は明らかに不機嫌そうに答えた。

「住所さえ変えてしまえば向こうだってまた調査のやり直しだろ。」

それだけの時間さえあれば伊賀の力を使って事件をもみ消すことだ
つてできる」

「ほほう……自分の不始末のために俺たちを総動員するわけだ」

「……その言い方は悪意を感じるな」

そうとうと悠輔は本が詰まったダンボールを後ろにまわすと、陽
一郎のほうをじっと睨んだ。

「そういう日の丸テレビの記者さんはこんなところで油を売ってて
いいの？ あんまりサボりすぎるとクビになるよ」

「あつれー？ 俺一応取材に着ただけだなあ。渋谷の通り魔を取
り押さえた英雄にさ……」

冗談をこぼす陽一郎を見て悠輔は深いため息を付いた。

叶陽一郎はこう見えても表の顔はテレビ局の報道記者をやってい
るのだから驚きだ。

しかし、彼の働きによって伊賀の意のままにマスコミ操作ができ
るといふ利点もあるのだ。

「何度も言うけど、例の通り魔事件はちゃんと僕の存在はもみ消し
てくれるよね」

「まあ、うちの会社は何とか報道操作はできると思っけど すべて
のマスコミが俺たちの意のままに動いてくれるわけじゃない」

「 だろっね」

そついうと悠輔は苦々しい顔をした。

「警察と同じようにマスコミにも他流が混じってる可能性があるもんね。一概にすべて握りつぶせるようになうまい話じゃないか」

「そついうことだ」

陽一郎はにやつと笑いながら煙草に火をつけた。

「でも本当のところあの事件の英雄が目の前にいるんだつたら特ダネとして社にもって帰りたいところだ。そつしたら俺も少しは出世するかもしれないし……」

「そんなことしたら、殺すよ」

笑顔を浮かべながらそついう悠輔の顔を見て陽一郎は苦笑した。

「やらねえよ。俺、出世より命のほうが一番大事だし」

その時だった。

雑然と散らかった悠輔の部屋にけたたましくインターホンが鳴り響く

悠輔はそれにはつとして対応しようかと立ち上がったが、それよりも先に陽一郎がそれに対応しようと扉を開けてしまっていた。

「はいはい、何の御用ですか……」

「あ……」

彼の目の前にいたのは一人の女子学生　悠輔の恋人である進藤
早紀だった。

だが、早紀にとって叶陽一郎という人物と出くわすのはこれがは
じめてであった。

180センチ強ある偉丈夫にくわえ無精髭に加え煙草　早紀に
とっては彼の存在はとても威圧的にしか思えなかった。

「あの……悠輔いますか？」

「悠輔　？」

その言葉を聞いてさすがに鈍い陽一郎でも真実に容易に気づくこ
とができた

早紀の顔を見るなりにやりとどこかいやらしそうな笑みを浮かべ
彼女を見つめた。

「そっかー。君が悠輔を骨抜きにしちゃってる例の彼女ってわけね
え」

「馬鹿！　余計なこと言うな」

その言葉を聞いて悠輔はお尻に火が付いたように陽一郎に食って
掛かった。

いつもなら殺気じみた鋭い視線であるはずの彼の瞳は今日に限ってどこか迫力がなかった。

「ほら、彼女を目の前にするとそうやってムキになるんだからあー」

「うるさい！」

そういつと悠輔はキツと牙を見せて唸り忍者のみ通じる心の会話『心読』で陽一郎を警告した

(早紀の前余計なこと言うな。本気で殺すよ)

(おーおー、家元は恐ろしいことを言うな。それ声に出して言うてみたら?)

(とにかく君は何の関係もないんだから消えてくれない? あんまり僕を怒らせると どうなるかわかるよね?)

(脅しか……やっぱりそれも早紀ちゃんに聞こえる声で)

その一言に悠輔は陽一郎の胸を軽く小突いた。さっさと部屋の奥に消えろと言わんばかりの視線とともに。

それを見て陽一郎は「しゃあないな」と苦笑を浮か段ボールがちらかる部屋の奥へ消えていった。

悠輔は彼を気にして早紀と一緒に部屋の外へ出ると、ばたんとドアを閉めた。

「ねえ、悠輔……」

「ん？」

「さっきの人……だれ？」

やっぱりその質問からか　悠輔はそれを聞いて天を仰いだ。

「んー。あれ僕の従兄なんだ。一応テレビ局に勤めてるみたいだけど……」

陽一郎が従兄であるというのは本当の話。悠輔の父と陽一郎の母はきょうだい関係だ。

だが、何も知らない早紀にはそれ以上の秘密を喋ることは到底無理だった

陽一郎が伊賀忍者の幹部であることも、悠輔にとって右腕的存在であることも絶対に口外してはならないことだった。

「へえ……テレビ局の人なんだ。見かけによらないね」

だが何も知らない早紀はテレビ局員という単語だけに強く反応していた。

「　　でしょ？」

悠輔はそんな彼女に乗っかるように言葉を進めた。

「僕も本当に謎だなんて思ってたんだ。あんな不良がよくテレビ局に入社できたなんて」

「でも、すごいじゃん。マスコミ関係の親戚がいるなんて　やっぱり悠輔って本当に育ちのいい家系なんだね」

「育ちのいい？」

「だって前、言ってたじゃない。お父さんは地元三重の県議会議員だって言ってたじゃん」

「あ……」

先のその言葉を聞いて、悠輔はいまさらながら口を押さえた。

付き合って間もないころだろうか　家族構成を聞かれたときうつかり喋ってしまったのかもしれない。

「本当に悠輔ってすごいよ。親は県議員だし親戚にテレビ局員はいるし　そんでもって本人は天下の東大生だよ。なんか……手の届かない存在みたいだわ」

「言いき……」

そういつと悠輔は恨めしい目で早紀をチラッと見た。

「で、ここに来た用件は何？　そんな世間話しにきたわけじゃないんでしょ」

「もう！　どうしてあなたはそう無愛想なのかなあ」

そんな悠輔の態度が不服なのか早紀は少しむくれながら言った。

「悠輔、こんな時期に本気で引越す気なの？」

「そうだけど？」

「そうだけじゃないわよ。引越す理由がさっぱりわからない！」

「理由ねえ……」

その言葉に悠輔は困ったように頭をかいた

本当の理由など言えるはずがない。他流派の忍者にかぎまわれないから引越すなんて 早紀に通用する言葉じゃない。

「あんまり理由っていう理由なんてないんだけど しいて言えば、この部屋……出るんだよ」

「出る？」

「そう……コレがね」

そういつと悠輔は幽霊のまねをしながら早紀に迫っていった

それを見て早紀は身体をびくつとさせて驚いた。

「きゃー！ それ……本当」

「ああ、本当さ。だってこころら辺 昔、墓地だったらしいしな」

悠輔はわざとおどろおどろしく早紀に方って見せた。

彼女はこの手の話が苦手なのだろうか　急に顔面蒼白になり緊張した面持ちになった。

「まあ……それなら仕方ないのかもしれないけど」

「そう、幽霊と一緒になんか寝てられないもんね」

「うん……」

早紀は言葉少なに一言そういつとぴたっと黙り込んだ。

そんな彼女を見て悠輔はふっと優しい笑みを浮かべ彼女の頬を軽く触った。

「大丈夫。新しい引越し先は君にちゃんとおしえるから……」

「本当？」

「今度は霊が出ないアパートだと思うから君も寄ればいいよ。まあ、どうなるかは先の話だけだ」

くさい台詞だ　悠輔は自分が言った矢先カツと頬を紅潮させた。

だが、悲しいことにごうでも言わないと納得しないのが進藤早紀という女性なのだ。

「　ありがとう」

くさいくらい甘い言葉に早紀はにっこりと笑って見せた

とりあえず今日も自分の本心は偽れたようである。

「せっかく来てもらったんだけど、今日があいにく搬出日なんだ」

「うん……」

「大してかまってあげられないけどごめんね」

「ううん、いいの！」

そういうと早紀は気丈に笑って見せた。

「私は疑問が解決したからそれでいいの。それに従兄さんにずーっと手伝わせっぱなしもまずいんじゃない」

「ああ……」

あいつは別にいいんだ。僕のほうが上の立場なんだし

悠輔はそういいたかったがその言葉を噛み砕きながらにっこりと作り笑いを浮かべた

「んじゃ、私 今日帰るわ」

「本当にごめんね」

「ううん、気にしないで。引越し先、ちゃんと教えてね」

早紀はそう微笑むと学生用アパートの細い廊下を歩き始めた。

そんな彼女の後姿を見送りながら悠輔は深いため息をひとつ付いた

いつまでこんな嘘ばかりつかなくちゃならないのだろう

そう思うと悠輔の心の中に何か重いものが垂れ込んだ。

正体を隠すための嘘は悪い嘘じゃない。

今までそう思っていたけど、何故今になってこんな罪悪感を覚えなければならぬのだろう。昔は、こんなはずじゃなかったのに

「大丈夫。新しい引越し先は君にちゃんとおしえるから」

悠輔の耳元で低い声で響き渡った声に彼はびくつとそちらを振り返った。

そこには意地悪そうな笑顔を受けた陽一郎がニヤニヤと笑顔を浮かべて立っていた。

「馬鹿！ 冗談が過ぎるぞ！」

悠輔はそんな陽一郎にムツとした様子で散らかった部屋に再び入った。

「でも、まさか家元の口からこんな甘い台詞が出るとはなあ」

「他の門下の者に言ったら殺すよ」

「俺が言わなくても直に噂になるんじゃない？」

「」

その一言に悠輔は反論が出来なかった。

悔しそうに唇をかみながら悠輔は黙々と荷物をダンボールの中につめた。

しばらく雑然と散らかった二人の部屋の中に沈黙が垂れ込んだ。

悠輔も陽一郎もお互いにそれ以上しゃべろうとはしなかった。まるで暗黙の了解でそれ以上しゃべらないようにしているかのように。

やっと荷物が一通り片付いて悠輔がふうとため息をついたその時、またしてもインターホンがけたたましくなった。

「待つて、今度は僕が出る！」

また、来客に対応しようと立ち上がった陽一郎を制止するように悠輔は叫ぶと、大またで散らかる荷物をまたぎながらドアに近づいた。

まさかまた早紀が訪れることはないとは思うけど、やはり陽一郎に対応させるのは不安だ。

だがドアを開いた瞬間、悠輔が予想だにしなかった人物が立っていたのだ

「あのう……」

そこに経っている人物を見て悠輔は愕然とした。

その男の服装は濃紺の警察官の制服だったのだ。

「なにか？」

悠輔は引きつった顔を隠さずに一言聞いた。

「藤林 悠輔さんのお宅はこちらでいいですよね」

「……………」

その言葉に悠輔は硬い表情のまま黙って頷いた。

それを見て警察官はにやつと笑顔を浮かべた。

「よかったー！ この情報で間違つてなくて。信頼できる者からの情報じゃなかったから不安だったんですよね」

「あの……ご用件は？」

悠輔は一言そう聞くと、警察官は悪気のない笑顔を浮かべた

「この前、渋谷の方で起こった通り魔事件であなたが参考人になっているんです。とりあえず署のほうまでご同行願えませんか？」

12話 対面、伊賀と甲賀

何故こんなに早く僕の居場所を突き止めたんだ？

悠輔はその事実には愕然とするばかりだった。

日本の警察がそれほど優秀ではないことはその世界にいる悠輔にとつて知り尽くした話だ。

それなのにこんな短期間で自分の居場所を突き止めるなんて今の警察でそれほどまでに迅速に動けるものなのだろうか？

そんな疑問を持ちながら悠輔はしぶしぶ渋谷署に向かう羽目になった。

もちろんこみ上げてくるのはどこにも吐き出せない怒りばかり。

それが自分に向かっていているのか警察に向かっていているのかはわからないけど、ただただ怒りだけがこみあげてくる

それは渋谷署の取調室に通された瞬間、ついに爆発した。

「ちょっと！ いい加減にしてください！」

悠輔は刑事が取調室のドアを閉めたらすぐに噛み付いた。

「何で取調室になんか案内するんですか！ これじゃあ僕がまるで犯人みたいじゃないか！」

「まあまあ、落ち着いてくださいよ。藤林さん」

海原と名乗った若い刑事はお冠状態の悠輔をおろおろしながらなだめた。

「別にあなたを犯人扱いしてるわけではありませんよ。現に犯人は無事あなたの力添えで逮捕できたのですから」

「逮捕？」

その言葉に悠輔は眉をひそめた。

「ええ、最初心配停止状態で見つかった容疑者の田上明央は無事回復して昨日逮捕できました。ご協力、本当にありがとうございます」

「え」

犯人、死んでなかったんだ　それを知って悠輔は安堵のため息を付いた。

あまりにも唐突な事件であったため手加減をすっかり忘れてしまったことが気がかりだったためその朗報は少し悠輔の心を和らげた。

「　で、今日は何で僕を呼んだのですか？」

悠輔はゆっくりとパイプ椅子に座りながら、刑事の海原をじろりとにらみつけた。

それを見て海原は一瞬顔を硬直させた。悠輔の瞳には言いようのない威圧感がこめられていた。

「ええ……」

海原はそんな悠輔から目をそらすように、書類に目を通した

「まあ、参考に話を聞こうかなと　あ、怒らないでくださいよ。本当に参考程度なんで気を張らないでくださいね。その後で　通り魔の容疑者を捕縛した藤林さんを我が署で感謝状を送ることになりました」

「何？　表彰だって　？」

その言葉を聞いて悠輔は顔に色を浮かべた。

「そんなこと聞いてない！」

「まあまあ、そんな事言わないでくださいよ。今日は新聞やテレビ局も来るらしいですよー。なんせ渋谷のど真ん中でおきた通り魔を解決した張本人なんですから」

海原の話を聞くたびに悠輔の顔は一気に青ざめていった。

警察で表彰？　テレビ局からの取材　？　普通の一般庶民なら跳んで喜ぶようなシチュエーションなのかもしれないが悠輔にとっては絶望的な話だった。

それは最悪のシナリオだった。

自分の存在がこんな形で公になるなんて　それは忍者として最も犯してはいけない禁忌であった。

「あの、やめてもらえませんか？」

「え？」

自信なくつぶやいた悠輔に海原は意外そうな顔を浮かべた。

「表彰とか 本当によめて欲しいんです。僕、シャイなんです……」

「ええ、でもこんなチャンスなかなかありませんよ？ ヒーローになれるんですから」

ヒーローになんかなりたくないから断ってるんだ。

悠輔はそう言いたそうに海原をきつと睨み付けた。

「それよりも、藤林さん あなた、天下の東都大学の学生さんなんですなあ」

「はあ……」

「すごいじゃないですか。その若さだと現役合格ですか？」

「はあ、一応」

「ほほー。ということは頭脳も天才的なんだ」

東都大生ということをしやすく感心する海原を見て、悠輔は居心地の悪さを感じた。

褒められていることは素直に喜べばいいのだろうけど、今の悠輔にはまったくそういう気にならなかった。

「まあ、とりあえず……事件のことを詳しく聞かせていただいだけませんか？」

「僕が？ でも犯人は逮捕されたんでしょ？」

「そうなんです……とりあえず参考ですから」

海原がそう言いかけたその時だった。

ぴったりとしまっていた取調室の扉がいきなり重々しく開かれた。

その人物の登場に悠輔も刑事の海原も驚いた様子で後ろを振り向いた。

そこに立っていたのは着崩した制服を着た眠そうでだらしないある警察官。

「ちよ……上月！」

彼の姿を見た瞬間、刑事の海原は憤慨した様子で強い口調で責めた。

「ノックもなしに取調室に入ってくるなんて何事だ！ 大体、お前みたいな奴がここには入れないはずだぞ！」

刑事の海原が怒るのも仕方がない。

急にペエペエの制服警官が挨拶もなしに取調室に入ってくるなんて本当ならありえないはず。

だが、上月と呼ばれた制服警官は表情の欠けた顔で海原をずっと見つめていた。

「なんだあゝ！？ 黙ってないで用件でも言ったらどうだ？ それとも用事も何もないのにここに来たのか！？」

そんな彼にいらついで海原は彼の目の前に立つと威圧的ににらみつけた。

だがそんな刑事よりも無表情でじつと一点を見つめる制服警官のほづが悠輔にはずつと威圧的に見えたのだった。

その時だった。だらしなさそうな制服警官が一言言い放ったのは

「お前は出て行け」

その一言に海原は間が抜けたように「へ？」と息を呑んだ。

だがすぐにその暴言に爆発したのか彼の胸倉をぎゅっとなぐりつけて壁にたたきつけた。

「ふざけるな！ お前そんな口たたける立場か」

「お前は邪魔なんだ。さっさと取調室から出て行け。これは命令だ」

「命令　！」

そう言われた瞬間、海原の表情が一気に固まった。

それを傍らから見ていた悠輔は思わずはっと息を呑んだ。

その変化は素人目ではなかなかわからないが悠輔はぱっちり見抜いていた。

この上月と呼ばれた制服警察官が仲間に向かって催眠術に似た暗示をかけ始めていることを。

「お前にはこの男の真実を知るには少々役不足。それならその役を俺に代われ。彼だつてそれを切に望んでいる。何も知らない庶民のお前には　この男を丸裸になんかになんかできない」

「俺だと　無理なのか？」

その言葉を聞いて海原は何かに取り付かれたようにぼそぼそとつぶやき続ける

それに畳み掛けるかのように制服警官はさらに言葉の綾をつなげた。

「さあ、この部屋から出て行け。お前はここでは必要のない人間なんだ。さあ、早くそのドアを開けて出て行くんだ。それがお前のためだ。さあ、早くしろ！」

「出て行く　！」

海原がそう言ったその瞬間、制服警官は海原の前ではちんと指を鳴らした。

次の瞬間、まるで抜けていた魂が戻ってきたかのように海原はしやきつと背筋を伸ばした。

そして何事もなかったかのように、制服警官と悠輔を残したまま取調室から足早に出て行ってしまった。

その様子を見送ることなく制服警官は不気味な笑顔を浮かべ続ける。そして、次の標的である悠輔を舐めるような青白い瞳で見た。

悠輔はその瞳を見てはつとした。その青い光には強い因縁があったのだ。

「まさか、君は」

悠輔はそう言いながら警戒感で全身が総毛立つのを覚えた。

まさかこんな場所ですい先日刃を交えた相手と出くわしてしまうなんて思いもよらないことであつた

「やっと気づいたようだな」

その男は呆然とする悠輔を見てにやりと笑つた。

「藤林 否、百地^{ひゃくぢ}悠輔君」

その名前で呼ばれたことに悠輔は強い衝撃を覚えた。

「何故、その名前を」

「とぼけないで欲しいな。俺たちの世界では有名な話じゃないか」

そう言つとその男は悠輔に対するように椅子に座った。

「昔、聞いたことはあった。伊賀の大頭目であった百地家はその存在を完全に隠すために別の姓を名乗りだした。それが伊賀ではポピュラーな名前の藤林という姓だった。それまでは半信半疑の話だと思つていたけど、お前を調べてみるとそれが嘘じゃなかったってことに俺は驚いたよ」

男のその話を聞いて悠輔は悔しさで唇をぎゅつと噛んだ。

自分の正体がここまで公になってしまったのも悔しいが、それをやつてのけたのがあの時の爪男だと思つと強い敗北感を覚え悔しくてたまらなかつた。

「君こそ、本名を名乗れ」

悠輔はゆっくりと顔を上げ目の前の男をにらみつけた

その眼鏡の奥の瞳は自然と真紅に染まっていた。

「そうだな、俺の方も名乗らなきゃフェアじゃないか」

そう言つと男はひとつ息を吐いて彼を見た。

「俺は甲賀流第18代頭首、上月静夜。姑息なお前の家とは違つて

俺は表の世界でもちゃんと本名を名乗って生活している」

何が姑息だ

悠輔は静夜のその一言に青筋を立てそうになったがぐつと唇を噛んで我慢した。

「やれやれ、君は本当に口が悪いね」

悠輔は一言そつため息を付いた。

「君は本名を隠しているって思っているらしいけど、君も一応警察官だろ。僕の戸籍の姓が『藤林』だってことは知ってるはずだけども？」

「お前の本当の姓は戸籍をいじってまで隠さなければならぬのかい」

「甲賀の情報伝達能力っていうのはその程度のものなのか？」

そついうと悠輔は蔑んだ笑みを浮かべた。それを見て静夜の顔から初めて余裕の色がなくなった。

「君は『百地』って姓を勘違いして覚えているようだからおしえてあげるよ。僕たち伊賀忍者は『百地』と名乗るものには絶対服従しなければならぬ。なぜならその姓は伊賀忍術のすべてを極めたものにしか与えられない。そしてそ『百地』の名をもらった以上その者はその名を封印しなければならぬ。どうしてかわかるかい？

まあ、甲賀の君にこれ以上は語るわけにはいかないけど」

「ほう……それは面白い話だ」

そういつと静夜は机に頬杖を付いて悠輔を青白い瞳でじっと見つめた

「つまり『百地』という名前はお前を伊賀忍術の奥義継承者だと教えてくれているわけだな」

「君も人のことがいえるのかい？ 僕たちは流派は違えど同じ立場の人間。君だって僕と同じように甲賀の奥義を学んだはずだと思うけど？」

そういう悠輔の瞳も燃えるような赤い視線で静夜を睨んだ

「ふん、面白いことを言うな。伊賀の若き家元は」

静夜はその言葉を聞いてにやっと笑顔を浮かべた

「いいだろう。俺がお前をここに招待した目的をここで特別に教えてやるぞ」

「へえ、やっぱり君の差し金だったんだね」

そういつと悠輔は納得したかのようなため息をついた

どおりで警察にはやけに手回しが早すぎるとは思ったがやはり裏で甲賀が動いていた というわけか。

「単刀直入に言うよ。お前ら、俺たちと組む気はあるか？」

「はあ？」

その言葉に悠輔は呆気にとられた。

だが静夜は全く動じもせず淡々と言葉を紡いでいった。

「よく考えてごらんよ。伊賀の家元さんよ……俺達甲賀とお前ら伊賀が今手を組んだら日本を征服できるかもしれんぞ」

「まあ、それは否定しないけどね……」

「それにだな、もはや俺たちの争いは不毛なんじゃないかな？」

そう言つと静夜は長い足を組みなおした。

「甲賀と伊賀 一体何百年覇権争いをしている？ その間ほとんど歴史は変わっていつて今は傍目から見れば平和な時代。一体何のために俺たちは争うのだ？」

「それは……」

その問いかけに悠輔は困った表情を浮かべた。

「僕でもよくわからないな。君たちとの因縁が濃すぎて仲直りも不可能だったりして」

「ふん……つまり、まだ俺たちと戦つつもり ってわけか？」

その一言に悠輔はむっとした表情を浮かべて反論した。

「喧嘩を吹っ掛けてくるのはいつもそつちでしょ？ それなのに今

日は停戦か？ 悪い冗談すぎて明日は雪じゃないのか？」

「それが冗談じゃないんだな。家元さんよ」

そう言つと静夜はにやつと笑つた。

「こんな長きに渡つていがみ合つていた俺たちだけど、もはやそれは古い。俺はそう思う。だからどうだろう？ この際甲賀と伊賀で停戦同盟してもおかしくはないだろうか？ 今更、うん百年前の遺恨を理由として争う必要なんてない」

「」

その一言に悠輔は訝しげな表情を浮かべた。

確かに静夜の言い分を一理ある。

この現代の世に果たして自分たち忍者は必要あるのか、そして争う必要はあるのか。それは現代の忍者にとっていつも頭をもたげる永遠のテーマだった。

だけど 何故今更になつて静夜は何を言うのだろうか。

元はといえばお互いに目の敵にしている存在である伊賀と甲賀。それなのにこんな場所で停戦同盟を持ちかけるとは

この男のことだ何か大きな裏があるに違いない。悠輔はそう思えてならなかったのだ。

「どうした？」

黙りこんだ悠輔を静夜は舐めるような視線でじろじろと見つめながら言った。

「そう悪い話じゃないと俺は思うが、お前は何を迷っているんだ」

「別に……迷ってるわけじゃない」

そついうと悠輔は深いため息を付いていった。

「君は一体何を企んでる？」

「何がって……」

「いい加減本当の理由を言ってごらんよ。君が簡単に落とせるほど僕は馬鹿じゃない」

その一言を聞いて、静夜の表情が一気に硬直する。

その瞬間彼の身体から切り裂くような殺気が放たれた。

「やれやれ、まったく俺の暗示にかからないな。伊賀の家元は」

「残念だったね。僕は君がいつも操ってる相手とは精神構造がちがうんだよ」

でも一瞬だけが静夜の暗示にかかりそうにはなった。しかし、悠輔はあえてそれは伝えようとはしなかった。

この男、おそらく調子に乗せると厄介だ。とくに今みたいな口で

の対戦だと時々負けてしまいそうになるのは確かだ。

「じゃあ、僕も単刀直入に聞くよ……甲賀の頭目であろう君がなぜ警察組織に入り込んでいる？　しかもその様子じゃ出世もあきらめてるみたいだし……」

そう言つと悠輔は静夜の格好を舐めるような目つきで見まわした。

だらしなく来た制服にぼさぼさの頭　おそらく左遷部署にいるのだろうなと容易に想像できた。

「警察での出世なんてとうの昔に諦めた。それでもいるのはほかならぬ甲賀のため　さ」

「ほう……じゃあそこにいるってことは甲賀にとって得だと？」

「ああ、得だね。なにせ警察と信頼的關係が結べられるからな」

「ふーん」

そう言つと悠輔はじつと真紅の瞳で静夜を睨みつめた。

「つまり先週のホテルでの出来事は先客の甲賀より警察が伊賀に色目を使ったもんだからから怒ってやってきたんだね」

「まあ……そういところだ」

「それはよかった。君のあの時の怒り心頭の様子はおそらく僕を殺したあとあそこで怖かってた相馬刑事もろとも殺すつもりだったん

だね。でも僕が予想以上に強かったもんだから対応に苦慮したと」

「……」

その一言に静夜は押し黙ったまま悠輔を青白い瞳でじろりと睨んだ。

どうやら悠輔の言ったことは凶星であつたらしい。

「しかし残念だけど、君たちが思っているほど警察は意のままには操れないよ。そうしてもらつたら僕たちが困るからね」

そう言つと悠輔の瞳からギリリと赤い光が発せられた。

しかし、静夜は一步も怯まなかつた。逆に面白いと言わんばかりの笑みを浮かべて

「ほう……つまり俺たちの領域を侵す　ということか？」

「これ以上君たち甲賀の好き勝手にはさせられない。それが僕の答えさ」

その一言に静夜は狂ったかのように笑い転げた。

そして挑戦的な視線で悠輔を見ると静夜は一言言つた。

「面白い！　結局伊賀は修羅の道を行くと言つわけだな」

「ふん。僕たちが君たちと同じ土俵に上がった時点で停戦なんて考

えてなかつたくせに……」

「しかし残念だ。甲賀と伊賀が組めば本当に日本が簡単に支配でき
ると思つたのに」

その言葉に悠輔は冷淡な視線で静夜を見ると笑つた。

「僕は君みたいにそんな大それた野望なんてないから」

「ほう……」

「僕の主義は売られた喧嘩は3倍にして相手に返すつてこと。それ
以外のことは何も考えてないよ」

悠輔は無邪気にそう笑つたがその視線は鋭く赤い光を発し続けた。

僕はいつでも相手になつてやるよ　そう言いたげな視線に静夜
の興味は強くそそられた。

「やれやれ、伊賀の家元さんは好戦的だな」

そう言つと静夜は蔑んだような笑みをうかべ悠輔を見た。

「しかし、その余裕はいつまで続くだろうな。これからのお前の予
定を見ると忍者として笑つていられる状況ではない」

「ああ……」

静夜にそう言われ悠輔は一気に顔を曇らせた。

そして不快感いっぱい表情を浮かべ彼を睨みつけた。

「もしかして今日の感謝状授与も君たちの差し金？」

「いや。これは自然の流れってやつかな」

「まあ……そうだろうね」

警察で表彰されるなど悠輔にとって不服であった。だが、ここで断るなどもつできないこともわかっていた。

まあ、いいや。どうせ後で情報を握りつぶせば公になどならぬい。

僕たちにはそれができる力があるんだから……

「えらい余裕だな」

悠輔の落ち着き払った態度に静夜は感心したように言った。

「もしかしてお前……こんな表彰式伊賀の力を使って闇に葬ろうとでも思っているのか？」

「まさか……僕たちはそんなに万能じゃないし」

「でもおかしいよなあ……」

そう言つと静夜は悠輔の顔をじろじろと見つめた。

「この前の渋谷の通り魔事件でお前のこと報道したマスコミって少

なすぎだと思っただよなあ……」

その言葉に悠輔は訝しげに眉をひそめた

「 どういう意味だ？」

「 おや、まだとぼけるつもりか？」

静夜はそういうとにやっと笑った。

「 お前らの流派が情報操作が得意だったことは有名な話。それを使ってどうにかことを小さくしようとしたらしいが、今回ばかりはそうはいかないぞ」

「 何 ？」

「 マスコミに内通しているのは伊賀だけじゃないってことだよ。百地君」

静夜の口からそれを聞いて悠輔は思わず顔色をガラツと変えた。

形勢逆転。それを見て静夜は誇らしげな表情を浮かべた。

「 まあ、気にするな。ニュースを見てお前の正体に気づく奴なんてそう多くはないさ。そう思えば問題ないだろう」

その一言に悠輔は初めて悔しさを顔に出しに齒ぎしりした。

そうか。コイツそれが目的だったんだ

静夜にとって今日悠輔を警察に呼び出したのは、彼を取り調べるためでも表彰するためでもない。彼の正体を如実に公に晒すのが目的だったのだ。

「覚えてろ……」

悠輔はまるで腹の底から出た呪いのような言葉で一言言った。

「僕は君の思うどおりにはならない！　そして君を　甲賀を絶対に忍者界のトップにはさせない！　それが僕の　『百地悠輔』としての意地だ」

そう言った悠輔の眼鏡の奥の表情は完璧に赤い瞳の伊賀の若き頭目にして秘伝の名を継いだ『百地悠輔』の顔になっていた。

それを見て、上月静夜は初めて嬉しそうな笑みを口元に浮かべた。まるで最高の好敵手を見つけたかのように

13話 静夜の罖

彼は、表彰は自然の流れだと言った

それはそうかもしれない。あれだけのことをやってしまったのだ。大事になるのは仕方ないかもしれない。

だけどそれは図らずも彼にとって大きなチャンスを与えてしまった。

一つのきっかけさえあればそれを使って幾らでもこちらを陥れる罖は設置できる。

きっとこの表彰は自然な流れのうちに決まったのだろうけど、その中にどれだけ彼が罖を仕掛けているか 悠輔にとってそれが気がかりだった。

緊張した面持ちで渋谷署の署長室に通された瞬間、図らずも何台ものカメラが彼を睨み付けていた。

パシャパシャと跳ぶ眩いフラッシュに顔をゆがめながら悠輔は恐る恐るその部屋に陣取るカメラを数えだした

どこがマスコミが数社ほどだ。こんなの芸能人の会見並みの人数じゃないか。

悠輔はむっと眉間にしわを寄せながら部屋の中に入るとさらに痛々しいフラッシュが彼を襲った。

一体このしかめっ面が何社の新聞に載るのだろう。そして、何人が自分の正体に気づくのだろう

そう思うと悠輔は目の前の表彰が憎々しくて仕方がなかった。

「いやああ、まさか一般市民の方に通り魔を確保していただくなんて……驚きですよ」

丸々と太った渋谷署の署長は悠輔とは180度違う満面の笑みで迎えた。

「でもまあ、藤林君も無事で本当によかったよ。もし君が犯人に向かったのがきっかけで一大事になっていたら 大変だもんなあ」

署長はそういつと悠輔の肩をなれなれしく叩いた。

それを聞いて悠輔は困った表情で「はあ……」と答えるしかできなかった。

「でも、君も無事だし犯人の意識も戻ったし、けが人は多少出てしまいましたけど死者はナシ！こちらにとっては円満解決で万々歳ですよ！」

なにが円満解決で万々歳だ

悠輔は不服そうな表情を浮かべながら署長を訝しげに見た。

すべては不幸な話だ。デート中に通り魔に遭遇してそれを制圧してしまっただがために、警察組織に潜り込んでいた甲賀の頭目上月静夜の目についてしまった これを運が悪いと言わずにはいられない

い。

そして彼は忍者が最も恐れることを最大の罠に仕掛けた。それがマスコミを使い自分の顔を日本中に晒すという今の状況だ。

上月静夜め……

悠輔はまるで呪いをかけるように彼の名をつぶやいた。

こんな形で僕の正体を公にして、奴はこの後何を企んでいるのだろっ……

ここで顔が報道されたら、伊賀や甲賀以外の流派にも自分の顔が伝わるのは間違いない。

それを知って他流派はどう動くのか。それを考えると悠輔は頭が重くなりそうだった。

「もしもし、藤林さん？」

そう言われて悠輔はハッと顔を上げた。

目の前には蛸のようにきよとんとした顔の署長が賞状を持って立っていた。

「どうされました？ なれないフラッシュに立ちくらみしましたか？」

「あ、いや……はい」

悠輔はその言葉に戸惑うかのように弱々しく答えた。

本当はそんなことより、裏の世界の動向のほうに気がなるなどが避けてもいえるはずかない。

「ほらほら、スマイルでさ。君は今日から英雄なんだから……」

英雄？ そんなものになんかなりたくもない！

悠輔はそう口答えしたい気分になったがその言葉をぐつと飲み込んで目の前に差し出された賞状を無表情のままおさおすと受け取った。

「あー、すいません。お二人さん握手しながら記念撮影したいんですが」

取材陣からそんな声があった瞬間、もう悠輔は我慢ならなくなった。

何に怒りを感じてるのだろう？ 警察？ マスコミ？ それともすべてを仕掛けた上月静夜か？

否、全て違う。本当に怒りを感じているのはこんな簡単な罠のきっかけを作った自分自身だ。

そう思うと強い怒りとともに激しい情けなさも感じて穴に隠れた気分だった。

警察署長と握手をし、カメラに向かってポーズすると激しいフラッシュが悠輔を襲った。

この光はこれほどまでに痛いものだっただろうか 悠輔は硬く

顔をしかめながらそう思った。

襲い掛かるフラッシュの光にスキャンダルを抱えた芸能人のように今すぐその場から逃げ出したい気分になったけど、そうするわけにもいかない。

なぜならその行動こそが自分を陥れる罠そのもの。上月静夜の思い通りの結果になるのだから

「OKです！」

カメラマンの一人がそう言った瞬間、悠輔に襲い掛かっていたフラッシュの嵐はパタッと止んだ。

それを見るなり悠輔はすっと踵を返し足早に署長室からでていくとした

そこにいた署長やほかの刑事たち、マスコミの連中すべてが彼の行動に驚き引きとめようとしたが時は遅し。悠輔はまるで吹き去っていった風のように消えていった。

そして悠輔はそのままもらった賞状を乱暴にくるくると丸めながら薄暗い警察署の廊下を歩き出した。

だが、その足はすぐにはたりと止まる。

悠輔は鋭い瞳ですっと前を見つめた。

目の前にはあのだらしのない制服姿の甲賀の頭目上月静夜が立ちただかっていたのだ。

「よお、もう授賞式を後にしたのかよ、家元は」

彼は悦に入ったような笑みを浮かべながら悠輔にそう問いかけた。

そう言われて悠輔はもう我慢の限界を超えてしまった。

悠輔はその問いに答えることなく無言のままその足を静夜に向け歩みだした。

その瞬間、静夜は身体を硬直させ思わず攻撃の構えを取りそうになった。

ゆっくりと近づいてくる悠輔の周りには禍々しいほどの殺気が渦巻いていたのだ。

そして二人がすれ違うその瞬間、悠輔は静夜にまるで喉元に刃を突きつけるかのような一言を発した。

「覚えてろ……」

その言葉を聞いて静夜は悠輔のほうを振り返り言った。

「おや、ずいぶんお冠のよつで」

「うるさい」

悠輔は凍て付くようなその一言を放つと暗闇の中真紅に光る瞳で静夜を射抜いた。

「今度会うときは君の命はないと思え……」

悠輔は一言そういい残すと、また何事もなかったかのように薄暗い廊下をゆっくりと下っていった。

それを冷めた視線で見送っていた静夜はふつと蔑んだような笑みを浮かべ言った

「命がないのはどっちのほうが……」

そう言つと静夜は悠輔とは逆のほうへ踵を返し薄暗い廊下を歩いていった。

14話 追跡者たち

渋谷署を出るともうどっぴりと日が暮れて辺りは薄い夕闇に覆われていた。

それを見て悠輔はひとつ深いため息を付くと、駅に向かってゆっくりと歩き出した。

若者の街渋谷は夜を向かえさらに人が増えぎゅうぎゅうにこった返している。

普段ならここら辺でファーストフード店に入って軽い夕食をとるところだが、今日は疲れきってそんな気力もない。

街に繰り出す若い男女をよそに悠輔はうつむき加減に駅へと足早に消えていく。

そして、一気にホームに着くと悠輔はまたひとつ大きなため息を付いた。

「今、標的は渋谷駅山手線外回りのホームです……おそらく頭目の予想通りそのまま部屋に帰るのでしょう」

悠輔は訝しげな表情を浮かべ周りを見回した。

山手線の短い待ち合わせ時間、回りは携帯電話をかけるサラリーマンにiPodを聞く若者、手鏡を覗き込む女子高生におしゃべりする主婦たち

彼らすべてが怪しいわけじゃない。むしろ素人目にみればまったく持って自然な形のホームの風景だ

だが悠輔は薄々ながら何か別の違和感を覚え始めていた

警察署を出たときから誰かに絶えず監視されているような視線を痛く感じていたのだ。

そのとき緑色の車体の山手線がホームに滑り込んできた

悠輔は首をひねりながら開いたドアからゆっくりと電車に乗り込んだ。

渋谷から最寄り駅まで電車を乗り継いで約三〇分。

その間もぴつたりとマークされた視線は絶えず悠輔を襲った。

もはや疑問の余地はない。僕はあれからずっと甲賀の奴らに付けられているんだ。

それを確信した悠輔はあえて最寄り駅の二つ前の駅で電車を降りた。

だが、悠輔を付ける影は動じることなくぴたりと彼に寄り添う。

それどころか、時が立つごとにその影は一つ一つとみるみる数が増えていく。

なるほど、ここでケリをつけるつもりだな　背後を付ける影たちの気配を感じながら悠輔は微笑を浮かべた。

そのつもりでこうやって人気の少ない場所に奴らを誘導してやっているのだ。

それを気づいているのかどうかは知らないが、目的地を前にして影たちの殺気はどんどん強く禍々しいものになっていく。

その時、悠輔はふと足を止めた。

辺りはもう街の喧騒から大分離れ、街灯も一つもない薄暗い路地に入っていた。

その瞬間、彼を付けていた影たちの足音が砂利を踏みしめびたと止まった。

悠輔はにやつと笑った。そして彼らに気づかれないように眼鏡をすつと取り外した。

「僕が君たちに気づいてないとも思ってたかい？」

悠輔はそう一言言った瞬間、振り向きざまにベルトに付けた針を抜き取りそれを瞬時に放った

その瞬間、真つ先に彼を付けていたスーツ姿の男の喉下に針が刺さりそのまま崩れ落ちた。

「なんだ、たった十人ほどか……」

追跡者たちの数を見て悠輔は少し不満げな表情を浮かべながら右手で針を器用にくるくると回した

「上月静夜も僕を舐めすぎだね。これだけの手勢で僕と相手しようなんて」

そういつと悠輔はにやつと笑い左手で彼らを誘うような手招きをした。

そんな悠輔の挑発に甲賀の追跡者は皆カツと顔を赤くして憤怒し、次々と地を蹴り悠輔に襲い掛かった。

それに対し悠輔はギリギリまでその場を動かなかった。そして彼らをじつと見つめる瞳は目の覚めるような真紅に染まった。

襲い掛かった追つ手の一人が悠輔めがけ太刀を振り下ろしたその瞬間、その一撃はむなしく空を切った。

彼はハツと周囲を見回したがどこにも相手の姿はない。

だが次の瞬間、彼は上を向くとそこに左右の手にたくさんの針を仕込んだ悠輔が文字のごとく空高く浮き上がっていた

その瞬間、悠輔は左右に持っていた無数の針を同時に真下の追っ手たちに解き放った。

それはまさに激しく叩きつける針の雨であった。

あまりに不意な攻撃をかわすことが出来ず、急所に直撃を受け倒れるものもいれば防御したものの腕を負傷したものも居た。

だが、悠輔にはわかっていた。今の一撃は致命傷には程遠いこと

を

針の雨の一撃が一通り終わった瞬間、彼らの前にもう悠輔の姿はどこにもなかった

先ほどの攻撃にへきへきしていた彼らの顔に一気に焦りの色が浮かぶ

傷ついた身体で刀を構えながら彼らはじつと悠輔の登場を今や遅しと待ち構えていた

その時だった。悠輔はあまりに意外なところに姿を現したのだ。

「攻撃してこないの？」

その声にすべての忍者たちがぎょつとした表情を浮かべた

悠輔は彼らが集まる中央に悠々とした顔で居座っていたのだ。

「何もしないなら、遠慮なくこちらから行くよ」

そう言ったその瞬間、悠輔は近くに居た相手を一撃の手刀でなぎ倒していた。

それを見た彼らは急いで臨戦態勢に入り悠輔を取り囲んだ。

だが、それもすべて悠輔の想定の内だった。

悠輔はまるで彼らを挑発するようににやっと笑って見せた。

それを見て彼らの一人が悠輔めがけ刀を振り落とす。それが口笛となった。

「すげえ……」

レンズ越しに悠輔を覗いていた甲賀の忍者は思わずそんな言葉を漏らした

悠輔の動きはまるで武術の演舞のごとく華麗であった。

どんなに複数の相手が襲ってこようと悠輔はその筋を見極め鼻の差でその刃をかわしてみせた。

悠輔にとってそれはどうってことのない作業であった。

彼の瞳は特殊であった。裸眼で動く物を見るとそれはすべて止まって見えてしまうのだから。

普段は日常生活に支障を来すから矯正用の特殊レンズをいれた眼鏡をわざわざかけているが、今はその並外れた動体視力が特別に力を発揮するときだった。

右から左から 双方向から襲い掛かる凶刃を赤く染まった瞳で見極め針の穴を縫うように掠め取ると、すかさず敵に出来たほんの一瞬の隙を悠輔は容赦なく突いた。

鮮やか過ぎるカウンターキックは一方の敵の顔を碎き、一方の敵には振り返りざまに鋭い手刀で一撃で沈めた

その直後を襲うようにまた数人の敵が悠輔めがけて襲いかかる。

得られる結果は同じなのに　そう思いながら悠輔はとまって見える刃の軌道を見極め最も効率的に避けられるルートをはじき出した。

振り下ろされた刃を悠輔は体をかがめて綺麗に避けるとそのままの体勢で足を高く上げ敵のあごを砕いて見せた。

それと同時にまた別の敵が一对の刃を振りかざし斬りかかってきた。

だがその攻撃でさえ悠輔の瞳の前では無力であった。

小さな動きで何気なくそれをかわして見せたとたんそれよりも何十倍も鋭い悠輔のカウンターパンチが彼を襲った。

彼が崩れると同時に悠輔はまたしても数本の針を手にとっていた

「一体あいつ何本手裏剣を仕込んでるんだ……」

上からカメラで狙う彼はレンズ越しに悠輔を見つめながらそうつぶやいた。

針を握り締めた悠輔は今度はそれを狙いを定めて一本一本丁寧に放った。

百発百中　その針は敵勢の刃を持つ手首や一撃必中の首筋にこどどとくヒットし動きを封じられた彼らはその場に崩れ落ちた。

「どうだい？　まだやるつもりかい？」

悠輔はまるで残った相手を挑発するかのよう一言そう言った。

その言葉に仲間を倒され残り少なくなった甲賀の忍者たちは目の前の若者の壮絶な強さに一步また一步と後退し始めた。

だが悠輔は彼らを生きたまま返す気など毛頭になかった。

そのとき悠輔は初めて自分で攻撃を仕掛けたのだ。

悠輔は地をぽんと蹴ると逃げ腰になっている彼らの懐に飛び込んだ。

次の瞬間、悠輔は彼らの目の前ですばやく回転するとそれと同時に回し蹴りを放った。

彼らはその瞬間、まるで鞠のように次々と宙を舞い、そして地に落ちたときにはもう意識を失っていた。

「……こんなものか」

あまりにも手ごたえのなさに悠輔は残念そうな声を上げた。

残ったのは腰を抜かした一人の甲賀者だけであった。

「頼む！命だけは……」

彼は年若き伊賀の家元を前にして完璧に恐怖で震えていた

「やれやれ、こんなところで命乞いかい……」

そんな彼を前にして悠輔は深いため息をついた。

「君はそれでも誇り高き甲賀の忍者かい？ 君のボスがそんな君を見たらそれこそ命がないと思うよ」

「」

その言葉を聞いて甲賀の忍者は苦々しい表情で黙り込んだ。

「まあいい……」

そういつと悠輔はおびえる彼の胸倉をぐつとつかむと軽々と持ち上げた。

「じゃあ、取引をしようか？」

「と……取引？」

「そう、僕は君の命を保障する代わりに君は上月静夜が何をたくらんでいるか僕に教えて欲しい どうだい？ 簡単な取引だろう？」

「それは」

その言葉に甲賀の忍者は顔をこわばらせる。命と名譽 どちらを取るか最後の最後まで悩んでいるようだ。

「取引がダメなら君をここでひねりつぶしてもいいんだよ」

悠輔はクスクス笑いながら彼の胸倉にぐつと力を入れた。

ますます喉をつぶされ彼は苦しそうな表情を浮かべた。

「まあ、根性のある忍者だったら僕の誘いに乗るわけないか……なんせ証拠のビデオを撮ってる奴がいるんだから」

そう言つと悠輔は右上を向くと無邪気そうな笑顔を浮かべて見せた。

それを見た瞬間、電柱の上でレンズ越しに一部始終を眺めていた甲賀の忍者は思わずぎょっと顔色を変えた。

「ついでだ。上月静夜に伝えておけ」

そう言つと悠輔はびしっと決めたカメラ目線でゆっくりと台詞を続けた。

「僕を攻略するためにこんな雑魚を使って奥義を引き出そうとしよつとしたのだろうけど、そんなことをしたって無駄なだけだよ。僕の真の強さを試したいんだつたら君自身が真つ向勝負したほうが手取り早いんじゃないかな？ まあ、そんなことしたつて君が伊賀の奥義を見破るなど出来るはずがないと思うけどね……」

そう言つた瞬間、悠輔は目にも留まらぬ速さで針を打ち放つた。

それはカメラを持っていた忍者の首に痛々しく刺さり、彼はそのまま電柱から地上へふらりと落ちていった。

「おっと、手加減するの忘れてた」

そう言つと悠輔は胸倉を掴んでいた甲賀者の存在に気づいた。

ふと、彼を見ると悠輔の締め技に口から泡を吐きながらぐったりと動かなくなっていた

悠輔はそんな彼を見て乱暴に放り投げると、深いため息をつきながら再び特殊レンズ入りの眼鏡をかけた。

しんと静まり返った路地裏　彼の周りにはただ男たちの軀が力なく横たわっていた。

15話 お笑い芸人、風間英太

「次のニュースです」

画面に映るのは新東京テレビの看板女性アナウンサー中島雪季恵。

昼のニュースのメインが終わって六番ほど 息抜きのワールド
ニュースの後、彼女は顔色一つ変えずにそれを読んだ。

「五月十五日、渋谷で起きた男女五人を殺傷した通り魔事件の解決
にかかわったとされる大学生に昨日渋谷署から感謝状が贈られまし
た」

彼はそのニュースを新東京テレビその場所であまたま目に入った。

楽屋とも呼べないフロアのロビー。地デジ化とうるさいテレビ局
とは思えない旧式のブラウン管テレビにそれは映っていた。

「感謝状を授与されたのは東都大学2年生の藤林悠輔さん（19）
渋谷通り魔事件の犯人を解決したとして渋谷署署長賞が贈られました。
この事件は五月15日に渋谷の大人気ファッションビル『シャイニ
ーズ渋谷店』で田上明央容疑者が男女5人を殺傷したもので、たま
たま恋人と『シャイニーズ渋谷店』を訪れていた藤林さんが田上容
疑者を勇気を持って取り押さえました」

「藤林……悠輔？」

彼はまるで魂が抜かれたようにそのニュースに釘付けになり、ま
だ見ぬ英雄になった大学生の名を口走った。

だがそのニュースは無愛想に賞状を受け取る藤林悠輔の顔を一瞬だけ映しただけで、すぐに首都高の事故の話題に移り変わった

「おい。エータ」

名を呼ばれ彼はハツと我に返った。

隣には小太りに眼鏡「綾波LOVE」という変なロゴの入ったTシャツを着た男

見た目どおりオタクっぽい但实际上にもかなりのオタク湖川雅史、自称「秋葉原の申し子マサシ」だ。

「おまい、今のはないよおー。お前のぼんやりで完璧にツッコミタイミング逃してるおー」

「あ……ゴメン、ゴメン」

あまり迫力のないマサシの忠告に彼は軽々しく謝った。

小柄な身体に黒と金 ツートンカラーのソフトモヒカンに両耳にジャラジャラと付けたピアス

オタクのマサと組むお笑いコンビ『トーキョーハンター』のツッコミ担当「渋谷の暴れん坊エータ」こと風間英太はどことなく都会的な空気をかもし出していた。

「おまいさあー、本気で今日の仕事するきあるのかあー」

「バカ！」

そう言うとき英太は勢いよくマサシの頭を叩いた

「あるに決まってるだろ！ 当たり前のこと聞くなよ」

「じゃあなじえ大事なネタ合わせのときによそ見なんか……」

「それは……あれだ」

そう言うとき英太は取り繕うようにしゃべりだした

「オレ、ずーっと前から中島アナのファンだったんだ。ユキエちゃん見ると魂が飛んで言っちゃって……」

「へえ……ああいうのがタイプなんだ。エータって」

「ま……まあな」

英太はそう言うときこちない笑みを浮かべた。

だがそんなみえみえの嘘も鈍いオタクには何とか本当の目的を悟られはしなかった。

「じゃあ、しつかりしてよ。そんなことより今は爆笑エンターティナーのオーディションでぞ」

「そうだな。これってゴールデンで視聴率高い番組からな」

そう言うとき英太はぐぶぐぶと笑った

「これに受かったらトーキョーハンター初のゴールデンだよな。こ
こは気合入れなきゃ！」

「そうそう、爆エンって色物芸人がひよっこり受かるらしいからさ、
オタクとギャル男のコンビはきつとうまくいくおー！」

「バカ！ ギャル男じゃねえよ！」

そういつとまた英太の激しいツッコミがマサシの二十顎にヒット
した

「出来ることなら渋谷系ヒップホッパーって言って欲しいな。ギャ
ル男だなんて言われると 寒気がするぜ」

「それじゃあ言いにくいぞ。ギャル男でじゅっぶ……」

「うるせー！ これでいいんだよ！」

英太の平手打ちに近いツッコミがまたしてもマサシのぶよぶよの
ほっぺをしばいた。

だがそれに対しマサシはいつもの調子にへらへらと笑いながら答
えた。

「おお！ やつとエータのツッコミにいつものキレがもどったおー！」

「バカ！ オレはコレが普通だぜ？ 爆エンオーディションはこれ
以上のツッコミを……」

その時だった。

自分たちとそう年の離れていないADが書類を持ってロビーに出てきて一言言った

「えーっと……これから爆笑エンターティナーのオーディションを行いますので、番号の順に部屋にお入りくださいー」

「おっと、ついに始まったな」

そういつと英太はなんとも言えない不敵な笑顔を浮かべた。

「よし、マサ。この番組を足がかりに全局のゴールデン制覇しようぜー！」

「おー！がんばるー！」

「そんじゃ……」

英太はそういつとマサシにしかわからないアイコンタクトを送って言った

「最後に決めギャグの練習といこうか！」

「ほい！」

そういつた瞬間、マサシはすつと身体を下にかがめすつと両手を横に広げた。

そしてすかさず英太も彼の後ろに立ち手を真上に上げて一言言った。

「東京タワー！」

16話 メイド、仁科ともえ(1)

同時刻 秋葉原、某大型電器屋ビル

たくさん並んだ最新型薄型テレビがフロア中にびっしりと並べられ、それぞれバラバラの番組を映し出している。

彼女がこの店にくる目的は電化製品がほしいわけじゃなくただの近道。

秋葉原駅直結でこの店はずづいておりここから出た方が少しだけだが早くアキバを抜けられる、ただそれだけの話。

だから並べられたテレビなどいつもは何の興味もなく素通りしていける はずだったのだ。

だが、彼女はあるテレビの前で厚底ブーツを履いた足を止めた。

液晶テレビに映るのはどこの局かさえわからないニュース番組。

普通なら目にも留まらないような存在のその番組に彼女は釘付けになっていた

「五月十五日、渋谷で起きた男女五人を殺傷した通り魔事件の解決にかかわったとされる大学生に昨日渋谷署から感謝状が贈られました」

「おや、お客さん……」

呆然とそのニュースを眺めていた彼女に一人の店員が話しかけてきた

赤い法被に鉢巻姿　　いかにも暑苦しそうな店員だ。

「そのテレビいいでしょう。松芝のアクアいつて今一番当店で売れているモデルなんですよ。画質は見てのとおり最高！　ほら新東京テレビの中島アナがこーんなにも綺麗に写っちゃって　すごいでしょうー！　買うなら今ですよー！」

だが店員の問いかけにも彼女は黙ったままじっとニュースにかじりついていた。

それを見た店員は苦笑を隠しながら彼女の年恰好を観察した。

真っ黒なフリフリのレースのワンピースに真っ赤なりボンをあしらったツインテール。

太ももまで覆ったニーソックスをはいて靴はこれでもかというほど厚底だ。

確かに目立つ格好ではあるが、ここ秋葉原ではそう珍しくないゴスロリファッション。

それを見た店員は戦法を変えて彼女に売り込みを図りだした。

「お客さん、アニメとか好きでしょ。わかりますよ、ここの土地柄そんなお客さんたくさん見てきましたからね。では、どうですか？　このテレビだとアニメも信じられない高画質で見られますよ。最近のアニメはすべてデジタルで作ってますからね。それを受信する

テレビもデジタルじゃないとねえ……遅れてるって感じがするじゃないですか？」

それでも彼女からの応答はない

手ごわい客だ　店員はそう思ったのだろう。

店員は近くにおいてあったチャンネルを手にとると、おもむろにニュースをCSのアニメ放送に切り替えてしまったのだ

「あ……」

彼女はそのとき初めて反応を見せた。

「どうですかあ〜！　やっぱり見てみないと高画質の実感はわかりでしょう……」

だがその瞬間、彼女は怒った顔をして店員をにらみつけた。

それを見て店員から一気に余裕の色がなくなった。ゴスロリの彼女の激怒した姿は思っていた以上に迫力があつたからだ。

「バーカ！　なにすんのよ！」

彼女はづけづけと店員にそう詰め寄ると一言そういった

「アタシはただニュースが見たかっただけ！　なのに勝手にチャンネルなんて　この店やっぱりネットで言われているようにサイテーだね……」

そう言うだけ言ったあと店員を置いて彼女は踵を返してエスカレーターの方へと歩きだした

あの空気の読めない店員に邪魔をされて重要なところは聞けずじまいだったが、彼女が特段その二ユースに固執するのにはわけがあった。

あの通り魔事件を取り押さえた東大生　間違いない。彼はあたしの運命の人だ。

そう思った瞬間、彼女の口元になやりと笑みが浮かんだ。

彼の姿を見て彼女は図らずもとてつもなくうれしい気分になり、心を躍らせながら軽々しい足取りでエスカレーターを降りていった。

「藤林　悠輔、か」

エスカレーターを降りきって秋葉原の街に出た彼女は一言彼の名をつぶやいた。

あの人も同じ町で同じように生活している。

それはそれで嬉しいけど、彼は忘れてないだろうか　彼の許婚になるはずであった仁科ともえという少女がいたことを……

17話 メイド、仁科ともえ(2)

「いらっしやいませ！ご主人様！」

秋葉原の雑居ビルの最上階、ドアを開くとピンクの壁紙と大勢の若き乙女のメイドがエンジェルボイスをそろえて客人を迎え入れる。

メイドブームが去った今でも客足は盛況なメイド喫茶「ぶるーむ」に仁科ともえは働いていた。

「ご主人様はここは初めてですかあ？あたしともえって言うんです。これからもよろしくね！」

メイド服姿のともえは一言そういうと、客人にお絞りをそつと手渡した。

客　　と言つてもほぼ六割はアキバの常連のオタクたち。残り四割は観光がてらにやってきた素人さん。

でもどちらも適当に愛想を振りまいていればかなりの確立で喜んでくれる　これが男ってやつなんだろっね。

「そっかあ、ともえちゃんって言うんだ」

眼鏡をかけた太った男　早く言えばキモデブってところだろうか。彼はともえの前に座るとしげしげと彼女の顔を見つめた。

「ともえちゃんは……何歳なんだな」

「えーっと、17歳です」

嘘だ。本当は19歳のれっきとした大学生だ。

でも、これもサービストーク。信じようが信じないが本人たちの勝手だ

「家は東京なの？」

「んー、一応……ね」

これも嘘。本当は長野の片田舎育ちだ。

「そっかぁー」

キモデブ男はそう言いながら真顔な顔をしてともえを見た

「ところで、どうしてメイドなんかになったの？　もしかして自分からアピールして雇ってもらったの？」

「んー、ちがいますねえ」

そう言うともえは困ったような表情を浮かべた

「あたし、もともとアニメとか好きでさぁ……秋葉原うろついてたらこの店にスカウトされちゃったの。まあ、普段着てるのもゴスロリだし、別に違和感はないです」

この話だけは本当。初めて大学進学のため上京して真っ先に秋葉原に行ったら、早速メイド喫茶のスカウトが入った。

メイド云々には興味はなかったけど、秋葉原で働けるってことだけで自分は即決したかもしれない。

そしたら、あれよあれよと言う間に人気メイドの一角を担い、裏では相当のファンが着くような アイドルの存在になってしまったのだ

「へえーメイドもスカウトされる時代なんだ。なんか芸能界みたいだね」

「ですよねえー」

そう言うともえはケトルに入った紅茶をカップに注いだ

「あたし人気出過ぎで困っちゃってるんです。学校や家にもファンがおしよせて……ストーリーカー被害なんてしよっちゃゆうですよ」

「ええ！ ストーカーってそんなにひどいの？」

その問いにもえはこくりと頷いた

「じゃあ、そいつら僕がやつつけてあげるよ！」

「え……」

その言葉にもえは思わず絶句した

「ともえちゃんはかわいいから絶対変な虫がやってくるでしょ！そいつらを僕が追い払って……！」

「そこまでしなくていいですよ！」

ともえの声は店内に響き渡った。

「あたし、これでも護身術習ってるんです。これで結構ストーカー撃退できるし……」

護身術　本当はそんなかわいいものじゃない。

自分が会得してしまったのは戸隠流忍術。下手すればストーカーを撃退どころか死の一步手前にまで追い詰めてしまふ技ばかりだ。

でもそんな裏の顔はメイドになってるときにはご法度だ。

かわいくみんなに愛されるメイドにならなければ

「あー、でもやっぱり守って欲しいかなあ……あたし、結構怖がりなんです」

猫かぶりはこの店でバイトしているときに身に着けた技だ。今は忍術云々よりどれだけ人に愛されるかが大事なのだ。

「よかったあ」

その言葉を聞いてキモデブは深いため息をついた

「ともえちゃんがストーカーばこにするとところ想像しかかったけど、よかった。やっぱり女の子だね」

「はい！ あたし、か弱い女子ですもん」

ぼこぼこね　　本当は実際にそうしかかったストーカーばかりな
んだけど……

ともえはその言葉を心の中でつぶやきながらキモデブの手前の力
ツプに紅茶を注いだ。

だけど、本当に自分はストーカーをぼこぼこにするほど可愛い娘
なんかではない。手加減を間違えればそのストーカーを血みどろに
してしまうほどの力を秘めている。

でも、そんなこと言えない。今の自分は戸隠流の継承者の仁科とも
えではなく「ぶるーむ」の人気メイドのともえなのだから。

「あ……」

そう言つともえは店の時計を見上げた

「もう三時」

「え？　何か用事でもあるの？」

キモデブがそう聞いてきたのでともえは困ったような笑顔を浮か
べて否定した。

「うっん、なんでもありません。気にしないで」

でも、本当は気にしないってレベルの話ではない。四時半から絶
対に出なければいけない大学の授業が入っていたのだ。

この前担当の講師にこれ以上休むと単位をやらないよと言われたかなり危うい授業なのだ

「だったら、いいや。僕、ともえちゃんところして話してるだけで幸せだからー」

「そうですかあゝ」

そう言つともえは引きつったような笑顔を浮かべた。

「そういわれると、ともえ……うれしいですうゝ」

さつさと帰れよ。このキモオタデブ！！

ともえは表ではピンク色の愛嬌を振りまきながらも心根の奥でブラッくな毒をはき捨てた。

この客をさつさと帰らせれば、ギリギリ大学の授業は間に合うだろう。

ただ このキモデブがどこまで居座るかが、問題だ。

ともえはキモデブに見られないように小さくため息をつくともまた輝くような笑顔を彼に向けた。

アイドルメイドともえの時間への戦いはまだ始まったばかりであった。

18話 JA青森職員、応野邦彦

同時刻 銀座

彼は早めの昼食を軽くとりながら事務所にある小さなブラウン管テレビを見ていた

新東京テレビのニュースショー、人気アナウンサーの中島雪季絵が淡々と読むニュースに彼はおにぎりをもつ手を止めていた。

「五月十五日、渋谷で起きた男女五人を殺傷した通り魔事件の解決にかかわったとされる大学生に昨日渋谷署から感謝状が贈られました」

「……………ほう」

そのニュースを聞きながら彼は手元のリモコンをつかって音量を上げた。

ずっと注目はしていたニュースであった。

凶器を持った通り魔を大学生ごときが簡単に制圧するなど普通ありえない。ありえるとしたらその大学生が普通じゃないという可能性しかない。

それを思うと彼はその大学生の正体が気になって気になってしょうがなかった。

だが、その大学生の名前と表情がブラウン管に映し出されたその

とき、事務所のドアが開き一人の同僚が彼を呼んだのだ。

「応野君、食事終わったかな？ 終わったんなら手伝って欲しいんだけど……」

それを聞いて彼は持っていたおにぎりを一口で食べ、ペットボトルのお茶を胃に急いで流し込んだ。

そして、席を立ち上がるとにっこりとやさしげな笑顔を浮かべた

「ええ、今すぐいきますよ」

同僚の男は思わず応野邦彦の姿を呆然と見上げた。

彼はまるで聳え立つ壁のように身体が大きくそして頑丈そうだった。

毎日彼を見ていて慣れていくからとはいえ、立ち上がるとどうしてもその身体に見入ってしまうのであった

「応野君っていつからこんなに身体が大きくなったの？」

同僚の男のその問いに、邦彦は嫌な顔一つせず淡々と答えた

「そうですね……大きくなり始めたのは小学生の高学年あたりかな？」

「え！？ そのころから……」

「仕方ないですよ。うちの家系は身体が大きな家系ですから」

そういつと邦彦はふふつと笑った。威圧感のある体型ではあるが彼の笑顔はとても柔和で親しみがもてるものであった。

「それで、何か問題でもあったのですか？」

「いや……ね、ちょっとお店の方が忙しいらしいからさ」

「ははあ……わかりました」

邦彦はそう答えると、椅子にかけてあった法被を大きな身体に羽織った

そこには『JAあおもり』とでかでかと書かれていた。

「じゃあ、そつちにいきます」

そういつと応野は巨体を揺らしながらゆつくりと事務所の外へ出た

銀座の路地にある青森物産館。そこは昼時の買い物客で盛況で満ち溢れるような活気に沸いていた。

応野邦彦は本来ならば青森の農協職員なのだが、半年前に転勤になり東京のアンテナショップに派遣されてきた。

主な仕事は各企業への青森の特産品の売り込みであるが、時々だが頼まれて店の手伝いも買ってでていた。

「お客さん！ 青森りんごのタイムセールス中ですよー！ これ3つで198円！ 東京では考えられない安さでしょー！ 買うなら

今！ここで！ですよー！」

応野の先輩のJA職員安嶋がその声を掛けたそのとたん、店内の買い物客がどつと押し寄せてくるような感覚に邦彦はおそわれた。

そう今のご時勢、誰しもが値段に敏感になっている。もともと物価の高い東京だとそれは尚更だった。

タイムセールが始まったとたんビニール袋に入ったりんごの詰め合わせは飛ぶように売れ始めた。

まるで、デパートのバーゲンセールだ……邦彦はそう思い顔を引きつらせそうになったがすぐに考えを入れ替えにこやかに笑いながらりんごの入ったビニール袋を客に渡していた。

しばらくして、タイムセール用のりんごの袋も少なくなり、客もそろそろまばらになってきたかと思ったとき、邦彦の前にワゴンよりも小さなお客さんが百円玉2つを握り締めた手を差し出した。

それに気づいた邦彦はその手の持ち主をチラッと見た。

まだ5歳ほどの小さな女の子だ　それを見た邦彦は少し微笑ましい気分になった。

そして安嶋に気づかれないように袋の中にもう一つおまけのりんごを入れて彼女の前に出て身体をかがめた

その瞬間、女の子は顔を硬直させた。

いくら身体をかかめても190センチは超える偉丈夫の身体だ。子供が威圧感を感じないわけがなかった。

「はい、どうぞ……」

なんともこやかな笑顔でりんごの袋を渡そうとしたとき、応野の前で女の子は堰を切ったように泣き始めた。

それはどんどん大きくなり誰もが収集がつかなくなるほどだった

「応野君……君が子供の相手しちゃだめだろう」

それを見ておろおろしている邦彦を見上げながら安嶋はあきれた声を出した。

まるで、自分の身体が大きすぎるのが原因だと言わんばかりに。

「すみません……うちの子が」

騒ぎを聞きつけてか女の子の母親と思われる女性が彼女の前に駆けつけた。

しかし、彼女は泣き止むことはなくさらにいつそう何声を大きく上げた

「この娘なにかしましたか？困らせてしまってますいません」

「いえいえ、いいんですよ。こちらこそ対応不足で……」

女の子の母親と先輩の安嶋が会話に気を取られている間、邦彦は

はっと何かを察した。

ついさっきまでそばで泣きべそをかいていたあの娘の声があったく聞こえなくなっていたのだ。

邦彦は込み合う店内をくまなく目で探した。そして一瞬だけアンテナショップの出入り口から出ていく彼女の靴を見つけたのだ。

その瞬間、邦彦はすばやく売り場から離れて彼女の後を追っていた。

「ちよっと、応野君」

急に動き出した邦彦の巨体に驚いた安嶋は彼を制止しようとした。

だがその直後、母親はおろおろした様子で一言言った

「あれ、由美ちゃん どう?」

「え ?」

女の子の母親と先輩の安嶋が置いてけぼりにされているその時、邦彦はアンテナショップの外へと飛び出した。

彼の目の前の道路には女の子がりんごの袋を重たそうに持っていたとどしく歩いていた。

邦彦はそれを見て声を掛けようか一瞬戸惑った。

先ほどみたいに自分の姿におびえ泣かれてしまっても困る話。だ

が、放っておくわけにはいかない

そう思った瞬間、邦彦は何かの気配をすばやく感じ取り女の子の遙か前方を見張った。

そこには猛進してくる大型トラックの姿が見る見るうちに近づいてきたのだ。

その瞬間、邦彦の表情はガラツと変わった。細くて柔和だった瞳を鋭く見開いた瞬間、彼はアスファルトを強く蹴り、トラックの目の前の女の子めがけて走り出した。

けたたましく鳴り響くトラックのクラクション、それを見て呆然と立ち尽くす女の子

駆け寄った邦彦が彼女を抱き寄せたそのときにはトラックはすぐ眼前にせまっていた。

それでも邦彦はまったく焦ることなく彼女を抱き寄せるとトラックに背を向け身体をかがめた。

次の瞬間、事態は最悪の結果を生んだ。

けたたましい急ブレーキ音とともに響く鈍い音。トラックは女の子がいた場所から少し流れてからゆっくりと停止した。

「由美ちゃん　！」

女の子の母親はそれを目撃して声にならない声を叫び駆け寄った。

ざわざわとただ回りのギャラリーの潜み声だけが大きく響く現場。誰しもが少女とそれを守ろうと飛び込んだ青年の安否を絶望視したそのときであった。

「ママ……」

駆け寄った母親の耳に細い声大きく響いた。

母親ははっとトラックの足元を見た。そこにはまるで大きな岩のように立ちはだかった男に守られるように女の子がきょとんとした表情で周りを見回していた。

「由美ちゃん！」

それを見て母親は安堵の表情を浮かべ彼女に駆け寄った。

しかし、その次に襲われたのは娘の身を挺して守ったアンテナシヨップの店員への罪悪感だった。

トラックと激突したのだ。彼はきつと助かってはないだろう

そう思ったその時だった。

彼はぱちつと目を開けると何事もなかったかのようにゆっくりと立ち上がった。

そして、ゆっくりと肩を回しながら一つため息をついた。

その様子を見て、周りのギャラリーは驚嘆のざわめきを強めた

当たり前だ。大型トラックともろに激突したというのにけろつとしてゐる男が目の前にいるのだから……

「 応野君？ 」

そこに焦った表情で駆けつけた安嶋が声を掛けた

「 君、無事なのかい？ 怪我はないのかい？ 」

「 え ？ 」

それを聞いて邦彦は不思議そうな顔をした。

ちよこちよこ肌の表面からは血が滲んでいたが、ただのかすり傷だとはわかっていた。

「 別にどこも痛くありませんけど…… 」

「 そういつ問題じゃないでしょうが！ 」

そう言うと安嶋は少し怒った様子で言い放った

「 君はトラックに撥ねられたんだよ。それでどこも痛くないなんてありえないでしょ 」

「 はあ…… 」

その問いに邦彦は返答に困った。

まさか言えるはずがない。自分は状況に応じて身体を鋼化できる
特異体質だなんて

「とにかく、今すぐ病院に行きなさい！」

「でも」

「でもクソもないよ！ 君は車に轢かれた怪我人なんだから！」

「はあ……」

その言葉に邦彦は困ったように頭をかいた。

少し問題があつたかもしれないな。

邦彦は自分が激突したトラックのヘッドバンパーが大きくへこんでいるのを見て、事の重大さを痛感し始めた。

きつと渋谷で通り魔を鎮圧したあの大学生も同じような気持ちだつたのだろう。

自分たちの力はこんな大勢の人の前で露にするにはあまりにも危険すぎる。彼らの前で自分の存在を世間に誇示するのは忍者としてあつてはならないことだ

だが彼も自分も同じ言い訳をするであろう。こうするしか他なかったと。

救急車のサイレンが遠くから急激にこちらへ近づいてくる。

多分どこを診ても異常は見つからないとは思っけど、あねに乗る
ほが残った手段はなとそつだ。

19話 ゴールデンの夢破れ

「……はあ」

初めてのゴールデンの地となるはずだった新東京テレビの岐路、英太は電車のシートに座り深いため息をついた。

「ものも見事に……すべったな」

「……そうだね」

相方マサシは言葉少なにそういうと手に持った携帯ゲーム機の方を集中させた

何のゲームだかわからないが、きっとRPGのレベル上げだろう。先ほどから同じ動きしかしていない気がした

「しかし、なんでだろうな……前のコンビ俺たちよりすべってたはずだぜ？　なのにあいつらはオンエアに乗るなんて　なんか理不尽だよな」

「うん……」

「ここまで来たらプロデューサーの好みとしか言えないな。爆笑エンターティナーって某プロデューサーのお気に入りじゃないとオンエアされないって噂だし」

「へー、そうなんだ……」

「俺たちの前に出てきたコンビニ　なんていう奴らだったっけ？」

「ピクシーズじゃなかった？」

「そうそう、いい大人の男が妖精コントしだすから、痛いなんの
って」

「……」

ゲームに没頭して沈黙するマサシを英太は苦々しく睨み付けた

「お前、よくこんな気分でゲームしてられるな」

「うん、嫌なこと忘れるから」

「そういう問題か？　オレにはお前の神経がわからん」

そついうと英太は腕組みを組んで窓の外を見た。

もつ日はどっぴりと暮れていた。

「ところで、エータ」

マサシはDSのボタンを押す手を止めずに一言言った。

「……なんだよ」

「今年も学園祭のオフアアの頃だよね」

「ああ、そつだな」

かつたるい　英太はそう言いたげに深いため息をついた

お笑い好きが集まるライブハウスとはちがい、大学生しかいない学園祭の水はどうもトーキョーハンターの肌に合わない気がしていたのだ。

「なんかさー今年、うちの事務所すごい大学担当になったらしいお」

「すごい？　まさか東都大学とか言うなよ　」

「ピンポン！　すごいじゃんエータ。大正解だお！」

「……マジで？」

その一言に英太はくるっとマサシの方を振り向いた。

「どうするー？　東都大学なんてインテリだらけで絶対においらたち受けないよー」

「お前、そんなことでびびってるの？」

「だって、あんな中でおいらたちのネタやったら公開処刑みたいなもんだお……」

「バカだなあ……お前」

そういうと英太は携帯ゲーム機に夢中のマサシの目をじっと見るように言った。

「受けるか受けないかやってみなきゃわかんないだろ？ たとえお笑いとか知らないエリート大学生でももしかしたら 受けるかもしれないぞ」

その一言にマサシは初めて携帯ゲーム機から手を離し英太の顔を見た

「あれ？エータ……心変わりしたの？」

「何が？」

「だって、大学生に俺たちのネタは受けないって言ってたのおまいじゃん……」

「ああ……そのことね」

そう言うと英太は不敵な笑顔を浮かべた。

「そんな選り好みしてたら俺たちってビッグになれないようなそんな気がしてさ」

「それはそうだけど……」

「それにあの天下の東大生を笑わせてみる、それだけでも俺たちに箔がつくんじゃね？ これってチャンスだと思わない？」

「うーん」

その言葉にマサシはしばしの間うなづいたが、すぐに頭を縦にふつた。

「そうだよ！ エータの言つとおりだよ！」

「だろ？」

「よし、こうなつたら東大生を爆笑させるネタ考えるっきゃない
でぞ！ エータこれからおいらのうちに」

「それはパス」

英太その一言にマサシは呆然とした顔をした。

「……なじえ」

「だって俺 今日これから人に会う約束あるからな」

「これから ? エータって彼女いたっけな……」

「じゃ、俺はこの辺で……」

そう言つと英太は座席を立ち電車のドアのほうへと歩いていった。

マサシははつとした、話し込んでいて気づかなかつたが英太が電
車乗り換えるターミナル駅に近づいていたのだ。

「エータ。明日は空いてるよな？」

「さあなあ……俺のバイト次第 だな」

「バイトねえ……」

あれ、ところでエータって何のバイトしてるんだっけ？

その言葉を聞いてマサシはふとそう思ったが、聞き返そうとしたときにはもう英太は電車を降りてしまっていた。

何故だろう　電車を降りてホームに向かうエータはマサシの知ってる彼とはどこか違うような気がした。

20話 風魔の英太

摩天楼の底の底、世間の喧騒から離れたビルの谷間を彼は冷めた目で見下ろしていた。

ビルの屋上の縁にちょこんと腰をかけ、まるで何かを待ちわびているかのようにその下を見つめ続けていた。

風間英太は普段絶対に着ることのない黒のタンクトップを着ていた。

そして、その右腕に彫られているのは摩利支天の刺青 風魔忍者の旗印だった。

「何の用だよ？ 理沙」

英太は後ろを振り向くことなく背後から迫る女の影を一言静止させた。

彼女の腕にも摩利支天の刺青が彫られていた。

「いいえ、別に」

理沙と呼ばれた女は英太よりも若干年上に見えたが、彼女は彼に一言一礼し敬意を払った

「今日はえらくお早い登場と思ったのよ」

「夜が暇になった。ただそれだけ」

「ふーん。またオーディションにスベったのね」

その一言に英太は初めて表情を曇らせ理沙のほづをにらみつけた。

「……うるさい！」

「その様子を見ると凶星のようね」

そう言つと理沙は英太の横に立つと淡々とした表情で語りだした。

「ねえ、あなたいつまで売れない芸人やるつもりなの？」

「それは、俺が納得するまで……」

「あなた、自分の立場わかってるの？ あなたは風魔流に残された唯一の継承者なのよ！ それなのに忍ぶ世界とは正反対の芸能界めざすなんて……どうかしてるし！」

その言葉を聞いて英太はうんざりした表情を浮かべた

「あーあ、また理沙の説教が始まった」

「説教じゃないの！ 私はあなたのいるべき場所に帰れって言ってるの……」

「その話はもうやめよう」

そう言つと英太はビルの縁にゆっくりと立ち上がった

「俺は風魔を継ぐ前に小さい頃の夢を叶えたかっただけ！ それだけだよ」

「でも……さ」

「それに俺ちゃんと任務もそつなくこなしてるだろ！ それでも文句あるのかよ！」

「……………」

その一言に理沙は反論する言葉を失い、悔しそうな表情をかみ締めた。

「わかったわ。好きにすればいいじゃない」

「言われなくてもそうするよ」

「でもね、これだけは覚えておきなさい！ 英太！」

そう言つと理沙は険しい表情で英太をにらみつけた。

「もし他流派の連中が私たちを攻撃するような状況がこれから起きるかもしれない……そうだったら、あなた芸人をすっぱり辞めて私たちを率いて頂戴」

それを聞いて英太は無邪気な高い笑い声をあげた。

「おいおい。理沙、それマジで言ってるの？ こんな時代に忍者大戦みたいなことあるわけねえじゃん」

「……私は本気よ」

「本気かハツタリかは知らねえけどさ、そうなたら超面白いよな！」

「は？」

理沙は目を点にして英太を見た。彼はニヤニヤと不敵な笑みを浮かべながら期待に胸を躍らせているようだった

「だって、日本 いや世界で一番強い忍者がそれで決定されるんだろ？ そんな状況、俺は燃えちゃうね。最強って言葉、すっげえ魅力的！」

その言葉を聞いて理沙は不思議そうな表情で英太を見た。

どうしてこんなに忍者としての素質があるっていうのに、この子はお笑いの道など選んでしまったのだろう？

いくらお笑いの道が夢だと言っても、彼には許されない道だとわかってはいるはずなのに……

そう思うと理沙は英太のことがますますわからなくなり首を傾げるしかなかった。

「さて……と」

英太は一言そういつとビルの下の様子を鋭い瞳で覗き込んだ。

眼下には数人の人影がこちらの様子を先ほどからじろじろと伺っ

ている。

「理沙、客が来たようだぜ」

「あら、本当」

「……なあ、今日は俺一人であいつら片付けていい？」

英太のその問いに、理沙は一瞬首をかしげた。

「えらい張り切ってるわね」

「当たり前だろ。俺は今モチベーションが上がってるの！」

そう言つと英太は懐から一本の短い棒を取り出した。

それは英太の手に握られるといとも簡単に三倍の長さに変化し、そして彼はその棒を軽やかに回して見せた。

「まあ、見てろよ。あんな雑魚5分で片付けてやるよ」

英太は一言そういつと、何のためらいもなくビルの屋上から宙へと踏み切った。

そして暗黒漂う谷間の中心へと変形棒を構えて急落下していった。

ビルの谷間で待ち構える人影たちは、その異変にぎよつと空高く見上げた次の瞬間、英太は棒を振りかぶり激突する地面めがけて振りぬいた。

その瞬間、衝撃で地面はえぐり上がれ激しい衝撃波が彼らの身体を吹き飛ばしてしまった。

はらはらと宙に舞う土埃の中、くぼんだ地面の真ん中で英太は棒を構えて立ち尽くした。

目の前の敵は暗闇の中どこからともなく増えていく。

そうだ、それでいいんだ。

英太はそれを見てにやりと笑みを浮かべ瞳を鋭く光らせた。

そして、無言のまま彼は好戦的に敵に棒を突きつけた次の瞬間、彼は地を蹴り敵に向かっていった。

21話 ともえと早紀

そのころ

メイド喫茶のバイトをギリギリで切り上げた仁科ともえは久々に
在籍する大学を訪れていた

冷泉大学 日本屈指のお嬢様学校と呼ばれる学校にともえは一
応通っている

一応と付けたのはメイド喫茶のバイトが忙しくてあまり熱心に大
学に通ってはいないから。

でも一応進学のために上京してきたのだから、行かないわけには
いかない場所 というべきなのだろうか

構内でも一際目立つピンクのゴスロリファッションでもえは堂
々と通学する

屈指のお嬢様学校だからさすがにこんな格好をすると自分が浮き
に浮きまくっているのは承知の上だ。

だがこの格好をして目立つということとはともえにとってかなり心
地いいものだった。

いくら白い目でみられようが陰口をたたかれようが、そんなのど
うだっていい。

お嬢様たちのファッション雑誌のコピーのような服装よりか自分

の方がずっと健全だともえは心の中でそう思っていた

「なんとか間に合ったわ」

今日こないと単位が危ないと脅された授業会場につくと、ともえは一言そうつぶやいた。

そして席にすわると、ピンクのフリフリレースのあしらったバックからルーズリーフを余裕の鼻歌まじりに取り出した。

今日、受ける授業はあまり人気がないのだろうか……講義室は若干寂しく生徒がぼつぼつ座っているだけだ。

まあ、あたしを脅しにかかる講師の担当の授業だ。面白いわけがない。

それに人が少ないほうが落ち着いて自分の世界に浸れる

本当は今日はバイトや授業どころなんかではない。

アキバの量販店で見たあのニュースの中の彼のことを思い出すともえは自然と胸がときめいた。

藤林悠輔 会いたい！ でもどうやって彼の前に出ればいいのかろう。

あたしはあなたの元婚約者で今までずっとあなたのことを想って生きてきました。こんな本当のことをいきなり言ったらきつと引くに違いない。

それに　許婚とは言ってもともえと彼は一度も会い見えたことは一度もない。

もしかしたら、彼は自分のことなどとうの昔に忘れてしまっているかもしれない。

それでも、写真でしか見たことのない彼をともえはずっと愛していた。

伊賀と戸隠のお互いの事情で破綻となった婚約だけど、ただ一人ともえの中でだけそれはずっと生き続けていたのだ。

ともえが病んだようなため息をひとつ吐き出したその時、ひとがまばらでしんとした講義室にぎやかな声が入ってきた。

それは3人組の女子学生。彼女たちは妙に盛り上がった状態でぺちやくちやおしゃべりをしながらともえの前の席に座った。

「いいなあ。早紀の彼氏……うらやましすぎるよー」

その中の一人少しぼつちやりとした茶髪女は講義室に響くような声でそう言った。

「ねえねえ、そんな男どこで知り合ったの？」

「んーとね……合コンだったかなあ？」

「うそおー！　あたし何回も合コン行ってるけど当たり前なんて一度もないよ」

「そうそう、大体は下心ミエミエのスケベな男子ばつかなんだよねー」

そう相槌を打ったのはひよろりと痩せた黒髪の女だった

「てかさあ、東都大学との合コンだなんてなんで私たちに誘わないのー？ 私、早紀と親友だと思っただのにい〜」

東都大学？

その単語を聞いてともえははっと顔を上げた

最初はうるさいガールズトークだと興味のなかった3人組の話だったけど、それを聞いたとたんともえはそわそわと落ち着かなくなつた。

「そう言われてもねえ」

困つたようにそう答えたのは3人の中で最も容姿の整つた女、進藤早紀だった。

「私も東都大学って聞いてさほど期待はしなかったのよ……」

「そんなの嘘だあ。東都大だなんて未来のサラブレッドの卵の宝庫じゃない」

早紀のその言葉に連れの女子たちはブーブーと反論した。

それに対し早紀はあきれたような笑みを浮かべた。

「でもね本当なのよ。向こうのメンツも対したことなかったし、あなたたちの言うとおり下心ミエミエの男子ばかりだったの。最初はね」

「最初？」

「でもね、会が始まって程なくして向こうの一人が急用で帰っちゃったの。そしたら席が開いちゃってさあ。多分東都大側の男子焦ったんじゃないかな？ 急にトイレに籠って席を埋めるため友達に片端から電話したんじゃないかな？」

「それで来たのが 今の彼氏？」

「最初、彼が来たときさ……全然乗り気じゃなくて、むしろすつごい不機嫌そうで感じ悪かったわ。でもね、ルックスは私たちの中で一番人気だった。眼鏡かけてるけど全体的に整ったイケメンタイプだったわ」

「ふーん、顔は満点、態度は0点なんだ」

「でもね、確かに最初から無口で無愛想だったけど、私は逆にそこが気に入っちゃったな。彼、ほかの男子とは明らかに違う雰囲気出してたもん。なんか、そういうところがミステリアスでもっと彼のこと知りたいって思っちゃった」

「で、アドレス交換したんだ」

「うん。最初断られるかなって思ったけど、快くアドレスは交換してくれたわ。それからちよこちよこメールあって、2週間後二人きりで食事して」

「あー！もういいわ！ 早紀ののろけにつきあってらんない！」

そういうとぽっちゃりの茶髪女は迷惑な高い声でそう叫んだ

「早紀、あんたラッキーよ。そんな男 このご時勢めつたにいな
いんじゃない？」

「そうかな……」

「だって、大学は一流だし、顔はイケメンだし 性格はどうかは
知らないけど、パーフェクトに近いじゃん。それに」

そういうとひよろりとした黒髪女がにやっと絵顔を浮かべ続けて
言った。

「あんたの彼氏、この前渋谷で通り魔取り押さえたんでしょ。それ
って腕っ節もそこそこ強いつてことじゃん！」

それを聞いて後ろにいたともえは思わず息を呑んだ。

それは彼女が想っている男性そのものと同じだったのだ。

「シーツ！ それは内緒だって言ったじゃない！」

早紀はその言葉を聞いて急に声を潜めて注意した。

おそらく彼女の恋人とこれは口外しないという約束でもしていた
のであろう。

それを聞いた彼女の顔は若干不機嫌そうだった

「あっ！ごめん。ついつい……」

そう言つとひよろりとした黒髪女は軽く反省した。

「本当に勘弁して。彼、その件あまり喜んでないようだからさ……だから私もあまり人に言わないようにしてるのに」

「でもさ、昨日のニュース見た？ あんたの彼氏映ってたよ？」

その言葉を聞いて早紀は複雑な表情を浮かべて黙り込んだ。

それはどこか本当は自慢したいのだが必死で我慢しているようなそんな風につつた。

「ほら、あんたの彼氏は誇れるようなことしたんだよ。だからじゃんじゃん自慢したっていいと思うよ」

「そうそう、のろけにつつまかもしれないけどさ。こういうことはじゃんじゃんアピールしないと」

そういつたその時、早紀はふつと後ろを振り返った。

彼女の背後にはどこか恨めしい表情でじつと前を見つめるゴスロリ姿の女子大生ともえがいた。

早紀と目が合った瞬間ともえははつと彼女から目をそらして、読んでもいない教科書に目を通した。

だが、彼女たちの話を聞いた動揺はさすがに隠すことはできなかった

何、あの女……

教科書で顔を隠しながらともえは悔しさで思わず歯を食いしばった。

本当は自分の婚約者だった男を何故この東京女がものにしていくと思うともえは嫉妬で心がいつぱいになった。

あんたみたいな一般人に悠輔は似合わない！

ともえは前に座る何も事情を知らない早紀にそんな呪いの言葉を投げかけた

彼女のその手には呪いの藁人形がぎゅっと握り締められていた。

22話 戸隠のともえ

久々に大学の帰り道

単位取得のための補習を受けてたせいで気づけばもうあたりは真っ暗になっていた。

ともえは疲れきったような深いため息を吐いて自宅近くの最寄り駅を出た。

下宿の住所はどちらかといえば都心の方だと思うけど、住宅街だからか夜の帰り道は街灯が少なく人気もない。

明らかに変質者が出没しそうな、不気味な夜の路地。

ともえが厚底ブーツを鳴らして夜道を歩いていると、明らかに異質に聞こえるもう一人の足音が高く響き渡った。

また、来たよ。

尾行に慣れてないノンプロ的足音を聞きながら、ともえはあきれたようなため息をついた。

最近自分の周り嗅ぎまわるストーカーがいることは承知の上。

といっても相手は危険でもなんでもないもてないオタクたちばかり。放置していてもたいした被害はないのはわかっている。

だけど　　ここまで、あたしを追いかけてくるなんて……いい度胸

してるじゃない。あたしをどこの誰かと知ってやってきてるのかしら

そう思った瞬間、ともえはくるりと後ろを振り返った。

それと同時に足音もぴたつと止まり、人影はさつと近くの電柱に身を隠した。

「……隠れても無駄なんじゃない？」

ともえは明らかに不愉快な表情を浮かべて彼にそう告げた。

「あたしはあんたが付けているのずーっと前から気づいてるよ。そんな幼稚な尾行はあたしには通用しないってば」

そういつた瞬間、電柱に身を隠していた人影はにゅっと顔を出した
いかにも根暗そうな眼鏡をかけたやせた男 彼はのそのそともえの前に出ると一言言った。

「ともえちゃん……僕と付き合って!」

「そういうのお店で禁じられてるんだよね」

「そんなの関係ない!」

そういうと男はどこからともなく花束を出し足を速めてともえに向かってきた。

「『ぶるーむ』で君と出合った瞬間運命を感じた。ともえちゃんが

いないと僕　　どうにかなりそうだよ！　だから　　お願いだよ。
僕と付き合って　　」

「断るわ」

そういつた瞬間、ともえの瞳が暗く光った。

そして花束を持っていた男の手首を彼女は軽くひねって制したのだ。

「　　ッ！」

その瞬間、男が持っていた花束と同時に小さな果物ナイフも乾いた音を出して地面に落ちていった。

それをとめえは感情のない瞳で飄々と見つめていた。

「こういう物騒なもの、あんたみたいな甘ちゃんが持つものじゃないわ」

そう言うともええは地面に落ちた果物ナイフを拾った次の瞬間、それを彼の喉元に鋭く突きつけた。

彼女に手を固められる苦痛とナイフの鋭い脅威に男は半べそをかいていた。

「あーあ。だから弱いオタクなんて嫌いなんだ」

その瞬間ともええは果物ナイフを宙に投げ捨てて一言言った。

「あたしはね、もう運命の人を決めてるんだ。だから誰がどんなに

ストーカーしようとも無駄無駄！ まあ、命の保障はしないのなら別だけどね……」

そう言うともえは強く握り締めていた男の手をやっと開放するとこっと笑った。

次の瞬間、一陣の風がその場に強く吹きつけた。

季節はずれの木の葉がその強風にあおられて舞い上がると、彼女は男に向かってバイバイと手を振った。

そして、木の葉が彼女を隠した瞬間、風とともに彼女は消えた。

男は腰を抜かしながらともえの姿を探したが、彼女はまるで魔法を使ったかのように目の前いなくなっていたのだ。

「何者なんだ……」

男は地面にへたりこんで声を上げずらせそう言うしかなかった。

まるで幻だったかのような彼女の存在は男にとって小さな悪夢のようだった。

23話 応変の邦彦

そのころ

応野邦彦は浮かない顔をして病院から自らの足で歩いて出てきた。

何度診ても無駄だというのに 邦彦はそう思いながら不機嫌そうな顔をした。

確かに普通の人間なら命はなかったかもしれない。トラックに真っ向から衝突してしまったのだから

しかし、邦彦の身体は生まれつき普通ではない。だが、事を目の当たりにしていた人々にそれを伝えるのは許されないことだった。

しぶしぶ救急車に乗って病院に着いたはいいものの、それから検査検査のオンパレード。

何度診ても無駄だというのに、医者はずっと邦彦の悪い部分を見つけて出そうと躍起になっていた。

仕舞いにはどこも悪くないのに検査入院しろと散々医者にせがまれてしまい、半ば喧嘩別れのように病院飛び出してしまった。

一般ピープルには信じられない話だろうが、邦彦の身体は驚くほど頑丈に出来ている。

身体鋼化 それが邦彦の受け継いだ応変流忍術の奥義。どんな衝撃が彼を襲おうとも鋼鉄のように硬くなった身体は最小のダメージ

で切り抜けられるのだ

ただ、それを職場の同僚や医者にはたやすくは言ってはならないことは邦彦も重々わかっている。だからみんな過剰に心配するのだ。

なんか余計な気苦労ばかりだ。何も知らない人たちにそのことを説明するなんて

邦彦は疲れたような深いため息をついてとぼとぼと街の路地を歩いていた。

カチカチと切れかけの点滅をする街灯に遠くでは番犬が吠えている声が聞こえた。

人気のない路地裏を歩いていたその時、対面側から一つの人影が目に入った。

邦彦は思わず足をぴたっと止め、そして鋭い視線でその前を見た。

どンドン足を速めて邦彦に近づく影。それは闇に白く光る刃を抜くと同時に勢いよく大地を蹴って邦彦に襲い掛かった。

だが、その行動は大分早くから邦彦は予想していたことだった。

彼は焦るそぶりも見せず、じっとその場に立ち尽くし男を細く鋭い瞳で見つめ続けた。

そして男の持つ刀が彼を断つために振りかぶられた瞬間だった

今まで動かなかった邦彦は刹那のごとく男の懐へ飛び込み、そして

大きな手をかざした。

次の瞬間、その手から驚くほどの衝撃波が走った。

日本刀を振りかざしていた男はその計り知れない力にあおられてまるで木の葉のように舞い跳んでいってしまった。

「やれやれ……」

邦彦はため息とともに一言そういうと、くるりと後ろを振り返った

そこには四人の刺客が刀を構えて立ちはだかっていた

「こんなはた迷惑な刺客を送り込んだのはどこの流派だ……」

そう言った次の瞬間、刺客たちは無言のまま邦彦を取り囲んだ。

話がわかってくれそうな相手ではないようだ

その瞬間、いつもは寝ているような邦彦の細い目がギラリと大きく見開かれた。

そして、まるでタイミングを計ったかのように同時に襲い掛かった刺客を一人、岩のように大きな拳で一気にねじ伏せた。

その隙に乗じて他の刺客たちも刀を振り上げ次々と邦彦に襲い掛かった。

だが、邦彦は焦ることも避けることもせず、まるで仁王立ちのごと

く彼らの前に立ちはだかった。

そして、次の瞬間刺客の刃が邦彦の身体を切り裂いた。はずだった。

その刃はぴたつと動きを止めていた。邦彦の腕のすぐ前で。

斬れるはずがない。この身体は鋭い刃の一振りですえまったく通さない鋼鉄の身体なのだから。

腕一本だけで刃を受け止めて見せた邦彦に対し、刺客は明らかな焦燥感を浮かべていた。

鋼のような腕に思いつきり刀に力をこめ無理やり切り落とそうとしているようだがその刀は刃こぼれし始めていた。

それを見た邦彦は刺客の刀を払いのけると大きく息を吸い込んでもう一度刺客たちに手を大きくかざした。

次の瞬間、邦彦の手からまた眩い光と大気を揺るがす衝撃波が放たれた。

放たれた波動に刺客は対処する暇などなかった。あまりに強い衝撃は刺客を簡単に弾き飛ばし地面に叩きつけたのだった。

それを見て残りの刺客たちは恐れをなしたのか一歩また一歩と後ずさりし始めた。

邦彦は深いため息をつくとき、彼らとは反対側の電信柱をにらみつけた。

「いい加減降りてこい」

邦彦は一言そういうと掌をかざし光の弾を電信柱に放った。

だが、その光の弾は電信柱で高見の見物をしていた影を撃ち落とすことはできなかった。

音速のような光の弾を華麗に避けるようにその影はふっと地上に降りたのだ。

それを見て邦彦は初めて顔に警戒の色を見せた。

電信柱から降りてきたその男の服装はなぜか警官姿。だがそれ以上に邦彦を警戒させたのはその男が持ち合わせる強い波動と殺気だった。

「ほほう……これが東北一といわれる応変流の闘気術って奴か」

警官姿の男上月静夜はニヤニヤと笑いながら邦彦を見た。

その瞳は寒気がするほどの青白い光を常に放っていた。

「それに、お前の身体はえらい硬いんだな。びっくりしたよ……刀は受け付けないわ、トラックに轢かれても平気だわ」

その言葉を聞いて邦彦ははっとした。

何故昼間のあの事故をこの男は知っているのだろうか？ まさかと思うがあのときからずっと監視してたのか？

「お前……何者だ？」

そんな不信感を吐き出すかのように邦彦は静夜に向かって訝しげにそう聞いた。

「そんなに警戒することはないだろう。別に俺はお前の流派を潰そうなんておもっちゃいない」

邦彦の質問に静夜ははぐらかしながら淡々と答えた。

「まあ、名乗るような者じゃないけどお前たちみたいな弱小流派じゃないって事だけは言っておこうか」

「何？」

その一言に邦彦は明らかに怒りの感情がこみ上げた。

それを見て静夜はいやらしい笑みを浮かべて邦彦の前に近づいた

「今回、お前を襲ったのは何の意図もないさ。ただ応変流最後の使い手って言われてる応野邦彦の戦いっぷりが見たかっただけ。それだけさ」

「ほう、それだけのためにわざわざかわいい部下を僕に差し出したのか？」

「俺の目標はすべての流派の奥義を破ること。そのためには研究が必要なんだよ」

何だこいつ 目の前に現れた謎の警官姿の男上月静夜の言葉に邦彦は明らかな不信感を募らせた。

どこの流派だか知らないが、彼の言うとおりなら相当な大流派の幹部クラスの忍者であろう。

だが、彼がこの場に現れた理由が邦彦にはいまいちよくわからなかった。

巨大流派の忍者たちが覇権を争っている中、一つ東北地方に取り残された応変流の後継者である邦彦に一体今更何の用なのだろう？

「しかし、非常にもつたいないね」

静夜は一言そういうと深いため息をついて邦彦を見た。

「応変流はそれほどまでの力を持ちながら何故その力を発揮しようとしななんだ？」

「今の時代、ボクたち忍者が活躍できるとでもおもっているのか？」

「ああ、今の時代だからこそ俺たちは生き残らなくてはならない」

その言葉を聞いて邦彦は初めて頬を緩めて笑った。

「何故、笑う？」

それを見て静夜は初めて怪訝そうな顔を浮かべて言った。

「今の時代だからこそ生き残る？ 馬鹿馬鹿しい。ボクはこんな時代だから忍者は消えた方がいいと思ってる」

「ほづ……」

「お前が伊賀だか甲賀だか知らないが時代が変わっても覇権争いはかりしているお前らをボクは軽蔑するよ。むしろボクはそんな覇権争いを止めるために自分の力を使う」

その言葉を聞いて男はにやつと嫌な笑みを浮かべた。

「なるほど。正義のヒーロー気取りだな」

その一言に邦彦は黙ったまま静夜をにらみつけたが彼は表情を変えず淡々と言葉を続けた。

「まあいいさ。弱小流派に今の情勢など関係ないみたいだから……せつかく俺が伊賀の若き家元の正体をばらしてやったって言うのに」

「何？」

その言葉に邦彦ははつと顔を上げた。それを見て静夜は嬉しそうに微笑んだ。

「おや、やっぱり気になるようだね。あんなに覇権争いはゴメンだつて言ってたのに」

「それは」

「俺たちの争いを止めるために力を使いたいわうて言うなら、俺よりまずあの青年を何とかしないと話のつじつまが合わないぜ。なんせ彼はあんなに若くて大手の伊賀の率いているのだからね」

そう言う静夜の顔は見ているこっちがむしゃくしゃするほど楽しそうに見えた。

邦彦は不機嫌そうに顔を背けると戦意を喪失したようにくると静夜から背を向けた。

「もう、やめだ。ボクは帰る」

「どうして、もっとめばしい情報をあげるって言うのに？」

「伊賀や甲賀の覇権争いに巻き込まれる筋合いはボクにはない。それだけさ」

「ほう……じゃあ、戸隠のくノ一の情報はいらないのか？」

不意な静夜のその言葉に歩みだそうとした邦彦の身体は一瞬ぴたっと固まった。

それを見て静夜はさらに煽り立てるかのように言葉を続けた。

「俺はずっと前から知ってたよ。お前らの流派と戸隠の浅からぬ因縁があるってことはね。だから今からお前が欲しがってる情報をあげようって言うのに……」

。そう言うと静夜は深いため息をついて邦彦にむかって背を向けた。

「まあ、いらないうて言うんならいいんだけどね。俺には何の関係もない話だし　！」

その瞬間だった。静夜は急に踵を変え軽やかに宙を舞った。

それと同時に彼のすぐ真下を駆け抜けた強い衝撃波。

後ろからの強襲を予知したかのように静夜はそれを避けるように空を跳んでいった。

「不意打ちね……」

地面にすつと降り立った静夜はそういうとじろりと邦彦をにらみつけた。

「この答えはどう取ったらいいんだろうな……」

「簡単さ」

邦彦は静夜に立ちほだかるかのように構えた。

「ボクはお前の計画にはそう簡単には乗らない」

「ほづ……ではここで俺とやり合っつていつのか？」

「いいや」

そう言つと邦彦はまた放ち続けていた殺気を納めまた静夜に背を向けた。

その態度に、静夜の顔は余裕から困惑へと変わった。

「あんたの言うとおり応変流と戸隠流は強い因縁の歴史があつてね……その決着だけはボクがけりをつけなくてはならないんだ。だから」

「情報が欲しいとでも？」

その言葉に邦彦は大きく頷いた。

それを見て静夜は、一瞬戸惑った表情を浮かべたがすぐにそれは気持ち悪いような笑みに変わった。

「やれやれ、虫のいい話だぜ」

そう言うと静夜はあきれたように両方の手のひらを上に向けた

「俺の計画どおりにならなくて自分の因縁にけりをつけようなんて欲張りすぎもいところだ」

「だからボクは力づくでもその情報をお前から吐き出させるつもりだ！」

その言葉を言ったとたん、邦彦の背中から這い出るような強く禍々しい殺気が発せられた。

それを真つ先に感じた静夜はまるで強く警戒するかのよう真顔で聞いた。

「お前……それ本気か？」

その言葉に邦彦はただゆっくりと頷くだけだった。

静夜はそれを見て一瞬考え込んだが、その決断を下すのは思っていたほど遅くはなかった。

「わかった。今回だけはお前に乗っかってみよう……」

24話 秋葉原での運命の出会い

久しぶりに来た秋葉原は少しだけだが活気がないような、悠輔の目にはそう見えていた。

無理はない。折の不景気と去年の通り魔事件の影響をもろに受けているのだろう。

だが、逆にその方がアキバ独特の浮ついた嫌な雰囲気がなくてどこか過ごしやすい町になったように悠輔には思えたのだ。

「でさあ、悠輔。テレビのことどうするのー？」

駅ビルから直通で伸びる大型電気店に向かいながら一緒に歩いてきた早紀は大声でそう聞いてきた。

「どっつて……普通でいいよ」

「だから、その普通って何？」

「何って言われても……」

強い口調で早紀にそう言われて悠輔は困ったように閉口した。

先ほどからずっとこの調子だ。一応無事引越しが終わって一段落していた昨日、早紀が部屋を訪れたとたん言われたことが「何この旧式のテレビ！」という一言だった。

悠輔は今まで自分のテレビが旧式だとはこれしきも思ったことなどなかった。

ちゃんと写るし音も出るしどこが悪いのかよくわからなかったけど、早紀曰く「これからは地デジの時代！」と言うわけで彼女連れでしぶしぶ大型電気店に買いに来たのだ。

とは言うものの　テレビは壊れてないのに買い換えるってことに悠輔はどうも気が進まないところがあった。

地デジになって今のテレビが見えなくなるのにあと三年　それまで使えればそれはそれでいいじゃないか。

だが、都会っ子の早紀からすれば、自分の彼氏の部屋に真っ黒なブラウン管テレビがあることが許せないのだろう

それを証明するかのようにテレビの品定めは悠輔よりも早紀の方が熱心だった。

「悠輔の部屋の大きさだと　32インチくらいがいいのかな」

「ええ、それ大きすぎるよ！」

「大丈夫よ。今液晶テレビは値崩れ起こしてるんだから。悠輔の予算で十分買えると思うよ」

「別に買うつもりなんか……」

悠輔はその言葉を続けようと思ったがそれを胸の奥に飲み込んだ。

たくさんの液晶テレビのディスプレイの前早紀は真剣な顔をして品定めしていたのだ。

「ねえ、そんなに本気にならなくても……」

「だーめ！　悠輔はもう少し都会っぽくならないとだめだよ！　ここは東京！　三重の山奥とはちがうんだから！」

「……………」

その一言に悠輔は重たいため息をついた。

テレビが古いか新しいかなんて自分の好き好きじゃないか。なんで人に指図されないと……

「こんにちはあ〜」

そこにまるで呼ばれてもないのに赤いハッピに鉢巻をした店員が割り込んできた

「お客さん。何かお探ですか。テレビのことなら私にお聞きください」

「そうなんですよ。32インチくらいで十五万くらいで買える液晶テレビ探してるんですけど」

早紀のその言葉は鉢巻の店員のスイッチを入れてしまった。

お客ゲット！という声が聞こえるかのようにニカアと笑うと猛烈な勢いでしゃべりだした

「いやあ、若奥様お目が高い！ そういうことなら私にお任せくださいよ。まずこの松芝電気の液晶テレビこれは今当店のお勧めの一品ですよ。それに」

何が若奥様だよ……しゃべりまくし立てる鉢巻の店員をじろつとにらみつけながら悠輔は心の中でそう思った。

きっとこの店員はきつと自分たちのことを新婚カップルだと勘違いしているのだろうけど、それはかなり迷惑な話だった。

延々とテレビの売り込みを図る店員のトークを話半分に聞きながら悠輔はもう一つため息を付いた。そのときだった。

「あろう……」

そのか細い女の声を聞いて悠輔は思わず不機嫌そうな顔のまま振り返ってしまった。

だが、そこにいたのはピンクのフリフリのコスロリファッションに身を包んだ明らかにアキバにいそうなコスプレイヤーが立っていたのだ。

「藤林悠輔さんですよね？」

「え……」

その言葉を聞いて悠輔は思わず眉をひそめた。

彼にはこのコスロリファッションの彼女にまったくの見覚えがな

かったのだ。

「君は誰だい？」

悠輔は不審そうな表情を浮かべ彼女に冷たく一言そう聞いた

だが彼女はお構い無しにニコツと笑った。

「あら？ やっぱりあたしに見覚えがないんだ……まあ、半分覚悟はしてたけどね」

その言葉を聞いて悠輔はもう一度頭をひねった。

一体このゴスロリの少女は何者なのだろう。

まるで自分を知っているかのような口ぶりに悠輔は不快感しか浮かんでこなかった

「いいの。気にしなくて」

「は？」

「あたしはあなたの反応を確認したかっただけ。でも思っていたほど驚かなかつたなあ……」

「……………」

その瞬間、悠輔はこの少女の存在を少しだけ警戒し始めた。

別に危険ってわけでもないが、この少女は何かが違う。それが何

かと言うのは今はまだわからないけど、わからないから余計不安だった。

「君の名前は」

「どうしたの？ 悠輔？」

緊張感を漂わせる悠輔を電器店店員とテレビの話しをしていた早紀が心配した様子で顔を覗かせた。

「やだ、怖い顔ねえ……なにかあったの？」

「あら、進藤早紀さんじゃない」

早紀の顔を見てゴスロリの少女はまた裏表ありそうな笑顔をにっこりと作って見せた。

「え……？」

その言葉にさすがの早紀も戸惑いを覚えずにはいられないように悠輔には見えた。

早紀も知っているということはいまは ますますこの少女の正体が見えなくなったような。一体彼女は何者なんだ……

「ねえ、知り合い？」

悠輔は早紀に口を隠しながらひそひそとそう聞いたが、だが肝心の早紀は首をひねるばかりだった

「どこかで見覚えがあるんだけど……だれかは？」

「やだあ。忘れちゃったの？ ダメじゃん……」

早紀の言葉に対しゴスロリの少女はあきれたような表情を浮かべて二人に近づいた。

「よく講義室で一緒になるじゃない。冷泉大学のさあ」

「あれ、私と同じ大学？」

「そうだよー！あたしのこと気づいてないの〜？」

「……………」

少女のその言葉に早紀は頭をもたげてしばらく考え込んだ。

沈黙することしばし、早紀ははっと顔を上げて彼女の顔を見つめた。

「あ……！ あのとときのゴスロリの！」

「やだあ。今更思い出したの？」

そんな早紀の態度にゴスロリの少女はちょっと不満げな表情を浮かべた。

「あたし、こんな格好だからもう少し早く気づいてくれると思ったのにー。ショック……」

「ごめんごめん、すぐに頭に浮かばなかったんだ……」

「もう、信じらんない！」

そう言つとゴスロリの少女はぷんぷんと怒った表情を浮かべた

それを見つめる早紀はどこか戸惑っているような、見ていてそんな感じが悠輔はした。

おそらくこの二人、さほど仲良くはないのだろう。大学で顔見知り程度の間柄なんだろうなと容易に想像できた

「……ところでさ」

悠輔はそんな二人の間に割って入るように一言言った。

「君、僕の質問に答えてないだろ」

「え？ 質問って……」

「君は一体誰だって事」

そう言つ悠輔の呆れた顔を見て少女はにやっと笑った。

「やだ、悠輔……覚えてないの？」

「はあ？」

その言葉に怪訝そうな目で彼女を見たが、当の本人はまったく気にせず話を続けた

「まあねえー、気づかないほうが普通なのかもしれないよねー。あたしたち写真でしか出会ってないはずだから」

「写真　？」

悠輔はその一言を聞いて一生懸命彼女の顔を頭の中の記憶から引っ張り出そうとした。

自分は人よりも数倍記憶力には優れていると思っではいるものの、どんなに頭の中を引っ掻き回しても目の前の少女の面影は影も形も見当たらない。

やっぱり、この女　まったくもって見覚えがないな。

悠輔がそう確信したその瞬間、彼女はまた大きなため息をついて言った。

「覚えてないならいいわ。私は冷泉大学1年の仁科ともえ。彼女とは　同級生ってことになるね」

ゴスロリの少女はそう言うと悠輔の横にいる早紀をじろっと見つめた。

その目はどこことなくじとっと湿ったような深い暗さを悠輔は感じた。

「へえ、仁科さんって言うんだ……」

だが早紀はそこまで深読みしてないのか、感心したように頷いた。

「ねえ、同じ大学って事だから今日から友達になろう！」

「え……早紀」

マジでそう思ってるの？

悠輔は驚いたように早紀のほうを振り向いた。

彼女は無邪気な笑顔を浮かべ問題のゴスロリ少女ともえに手を差し伸べていた。

そんな早紀の行動にともえは不気味なほど静かな対応だった。

ぴたつと黙り込んだまま彼女の手をジーンと見つめることしばし、やっと溶かしたように心を開くのに大分の時間がかかったような気が悠輔には感じ取れた

「うん、いいよ！」

まるでとってつけたかのような笑顔をともえは浮かべ早紀の手をぎゅっと握った。

それに対し、深読みをまったくしない早紀は嬉しそうな微笑を浮かべた。

「じゃあ、携帯のアドレス交換しようよ！」

「いいよー」

そう言いながら女子たちはお互いの携帯電話を出し赤外線通信を始めた。

悠輔はそれを遠巻きでじーっと見つめながら眉間にしわを寄せ深いため息をついた。

いくら同じ大学の同級生だからとは言っても、こんな得体の知れない女と早紀が知り合いになるなんて

そう思うと悠輔はどうしても心の中に一端の不安を感じざるを得なかった。

それがどういう理由なのかはわからない。ただ一つの理由は仁科ともえと名乗ったこの少女の素性がさすがの悠輔にも完璧に見通すことが出来ないことなのだろう。

第一、どうしてこの女は僕の顔と名前を知ってるんだ？ こっちはまったく記憶がないっていうのに

「あーっ！もうこんな時間じゃん！」

携帯電話をいじりながら仁科ともえはフロア中に響くような大声で叫んだ。

「ごっめーん！ 今日、あたしこれからバイトなんだー！」

「そっなの？」

「もっと悠輔と早紀ちゃんと話したいんだけどさあ……今日は時間がない」

「ううん、いいのいいの！ バイトのほうが大事じゃん」

ともえのその言葉に早紀は何の邪念もなくニコニコと受け止める。

だが隣の悠輔はどうしても解せない気分でいっぱいになっていた。

初体面に近いつて言うのに、この女はどこまでなれなれしいんだ。僕なんてどうしてか呼び捨てだし……

「あたし、アキバでメイドやってるんだ！ そう、この名刺あげるね」

そういうともえは頼んでもないのに悠輔と早紀にいそいそと名刺を配った

メイド喫茶ぶるーむ 秋葉原店 ともえ ……か

フリフリの黒レースをあしらった派手な名刺を見ながら悠輔は深いため息を付いた。

彼女が只者であろうがなかるうが、絶対に仲良くなりたくないタイプの人間なのは間違いない。

できれば今回限りで会い見えるのは勘弁してほしい 悠輔は心の中からそう思っていた

「じゃあ、ばいばーい」

彼女は高く大きな声で二人に大きく手を振りながら立ち去ろうと

したそのときだった。

それはその場にいた早紀や電器屋の店員に決して聞き取れられないだろう小さく潜んだ声で彼女は悠輔だけにある言葉を残したのだ。

「悠輔、眼鏡はずしていた方が絶対かつこいいよ」

「！！！」

その言葉に悠輔は思わず立ち去る彼女を振り返った。

だがいつの間にかあの目立つゴスロリ姿は煙のように消えてなくなっていた。

「どうしたの？悠輔……」

そんな悠輔の様子を早紀は不安げに上目遣いに見上げた。

彼は身も凍るような鋭い瞳である一点をじっと睨み付けていた。まるで先ほどの少女を必死で探すかのような視線で

「いや……なんでもない」

早紀の声を聞いて悠輔は視線を落とし深いため息をついた。

その顔は幾分か蒼白になっているようだった

「本当にどうかしたの？ 顔青いよ……」

「別に」

そう言うと悠輔はもう一つ深く息を吐くと、どこに向かうでもなく歩みだした。

「ちょっとトイレ行ってくる」

「うん……」

そんな彼に困惑しながらも早紀は深く頷いた。

「テレビだけど　もう君が選んじやっていいよ。まかせる」

悠輔は力なさげにそう言い残すとまるで幻鬼のごとくおぼろげな足取りでテレビコーナーから離れていった。

悠輔、眼鏡はずしていた方がかっこいいよ

あの少女が最後に残したその言葉。その言葉は悠輔の胸を大きく動揺させていた。

何を目的にそれを言い放ったのか。それはまだわからないけど、唯一つわかること　彼女が見ていた自分は眼鏡の下の顔だったという事。

彼女は何者だ？　何故僕を知っているんだ？　そして、何の目的で僕の前に現れたんだ　？

その疑問が晴れる時はもしかしたら彼女と敵同士で対峙した時になるのだろうか……

それを思うと悠輔の瞳は赤く不気味に光った。

25話 いつもの帰り道

「本当に信じられない！」

秋葉原からの帰り道、同行してくれた早紀の態度は対応に困るほど不機嫌そのものだった。

「テレビのこと一言まかせるってどういうことよ！ それでトイレからすぐ帰ってきてくれれば話は別だけど それから三十分一体何してたのよ！」

「何って ちよつと迷子になっただけじゃないか」

「いいえ！ 嘘よ嘘！ 迷子になるなんて子供じゃないんだから！」

「と言つてもあの店すごく広いじゃん……」

「そう言うことを言ってるんじゃないの！ 私はあなたの無責任さを怒ってるの！」

「無責任ねえ……」

悠輔はその一言に困ったように頭をかいた。

無理もない。仁科ともえの一件で悠輔の頭の中からテレビなんて飛んでなくなってしまったのだ。

そうとは知らない早紀はあれ以降もずっとテレビの下調べをしていたらしく、戻ってきたときはちょうど悠輔の契約待ちの状態だったのだ。

だが、悠輔にもはやテレビなど買う気などないわけで、そこでもたしても早紀とのいざこざが巻き起こってしまったわけなのだ。

「とにかく！ 今度から大切な買い物にはもつと本気になってよね！ 悠輔どこか抜けてていつも自分は関係ないって顔するんだもん……それが腹が立って仕方ないわ」

そう言つと早紀は怒ったように腕を組みふいとあさつての方向を向いた

だが悠輔には早紀がどうして怒っているのかさっぱりわからないのが本音であった。

最近の女の子って奴はそんな些細なことで怒るのか。それとも早紀がただ特殊なだけなのか　悠輔にはまったく見当が付かなかった。「ホントにもう……秋葉原まで来たのに無駄足になっちゃったじゃない」

「　そうかな？」

「　え？」

その言葉に早紀は悠輔のほうを振り返った。彼は口元には含み笑いを浮かんでいた。

「僕にとっては若干の収穫があったと思うけど？」

「ふうん……」

そう言つと早紀は不機嫌そうに一つため息をついた。

それから彼女は先ほどの怒りを押しこらえるかのようにぴたっと沈黙し始めた。

やはり、彼女も薄々感じているのだろうか。自分があのゴスロリ少女と対面してから様子がおかしいってことに

でも感じているとしてもそれは所詮女の勘。悠輔ともえの裏の顔なんてさすがの早紀にも想像もできるはずがない。

とはいえ　このまま早紀と不機嫌なまま別れるのもどこか忍びないと悠輔は思っていた。

自分は恋愛上手ではないことはわかっている。それ故に早紀の一挙手一足に冷や冷やしてしまふ自分がいるのだ。

「ねえ……早紀」

悠輔のその言葉に早紀はじろつと彼の方を振り返った。

そんな彼女を安心させるかのように悠輔は輝くような笑顔を浮かべ言った。

「　こんどさあ、僕の大学で学園祭があるみたいなんだ」

「　ええ、知ってるわよ。東都大学の若葉祭って結構有名だし」

　そうなんだ。

早紀のその言葉を聞いて悠輔は少しだけ感心してしまった。

よくは知らないけれど、東京一の有名校だから学園祭も有名なの

だろう。

「それでさあ、僕 君を案内したいんだ。うちの学校の学園祭をさあ」

「え……」

その一言を聞いて早紀の足がぴたっと止まった。

そしてもう一度悠輔のほうを振り向くと、先ほどの不機嫌そうな顔はどこへやら……眩いような笑顔を浮かべて彼に顔を寄せた。

「それ、本当!？」

「……うん」

それを聞いて早紀は急に態度を変えてはしゃぎだし始めた。

「わあー！ 私、悠輔の口からその言葉が出るの待ってたんだ。一度でいいから若葉祭に行ってみたかったんだけど、さすがに一人で東都大っていうのもね……気が引けるって言うかなんていうか……だから悠輔が誘ってくれるのずーっ待ってたんだよ！」

なんなんだよ。一体 早紀のその態度の変化に悠輔は思わず戸惑いを見せてしまった。

女って奴はみんなこうなのか？ 自分の好みのことを言ってくればこころつと態度を変えてしまうのが普通なのか？ そう思うと悠輔は少しだけ女性不審になりそうになった。

「まあ、そういうことだから……今度の日曜日予定空けててね」

「うん！ まかせといて！」

早紀はそういうと悠輔の腕をぎゅっと掴んで彼の身体に身を寄せた。

それを見て悠輔は顔を赤くしながら困ったように顔を掻いた。

まるで猫みたいな気分屋の彼女に振り回されてる そうは思っ
てはいるものの、そこが愛しいと思う自分もいる。

まったく、恋ってやつは そう思いながらも悠輔は恥ずかしな
がら早紀の肩に手を触れた。

26話 若葉祭

5月15日 東都大学最大のイベントの一つである若葉祭当日の日。

その日はかりはいつもはインテリ学生が難しい顔して歩いている構内は学園祭らしい華やいだ雰囲気にも包まれる。

曇天の空のもと、狭いキャンパス内の小路には各サークルが食品露店を繰り出し、軽音サークルやジャズサークルはいたるところで路上ライブ。

中には路上アーティスト気取りの学生も現れだしてパフォーマンスを繰り広げては学校職員に注意されている

殺風景な校舎もこの日はかりは化粧したかのように色とりどりの横断幕が掲げられ非日常の空気がぶんぶん漂っている。

浮ついているなあ

悠輔はこんがり揚げりすぎたフライドポテトをつまみながら物珍しげに自分の変貌した母校を見回した。

この学校で学園祭を迎えるのは2回目だが、1回生の時は目ぼしいサークルにも入っておらず、授業がないのなら休みたいと思って学園祭自体をすっばかしてしまった気がする。

そして今年 おそらく自分の中で何かが変わったのだろう。

こんな騒々しい浮ついた学園祭のど真ん中に自分が立っているのだから

「ねえねえ、悠輔見て見て！」

あまり楽しめない表情の悠輔に対し早紀は学園祭を謳歌しているかのように生き生きとした表情で彼に声をかけた。

「あそこでなんかボティペインティングしてる。人間真っ赤になってるし。つけるー！」

「そっだね」

「あ、あっちではミニ演劇してるー。ロミオとジュリエットかなあ

「？」

早紀はあまり形のよくない綿菓子をつまみながら人でごった返すキャンパス内を物珍しそうに見て歩きまわった。

「そうだ。今年は早紀がいるんだ。」

だから今まで興味のなかった学園祭にも行く気になれたのだった。逆を言うと早紀がいなければ今年の学園祭も興味のないうまま終わっていたかもしれない。

「こんな浮ついた学校　一人で歩くのも御免だ。」

「ねえ！　悠輔！」

「そう言うと早紀はきゅつと踵を返して悠輔の方を強く見つめた」

「さつきから全然話さないけど、ちゃんと学園祭楽しんでる？」

「一応あなたの学校の学園祭なのよ」

「そんなこと言われても……」

「どうやって楽しめばいいんだよ。このアホな学生たちと一緒に羽目を外せと？」

「ああ！もうじれったい！」

早紀はそう言うと、戸惑う悠輔の手を握るとそのまま強引に手を引いた。

「ねえ、何かアトラクションに参加しようよ」

「アトラクションって　！？」

「もう、何でもいいよ。あなたが好きなところでいいからさあ」

「そう言われても……」

「そう言われて悠輔は困った表情を浮かべながら学際パンフレットをパラパラとめくった。」

結構な分厚さを誇るそのパンフレットはいたるところにライブ予告や演劇の演目、落研の寄席案内や特別講義などの手作り宣伝で埋まっていた。

「そうだなあ、今1半時でしょ……これからだったら」

「そう言うと悠輔はぺらっとパンフレットのあるページを開いた。」

PM14:00　メインステージにて爆笑お笑いライブ

「あれ？悠輔ってお笑い好きだったの？」

「いや、そうじゃないけど」

何でもいいから、アトラクションに参加したいって言ったのは早紀の方じゃないか

悠輔はそう言いたげに彼女をじとつと湿った視線で見た。

「うーん、ちよつと待って」

そう言つと早紀は悠輔の持っていたパンフレットを無理やり奪ったs。

「何何？ 出演芸人はトーキョーハンター、ピクシーズ、うどんやのむすこ、大麦小麦 あら、全員爆エン芸人ばかりね」

「バ……クエン??？」

「えー悠輔知らないの？ 今お笑いは新東京テレビの爆笑エンターティナーで生み出されてるのよ」

「……へえ」

悠輔はひきつった笑顔でそう頷くしかできなかった。

「で、どうする？ お笑いライブ見に行くの？」

「どうするって……早紀が決めたらどう？」

「そうね……じゃあ、見に行ってみますか」

そう言つと早紀はパンフレットをパンと閉めると、悠輔の手を再び引き始めた。

「よし、じゃあこの際だからそこ行ってみようよ！」

「う、うん……」

「ほら早く！」

早紀はそう言つて悠輔の手を強くひき二人は雑踏の中に消えて行った。

27話 ステージ裏

講堂前のメインステージはまるでどこかのライブ会場に紛れ込んだかのような熱気に包まれている。

どうやら自分たちの出番の後有名ロック歌手がライブを行うらしい。

その影響でいつもとは違う客層がステージに集まっていた。

「東都大の学園祭 思っていた以上にはじけてるな」

英太はステージ裏から客の顔を逐一観察しながら一言そう言った。

「俺、もっとメガネかけたインテリばかり集まってお寒いのかと思ってたけど、意外と普通じゃん」

そう言いながら英太は目を皿にしながら客の中からある一人の人物を探そうと躍起になっていた。

髪は茶髪の短髪、黒いメガネをかけた不機嫌そうな男子学生
そんな学生この東都大には星の数ほどいるのだから、英太が探しているのはそんなインテリ学生ではなかった。

おそらく一目見たらすぐわかるはず あの男の正体もすべて

「おいおい、エータ。さっきから何を見てるんだあ？」

ステージ裏からじろじろと客席を見る英太を見て、アキバ在住と

書かれた謎のTシャツを着た相方のマサシは訝しげに彼に話しかけた。

「別に……お前には関係ないだろっ！」

「えッ！　かわいい子でもいるの？」

「だから、あっち行けよ！　俺忙しいんだから！」

そう言つと英太はさらに真剣な顔をして客席を眺めた。

その表情を見てただ事ではないなと思つたのかマサシはそれ以上英太に声をかけようとはしなかつた

「あ　！」

その時だつた。

エータの目に一番奥の座席に座つた清楚そうな女子学生に紙コップを運んできた一人の男子学生が急に飛び込んだ。

インテリそうな黒ぶち眼鏡に髪は洗めの茶髪。

本人は周りに溶け込もうと努力しているようだが、英太の目からはわかる。

彼の底知れぬ強さと気高さがその身体からじわじわと滲みだしている

あれが『百地』の名を継いだ伊賀の若き頭目藤林悠輔

それを見て英太はごくつと唾をのんだ。

それは本当に遠巻きにしか見えず、本当の強さとかは計り知れないが、それでも遠くの彼からは重厚な存在感は漂ってくる。

本当の強さを計るためもつと近くから藤林悠輔の顔を拝みたいところだが、自分のステージが近い今
そうもしてられない。

英太は悔しそうに舌打ちするとステージ裏から離れた

「あいつ、彼女連れかよ」

いいよなあ。大学生風情は……

こっちはお笑い芸人と忍者と二足のわらじで女と付き合う暇さえないというのに

幸せそうな藤林悠輔とその彼女の笑い顔を見ていると英太は無性に腹が立ってならなかった。

あの幸せをぶち壊したい。その笑顔を悲しみと怒りで満たしてやりたい

嫉妬にも似たその破壊願望が英太の心を激しく覆う。

そう思うとこれからのステージ何かどうだっていい。

その後の藤林悠輔との対戦の方が英太の心を強く揺さぶっていた。

「おい、エータ！ そろそろネタ合わせしようおー」

「ああ……」

相方のマサシにそう言われ英太はその気持ちを抑えるように彼の
もとへとゆっくりと歩いて向かった。

とりあえず今は目の前にあるステージをこなさないと。

お楽しみは　その後だ。

28話 トーキョーハンター

「東京タワー!!!」

『オタクとギャル男の東京伝説』という謎のキャッチフレーズのついた新鋭の漫才コンビ『トーキョーハンター』の決まりギャグがステージで炸裂する。

と言つても東都大学のお客の反応はイマイチだ。

大笑いしている声はごく一握り、大半は笑いもせずに呆然とステージ上の彼らを見つめている。

「いやあ、今日もつかみはOKですなあ。オタクのマサシ君」

「さすが天下の東都大学！笑いのツボがいつもと違う」

「ほう、そうかい。どこが違うのが行ってみちやいなさい！」

「そりゃ、いつも見たいにガンダムネタじゃ笑いは取れないっしょ！だってここにいる人たち頭が3倍早く働くニュータイプなんでそ？」

「おいおい、いつものようにガンダムネタで攻めてるじゃないか。マサシ君」

「だっはー!!! 今のところ笑うところよ」

何だ、こいつら……

遠巻きに『トーキョーハンター』のネタを見ながら悠輔は思わず顔を引きつらせた。

全くもって笑う箇所が見当たらない。何が面白いのかさっぱりわからない。

おもしろいのは秋葉原のオタクと渋谷のちゃらい兄ちゃんが漫才してるといふ絵面だけ。

それ以外はまったくもって素人以下の芸だ。

「いいか、エータ。オタクって人種はこうやって勉強するんだ」

「ほうほう……」

「今手元には3人のマリオがいます。このままでは到底クッパには勝てそうにありません。そこで無限増殖を使うことにしました。さて何人マリオは増えるでしょう」

「んー……って、マリオって99人以上増えないじゃねえか」

「そうなの。だから俺99以上の算数は無理なんだ」

「おいおいー。それじゃあこの会場の東大生の皆さんにオタクは馬鹿だっておもわれるぞおー！」

「大丈夫、グラディウスだと149857298点言ったことあるから」

「それはそれで凄いけど、数学にはなっていないじゃねえか」

「だってー!!! 今のところ笑うところよ」

悠輔は深いため息をつくるとふと隣にいる早紀をちらつと見た。

信じられない　こんな笑えない芸人なのに早紀はおなかを抱えて笑っていた。

あの芸人のどこが早紀のツボだったのかわからないが、彼女は何かに取りつかれたかのように笑い転げていた。

「あ……あのさ。早紀……」

悠輔は困惑しきつた顔で彼女に話しかけた。

「あの芸人笑える？」

「何言ってるの？ めっちゃ笑えるじゃん」

「……そうかなあ？」

そう言つと悠輔は首をひねった。

ステージ上のオタクとチャラ男はまだ何かネタをやっているが、やっぱりどこかが気に入らない。

「ダメだ。僕、あいつらの芸風受け付けない」

「え？そうなの？ 私は今年のM1は彼らが躍進すると思っけどな」

「それマジで言ってるの？」

「うん、結構面白いじゃん。これからの芸人よ」

「そうかあ……」

そう言うと悠輔はしかめっ面をして彼らの芸を見たが、もはや大人しく座って見ていられるクオリティではなかった

悠輔はイライラをかみしめるような表情を浮かべ席を立ちあがった。

「ごめん、トイレ行ってくる」

「え？でもまだまだ芸人出てくるよ」

「すぐ帰ってくるよ。我慢できないんだ」

悠輔は不躰にそう言うと人込みを割って客席から消えて行った。

「悠輔ー！ もうっ！ いつも勝手なんだから……」

まるで煙のように消えて行った彼氏を呆然と見送りつつ早紀は、またしても繰り出された『トーキョーハンター』のギャグにげらげらと笑い転げた。

29話 同業者

曇天模様の空を見上げながら悠輔は一人深いため息をついた。

この雲行きだともしかしたら夕方には雨になるかもしれない。しかも嵐を伴ったような大雨の可能性が高い。

これは早紀を連れてさっさと家路を急いだ方が身のためか

校舎で用を足した悠輔は一人とほとほとバックステージのあたりを歩いていた。

お笑いライブの真っ最中だからかこのあたりにはあまり人は歩いていない。

華やかな学園祭の中どこか閑散としている空気さえ漂う道だ

そんな時だった。まさかこの場所であの彼女と再会したのは

「ああー!!! 悠輔じゃーんー!」

その甲高い声に呼び止められて悠輔はぎょっとした。

恐る恐る振り返ってみるとそこにいたのは真っ黒ふりふりのワンピースにリボンがたくさんついたヘッドセットに厚底ブーツのメイドの完全装備に身を固めたあのゴスロリ娘仁科ともえが手を振っていた。

え

その姿を見て悠輔は呆気にとられた。

あの秋葉原の家電量販店で出会ってつきり一度もコンタクトがなかった普通じゃないメイドともえがま

さか東都大学の大学祭にやってきていたなんて

その瞬間、悠輔の身体に緊張が走った。

よもや忘れてはいない。

彼女が自分の裏の顔を見きっていたこと、普通の人間とは別の空気を醸し出していたことを

「どうしたの？」

そんな悠輔に対してもえはまるで猫を被ったようにかわいい態度で彼を上目づかいで見た。

「どうして君がここにいるんだい？」

悠輔は警戒した声でそう言った。

「何でって、あたしバイトに来たのよ」

「バイト!?!」

「そう、東都大若葉祭限定でメイド喫茶がオープンになるからそれ

のゲスト出演」

そう言うともえは悠輔に一枚のピンク色のチラシを渡した。

あの東都大にメイドカフェオープン！ 記念ゲストは秋葉原で大人気のメイドカフェ「ぶるーむ」の花形メイドともえちゃん！
さあみんな萌え〜しませんか？

「萌え……ね」

悠輔は呆れた表情でそのチラシを眺めた。

その様子をともえは目を輝かせてじつと見ている

「ねえ悠輔も来てくれるでしょ？ あたし、悠輔来てくれたらまっ先に萌えなサービスしてあげるよ！」

「いや……僕、早紀待たせてるし……」

「ええー、早紀もいるのー」

悠輔のその言葉にともえは明らかに不満の声を出した。

「もう、さ……あんな娘放っておいてさあ、あたしのお店に来てよ
おー！ねえ〜お願い！」

「なんで君にそう言われる筋合いがあるんだ」

「だってえー！ 早紀と悠輔じゃ絶対に釣り合いが取れないし。ー

般ピープルと伊賀藤林流家元なんて比べ物にならないじゃん」

「！」

悠輔はさらりと言いのけたともえの言葉に狼狽した。

ちょっと待て 何で彼女がそれを知っているんだ？

僕が伊賀藤林流の家元だという秘密中の秘密をなぜこの娘は知っているんだ？

「あら？ やーっと気づいてくれた？」

ともえはそう言つと悠輔の前で妖しげに笑った。

「あんたくらいの使い手ならすぐ気付いてくれると思ったけど意外と鈍感ね。悠輔そういうところがかわいい」

「君は」

そう言つと悠輔は動揺を隠すようにメガネをくいつと上にあげ彼女を睨んだ。

「やっと謎が解けた。君は僕と同業者つてわけね」

「なにそれ！ 同業者なんて言うレベルじゃないし！」

その言葉になぜかともえは怒りだした。

「なあに？ 悠輔つてなーんにも覚えてないの？ あたしがあんな

にとって大切な人になっていたなんてなーんにも覚えてないの？」

「一体どこの流派のくノ一だい？ それくらい名乗ってからじゃないと僕もどうしようもない」

悠輔の態度はともえが忍者だと明かす前より明らかに冷淡になっていた。

それは明らかに彼女の存在を自分の敵だと警戒しているようだった。

「もう！ それもわからないの！？ 面倒な男ね！」

そう言うともえはツンと拗ねたような態度を取りながら不機嫌そうに語りだした。

「あたしの流派は戸隠！ 戸隠流忍術の次期女頭目の仁科ともえよ！」

「ふーん」

妖術使いの戸隠か……随分面倒なところが関わってきたな。

悠輔は素っ気なく彼女に答えながら顔に色を出さずにそう思った。

「ちょっとお！ その態度何！？」

そんな悠輔の態度が気に食わないのかともえはむかつとした表情で彼につっかかってきた。

「あんたさああたしのこと何だと思ってるの？ まさか昔のこと忘

れたとは言わせないわよ!」

「昔のこと　　?　記憶にないな」

「　　もう!　最悪!」

そう言うともえは口を尖らしてうつむいた。

「あたしは悠輔のこと一日も忘れたことないのよ。ずっとずっと大好きだったのに　　」

「……はあ?」

「覚えてない?　ずっと昔にあんたのお嫁さんになることを夢見た少女のことを」

そう言ったとたんともえの目がキラリと病的な光を発した。

その瞬間、悠輔は思わず背筋が寒くなった。

彼女の言っていることは何が何だか意味がわからなかったけれども、率直に彼女の態度がどこか怖いと思った。

「君は僕の何なんだよ」

そう言うとき悠輔は警戒したようにともえを睨みつけると、彼女から一歩引いた。

そしていつでも攻撃できるようにベルトに付けた針に手をかけた。

「あたしは……」

だがともえは一步も引かず病的な目をぎらつかせながら彼に迫ってきた

「あたしはあんたの　！」

「あー！！　と、ともえちゃん?!」

二人の間が殺気で包まれたその瞬間、まさに場違いな声がある間を引き裂いた。

二人ははつとそちらの方向を見るとアキバ在住と言う謎のTシャツを着たオタク系の男子が猛烈な勢いでともえに近づいてきた。

「うわああああ！　おいら超カンドー！！　こーんな場所でアキバの癒しの女神ともえちゃんと再開できるなんてえー！」

「あ……アキバの癒しの女神？」

こいつが？

オタクのその言葉を聞いて悠輔は信じられない表情でともえを見た

ともえは先ほどの病的な笑顔から一転、営業スマイルと言った笑顔で彼に笑いかけていた。

「いらっしやいませ、ご主人さま　あれ？　ご主人さまどこかで見たことなかったっけ？」

「お！ ともえちゃんさすがお目が高い！ おいらテレビとかテレビとかテレビとかで見たことあるぞ？」

「テレビね」

その言葉にともえは少し困った表情を浮かべ考え込んだ。

あ そういえば。

悠輔はニコニコと答えを待つオタクの顔と変なＴシャツを見て彼が先ほどメインステージに立っていたまったく笑えなかった芸人『トーキョーハンター』のオタクの方だと感づいた。

だがそれをともえに教えてあげようかと思ったが、その前にともえはにっこりと笑って甘えた声で一言言った。

「ごめん、ともえちよつと思い出せない」

「あら……残念ー！」

その言葉にオタクは少し残念そうな顔をした

「じゃあ、正解教えてあげるよ！ おいらさお笑い芸人なんだお」

「え、芸人さんのの？」

「そそ、これでも今年のM1優勝を目指してるんだお！」

「へえー！すごいー！！」

オタクのその豪語にともえは本心なのか本心出ないのかわからない感嘆の声を上げる。

M1優勝ね

悠輔はその言葉に苦笑した。あの実力じゃ2回戦に残るのだから、
嬉しいだろう。

「でもー。M1ってことは相方さんがいるってことだよな。相方さんってどんな人なんですかあ？」

「あー、相方ねえ。見たことないかな？ピアスじゃらじゃらして
いて、髪の毛変な色に染めてて、いかにも渋谷系って感じの」

「おーい。マサシー」

その呼ぶ声にそこにいる誰もがそちらに注目した。

そこにいたのは両耳にピアスをじゃらじゃらとつけて、髪の毛を
金と黒のメッシュのソフトモヒカンにした、だぶだぶバスケットウ
エアに半パンのいかにも軽そうな若者。

「なんだよ。こんなところにいたのか　ん？」

彼はマサシと呼んだオタクに近づいてきたその瞬間、悠輔とも
えの存在に気がついた。

その次には彼の軽そうな印象はガラッと変わった。

彼はじろつと悠輔をちらりと睨みつけた。冷たく痛いくらい鋭い

瞳で。その眼力は明らかにお笑い芸人には必要のないものだった。

「おー！エータ。来たの？」

「来たっていうかさ、おまえ小便行ってから帰ってこないからさ」

「あ、エータ！ 紹介するよ。この子が僕が大好きな癒しのメイドのともえちゃん」

「えーっと……ともえですう！よろしくね」

「ああ、よろしく……」

ともえとエータとの会話は明らかに不自然だ。

お互いに腹の中を探ろうとしているようなそんな空気がびんびん伝わっている

「ところで、エータさん？ あなたあたしと一度あったことない？」

「さあ……何の話だろうな」

「そっかあ……気のせいかな……」

そう言うともえはすつと悠輔の方を見て一言『心読』で会話した

(彼も……忍者よ)

伊賀と戸隠では『心読』の方法は若干違うので最初は急なメッセージに驚いたが、そう聞き取れたことは聞き取れた。

そうだ、ともえの言つとおり彼も明らかに普通ではない。

そして彼も悠輔とともえの正体にもう気づいている。それ故にずっと殺気に似た警戒を怠らないのだ。

「やだなあー！　ともえちゃん。誰にもそう言つのかい？」

微妙な空気が流れたのを止めたのはこの中で唯一一般人だと思われるオタクのマサシだった

「そんなことないですう。私はみんなお客様だとおもってますう」

そう言つともえは繕うかのように笑って見せた。

「そ、そうだ。マサシ……さん？　お店の方にいきませんかあ？」

「お店？　え？　東都大学にあるの？」

「そうそう。今日、あたし東都大のメイド喫茶に特別ゲストとしてやってきてたんです。そろそろお店の方にかえらないとお。スツッフの方が心配してると思うんでえ」

「ええ。マジで！　行く行く！」

そう言つとマサシはうれしそうなキモイ笑顔を浮かべた。

「というわけできあ……エータ。おいらこれからちつくらメイド喫茶の方でまったりしてくるわ」

「ふーん。そうなんだ」

マサシのその言葉にエータは冷たいほどの無表情で答えた。

「いいんじゃないの？　いつてらー」

「え？　いいの？」

「だって俺もこれから用事あるもん……なあ」

エータはそう言うと悠輔を舐めるような視線で見た。

こいつ　僕に用があるのか。

その態度に悠輔も彼を強く警戒するようにメガネを指で押し上げ鋭い視線で睨み返した。

「そっか……じゃあおいらちつくらいつてくらー」

そう言うとマサシはともえを連れてその場を去っていく

そんなマサシの態度にともえは少し不満げな表情は浮かべたがしぶしぶ彼を連れて行った

（気をつけてね。悠輔）

ともえはその場を去る前悠輔に『心読』でそう警告してきた。

そっだ、まだまだ気を抜いてはいけない。

悠輔の前にはまたしても得体のしれないお笑い芸人の忍者が立ち
はだかつているのだから

30話 伊賀と風魔

「結局、あの女にマサシの相手をまかせちゃったな」

風間英太は一言そう言う人と人込みの中に消えて行ったメイドとオタクを見送った

「大丈夫かな。あの女、とんでもない妖術使いだぞ。マサシが奴に殺されると俺も相方として困る」

「へえ、少なからず仁科ともえのこと知ってるようだね」

「そりゃもう……俺あいつに一度痛い目に遭ってるからな……」

「……なるほど」

負けたんだな。そう言いたげな笑みを悠輔は口に浮かべた。

「つて、おい！ 勝手に負けたとか結論付けんな！ このインテリ忍者め！」

そんな悠輔の態度に英太はむっとした表情で食いかかった。

「いいか、あんたはあの女と戦ったことないからそう言えるけど、一度やってみるよ。ホントあの女恐ろしいぞ。おそらく日本最強のくノ一だぜ」

「ふーん。それは覚えておこう」

そう言つと悠輔は余裕を見せつけるかのように笑つた。

「彼女とも君とも遅かれ早かれ戦うはめになるのはもう覚悟はしてるよ。だって君もそのために僕と会つてるんでしょ？」

「ほー物わかりがいいじゃねえか。家元さんよ」

英太はそう言つとポケットの中にぐじゃぐじゃに入れた封筒らしきものを取り出してそれを悠輔の方に投げた。

果たし状……か

それを見て悠輔は彼を蔑むように笑いながらそれを拾い上げた。

「えらい古いやり方だね。ちょっとびっくりしたよ」

「うるさいな。さつさと読めよ」

そう突つ込まれ英太は少し居心地悪い表情を顔に浮かべた

「俺だつてこんな古臭いやり方嫌だつたんだぞ……でもさあ、うちの連中が伊賀と決闘するのなら果たし状くらい書けつていうからさ」

「ふーん」

悠輔はそう冷淡に頷くと果たし状の中身の手紙を取り出した。半紙の上に子供の習字並みの字ででかどかと書かれた文字

お前をぶつ倒す。風魔軍団副総帥 風間英太

「今度は風魔か……」

これまた厄介な流派が絡んできたものだ……

そう言いたげな表情で悠輔は英太を睨みつけた。

「……で、こんなもの叩きつけた理由は？」

「さあ、特にないな」

その問いに英太はしれつとした表情で一言答えた。

「それはえらい迷惑な話だな……」

「まあ、ひとつだけなら理由はあるよ。お前を狙う大義名分が」

そう言うと英太はニヤツと冷たい笑みを浮かべた。

「俺は最強になりたいんだ」

「最強って……忍者の中で最も強くなりたかってこと？」

「まあ早い話を言えばそうだな。誰よりも強くなりたかって感じかな？」

「ふーん。悪い理由じゃないね……」

そう言うと悠輔は少し馬鹿にしたような瞳で英太を横目で見た。

「でも、そんな最強を目指す風魔忍者の君が何でお笑い芸人になってM1目指してるの？」

「それはだな……」

その突っ込みに英太はむっと表情を曇らせた。

「お笑いの世界でも最強を目指してるんだ！俺は！！」

「お笑いでも最強……ね」

悠輔はそう一言つぶやくとまた蔑んだような笑みを浮かべた。

あの程度の芸で最強と言つか……なんともレベルの低い話だ。

「てめえ……今笑っただろ」

そんな悠輔の態度に英太はどうやら腸が煮えくりかえってる様子だった。

それを見て悠輔はさらに口撃の手を強めた。

「さっき君たちのネタを見たけどさあ……はつきり言ってスベツたよ。素人目の僕から見ても正直M1は無理かと」

「って……お前はつきり言うな。本人の前で……」

「まあ君が忍術でもお笑いでも最強を目指そうっていうのは止めないけどな」

そう言つと悠輔はもらった果たし状を封の中にしまつと、すつと目を閉じた。

次の瞬間、英太の果たし状は一瞬で燃え上がり灰になった。

「この話、乗つてあげる」

悠輔が目を開けたその時には彼の瞳は血の如く真紅に染まっていた。

それを見た瞬間、英太の表情が若干強張つた。

しかし怯みそうになつたのは一瞬だけ。すぐに彼は口元に楽しそうな笑みを浮かべそれに返すように睨み返した。

「カツコつけられるのも今のうちだぞ」

「それはこつちの台詞だ。君こそ僕に挑んで怪我どころで済まないかもよ」

「そんなのやってみなきゃわかんねえだろ」

そう言つたそのとたん英太の身体から力つと禍々しい殺気が放たれた。

それを見て悠輔もにやりと口に笑みを浮かべ、それに負けない強い気で答えを返した。

質感の違つ激しい殺気のぶつかり合い

今すぐにでもこの場所で彼とやり合ってもかまわない　しかし、
それをするには少し邪魔者がいる。

「ところで……さ」

悠輔はその邪魔者の存在に気付きながらも英太を睨みつけたまま
言葉をつづけた。

「先ほどから僕を監視してるのは君の流派の手の者かい？」

「いや……俺は表の仕事でこの学校に来ただぞ。仲間なんぞ連れ
てくるか」

「そうか……」

悠輔がそうつぶやいたその瞬間、彼は目にもとまらぬ速さでホル
ダーから針を抜き去りそれを向い側の木の上に放った。

その瞬間、その木からどさつと落ちてきた黒い人影

それはゆっくり起き上がると悠輔の針で負傷した肩をかばいなが
らその場から逃げだそうと足を一步引いたその時だった。

「逃がすか」

悠輔は一言そう言つと真紅の瞳を光らせその男めがけて両手をか
ざした。

次の瞬間その男は身体を凍りつかせたかのようにその場に動けな
くなった。

ふるふると震える男の身体　それに両手をかざしたまま悠輔は
ゆっくりと近づいた。

「なるほど、金縛り……か」

それを見て英太はごくりと息をのみつつニヤツと笑った。

相手にもよるがこれほどまで簡単に金縛りの術を掛けるとは驚き
だった。

「そんなに怯えなくていいよ」

悠輔は泳ぐような手つきで両手を操りながら男の身体までも操っ
た。

マリオネットの糸を紡ぐかのように彼は手をくいつと動かすと男
は悠輔の方に無理やり体勢を変えられた。

「伊賀藤林流の家元である僕を監視するとはいい度胸だね……いつ
たいどこの流派だい？」

「それは……」

男は身体を硬直させながら悠輔の顔をおびえ切った顔で見た。

しかしそれ以上の答えは彼の口からは出てはこなかった。

「　口止めされてるんだね」

悠輔はニコニコと笑いながら一言そう言った。

その柔和な笑顔に男は一瞬心を許したかのように表情を和らげた
その時、悠輔はかざした手をまた中を泳がせ力を入れた。

その瞬間、男の表情が急に苦痛に歪んだ

「やめ……ろ！！」

男は苦しそうな表情で呻き声をあげた。

悠輔は男に直接手を掛けることなく彼の腕を激しく締め上げた。

その瞬間、何かの力によって男の腕はあらゆる方向に捻りあげられ、
肉と骨は悲鳴に似た音を出した。

「言わないとこのまま腕をへし折るよ……」

悠輔は相変わらずニコニコと口元に笑顔を浮かべていたが瞳は真
紅に染まりあがり鋭く彼を見つめている。

そうか
！

遠巻きにその様子を見ていた英太はその術を見てハツとした。

これほどまで悠輔の術が完成するのは最初に食らわせたあの針が
ミノなんだ。

そしてあの針の傷口から気を送りこんで手を下さず腕をへし折ろう
としているのだから　この伊賀の家元、もしかしたらとんでもな

い使い手かもしれない。

「もう一回聞くよ。君を差し出した首謀者はだれだい」

悠輔は右手に力を込めながらさらに男の腕を手をかけずに締め上げた。

男の悲鳴とともに筋肉が断裂する音があたりに響き渡る。

その瞬間、男は痛みには耐えかね「言う！言うから！」と叫び悠輔にすがりついた。

「俺は甲賀の者だ　！　頭の命令で……お前を　監視してた！」

「頭　！？　上月静夜か！」

その名を言った瞬間、初めて悠輔は顔に怒りの色を浮かべた。

悠輔はどうしても許せなかったのだ。

自分の正体をここまで如実に晒すような畏を仕掛けてくれた甲賀の頭目上月静夜の存在を

「だからお願いだ！助けて　！」

男がそう泣きついたその瞬間、悠輔はキッと男を赤い瞳で睨みつけた

そして、かけた術を強めるかのように手をギュッと硬く握った。

次の瞬間、男の上腕骨が砕け散る音がしたあと彼は悲鳴も上げる暇なく白目をむいて倒れこんだ。

「アイツ、許さん……」

そう苦々しく呟いた悠輔の表情はまるで鬼の形相だった。

悠輔は倒れこみそのまま意識を失った男を軽く脚で蹴ると、不機嫌そうな顔で英太を睨んだ。

「そう言うことだ。風魔のお笑い芸人さんよ」

「ち……結局伊賀は甲賀の方が気になるってか」

それで俺らは無視ってわけか。

そう言いたげな表情で英太は不満げに舌打ちした。

「まあ、君の挑戦はそのうち受けてあげるよ。忙しくないときにね」

「俺の挑戦を暇つぶし程度に考えるなよ。お前本気で殺すからな！」

「はいはい、わかったわかった」

悠輔は英太の文句をそう軽くあしらうとふと手元のGショックで時刻を確認した

PM15:23……余計な客人ばかり合ったせいであれからもう30分も経ってる。

そう言えば早紀を置きっぱなしにしている　　まずい、このまま向かっても確実にいつものように喧嘩になってしまっではないか……

「やれやれ、ちょっと話し込みすぎだな」

そう言つと悠輔は深いため息をついた。

「さっきも言つたけど今日は僕は忙しい。君やあのくノ一の相手なんてやってる暇ないんだ」

「デートの方が大事か。家元さんよ」

「気づいてたのか」

英太のその言葉に悠輔は明らかに不快な表情を浮かべた。

「ステージ裏からこっそりお前を覗いてた。結構美人の彼女だったな」

「……こいつ」

そのことを言われ悠輔は初めて英太の前で狼狽した姿を見せた。

それを見て英太は少し勝ち誇った表情を浮かべ言った。

「でも、その彼女を一人にしているのか？」

「何？」

「誤解するな。俺らは女を狙う卑怯な真似はしないよ。だけど他流派は何をするかわからんぞ。特にあの戸隠の女忍者はお前にご執心らしいからな……」

「！」

悠輔は驚いた様子で英太を見ると、次の瞬間焦ったように踵を返した。

「君、今度会ったら最期だよ」

そう言った瞬間、悠輔は英太の視界からぱっと消え去った。

たかが彼女の安否を確かめるためこんなところで『瞬間移動』など使わなくてもいいもの

英太はそう蔑んだように笑うとすつと指で何かを合図した。

次の瞬間彼の前に一人のくノ一が一瞬で姿を現した。

「そう言うことだ。理沙。お前はあの家元を監視して居場所を突き止める」

「わかったわ。英太」

「下手に尻尾出すんじゃないぞ。こいつ見たいなことになりたくないければ」

そう言うと英太は悠輔に腕をへし折られた甲賀の忍者の身体を軽く蹴りした。

しかし、あいつが気づいたのが甲賀のへボ忍者で本当に助かった。

もし一步間違っていればあの恐ろしい技に自分の仲間が引つ掛かる
ところだったわけだから

「大丈夫よ。こいつ見たいなへマはしない」

そう言つと風魔のくノ一理沙は機械的に笑つて見せた。

「気を抜くな。相手はもしかしたら日本最強の忍者の一人かもしれない」

「あら、あなたの口からその言葉を聞くなんて意外……」

理沙のその一言に英太は気を引き締めるように低い声で返した。

「だから俺は奴を倒さなければならぬ。あいつを乗り越えないかぎり俺は絶対に最強になれない……」

悔しいがそう言つて藤林悠輔を評価するしか今の英太はできなかつた。

だが壁が高ければ高いほど乗り越えがいがある　　そう思えば早く
彼と刃を交わらせたいという気持ち
一段と強くなった。

「そう言つことだ。行け！」

英太はそう言つと目で理沙に合図する。

その瞬間、くノ一理沙は英太の前から一瞬で姿を消した。

さて……と

英太はふと空を見た。

泣き出しそうな空はついに涙をこぼしぽつぽつと大粒の雨が降ってきた。

31話 すれちがい

「もー！ 最悪！」

急に降りだしてきた雨に半分濡れてしまった早紀は怒りのあまり大きな声でそう叫んだ

「雨宿りの古い校舎内。」

周りは急な雨に焦って撤収してきた屋台サークルや演劇サークルの人たちでごった返している。

しかし、なぜ自分はここで一人心細く待っているのだろう

大体きつかけは恋人悠輔がトイレだと言ってお笑いライブを途中抜けしたからだ

それから30分待てど暮らせど悠輔は戻ってこなかった。

そのうち大雨が降ってきてお笑いライブは急きょ中止、仕方なく近くの古校舎に非難するしかなかったのだ。

早紀は何度も何度も悠輔の携帯電話に電話した。しかしなぜかこいういう時に限って悠輔の電話につながらない。

だれに会っているのか知らないけれども今日の今日は許せない。このあとごっさり絞りあげてやるんだから

その時だった。

早紀の携帯電話の着メロがけたたましく鳴り響いた。

その名を確認すると藤林悠輔　身勝手なアイツからの今更ながらの電話だ。

「もしもし」

早紀はその電話にあえて不機嫌さを曝け出して出た。

電話の向こうの悠輔は焦った様子がびんびんに伝わってくる声で話しかけた。

「早紀　？　今どこにいるの？」

「どっかって　どっか古い校舎で雨宿りしてる……」

その言葉に悠輔は「そか……」とえらく低い声でつぶやくともう一言早紀に聞いた。

「もしかして、そこに誰がいる？」

「だれもないわよ　ってさ！　何なのよ一体！」

そう言うつと理沙はついに悠輔に激怒した

「あなた一体私のことなんだと思ってるの？　普通恋人を雨の中30分も放置するなんて絶対にありえない！信じられない！」

その舌鋒に悠輔はただただ「ごめん」としか返してこなかった。

その態度が早紀は余計気に入らなかった。

「ともかくどうするの？これから……こんな大雨になっちゃって学園祭どころじゃないでしょ」

「そうだね……」

そう言つと悠輔は急に真面目な声で返した。

「ともかくこれからそつちに向かうそれから」

「それから？」

「見知らぬ奴が話しかけても絶対に無視して。心を絶対に許しちゃだめだ」

「何言ってるの？」

悠輔のその言葉に早紀はちんぷんかんぷんだった。

「ともかく知らない奴について行ったらダメだ！厄介なことに巻き込まれる！」

「意味分かんないし！」

そう言つと早紀は怒り心頭の声で悠輔を怒鳴った。

「一体何なのよ！ 散々待たせといて、言いたいことはそれだけ？
もつと謝らなきゃならないことがあるでしょうが！」

「それは」

「もういい！ 今日これで終わり！ じゃあね！」

そう言い放つと早紀は乱暴に携帯の電源ボタンを押した。

悠輔は何かまだ言いたげだったけどそんなことどうだっていい。

あの人はいつも身勝手だし反省がない。付き合うこっちばかりい
つも大変な目にあう。

それをわかっていなくていつも同じ間違いばかりする悠輔が早紀
は疎ましくてならなかった。

帰ろう

そう思ったはいいものの外は大雨だ。傘なんて持ってきてるわけな
いし、こんな中歩いて帰ったら確実にずぶ濡れになる。

早紀は深いため息をついて恨めしく暗い空を見上げたその時だった

「あれえ？ 早紀 じゃない？」

その甲高い声に早紀ははっと振り向いた。

そこにはふりふりの黒いワンピースにリボンがついたヘッドセツ

トを付けたメイドがニコニコとした笑顔で立っていた。

「あ、ともえ……ちゃん？」

その姿に早紀は呆然とした。

自分の大学の同級生の娘がまさか東都大学の校舎の中にいるとは思いつかなかったのだ。

「どうしたの？ここで……」

「あたし？ あたしはバイトしてるの。この校舎の4階のメイド喫茶で」

そういつともえは早紀にむかい気持ち悪いくらいの笑顔で笑った。

「へえ……東都大でメイドカフェねえ……」

需要、あるのかしら？ 早紀はから笑いしながらそう思った。

「ねえ、早紀……うちの店こない？」

「え！？ メイド喫茶に？」

「そそ、どうせこの雨でどこもいけなくて困ってるんですよ。だったら、雨宿りついでに寄って行ってよー」

ともえのその誘いに早紀はしばらく考え込んだ。

確かに彼女の言うとおりだ。この大雨で足止めを食らうてど
うしようもなかったのは間違いない。

「悠輔……待ってるんでしょ？」

ともえのその言葉に早紀ははつと彼女を見た

彼女は口元にニヤツと可愛いながら不気味な笑顔を浮かべていた。

「あんな奴、知らない！」

早紀はそう言つとツンと彼女からそっぽを向いた。

それを見てともえはさらにモーションを掛けるかのように彼女の手
を引いた。

「それならそれでいいじゃん！ どうせ早紀はこれから暇なんでし
よ？ だったら私の店に来てえー」

「うーん……」

まあ、それもいいかな……

早紀はともえの誘いを悪いものだとは思わなかった。そして、し
ばらくした後彼女に屈託のない笑顔で答えた。

「うん。いいよ」

「ホントー！」

その一言にともえは早紀の手をギュッと強く引いた。

「じゃあさ、早くお店行こうよ！　ともえちゃん特製ホットティだしてあげるよ！」

「ホント？　楽しみだなあ」

そう言うと早紀は何の疑いもなくともえについて行った。

その決断が後々悠輔、早紀そしてともえを巻き込んだ愛憎劇のきっかけになるなど　今の早紀が気づくはずがなかった。

32話 ツイてるともえ

東都大学第3研究棟の4階、の第5小教室

そこが東都大学若葉祭のため急きよオープンしたメイド喫茶「わかば」だった

しかし、急きよ立ち上げた仮店舗にしてはこのメイド喫茶「わかば」の店内はかなり凝ったものだった。

ゴシック調の壁紙に、どこから持ってきたのかアンティーク調の家具が置かれ、装飾や照明もかなりの出来だ。

まさかここが大学の構内とはだれも思うまい。否、そのまま秋葉原で営業したって遜色のないクオリティだ。

しかし、驚くのは内装のクオリティだけでなくそこで働くメイドのクオリティもなかなかのものだった。

中にはともえみたいな他大学からのヘルプの人間もいるが、大半はあの日本最高峰の東都大生の女学生だ。

そんな彼女らがいつものインテリ姿を隠しメイド服に身を包んで今日に限ってはじめてメイドを演じている

それだけでもアキバのオタクにはたまらないのだろうか。この店目当てで東都大の学園祭に来たメイドオタクも数多く見てきた。

でも 本当に一番かわいいのはあたし。

ともえはカウンターでアセロラホットティをカップに注ぎながら、そう思った。

いくら東都大生メイドが珍しいからと言って、一番の目玉はアキバで大人気のメイドであるともえのゲスト出演だ。

現にともえのもとには指名がガンガン入ってきた。根っからのともえファンもいればクソ真面目な東都大生もいた。

朝からそんな客たちの相手にへきへきしてこんなところ帰りたいと思っていたけど、昼から流れは変わった。

それは悠輔とばったり会ったのがきっかけだろうか。彼とは邪魔が入って少ししかしゃべれなかったけど、そのおかげでこの前ちよっとしたイザゴザで軽く泣かしてあげた風魔のお兄さんとも出会えた。そして

ともえはふとカウンターの先にいる早紀をじろつと睨んだ。

そして彼女に気づかれぬように懐から怪しい小瓶を出し、そこに入っていた粉末をアセロラホットティの中に混入した。

彼女に会えたのは幸運だ。しかも悠輔の邪魔なく店に誘導できたのだからこの上ない幸運だ。

これでこちらの計画が滞りなく進む。ってわけだ。今日は何かツイてる気がする。

「早紀いゝ。ホットティできたよー」

ともえは何事もなかったかのような笑顔を浮かべ粉末入りアセロラホットティをトレイに乗せて早紀の元に運んできた。

彼女は携帯電話のメール画面をみながら不機嫌そうな表情で言った。

「悠輔、サイテー」

「……………どうしたの？」

「いや、ともえちゃんのお店にいるってメールしたら。さっさとそこから出るだつて……………何様!？」

早紀はそう言つと携帯電話をたたむと、何の疑いもなく出されたアセロラホットティに口を付けた。

勝った

それを見てともえは不敵な笑顔を浮かべた。

「なんだろう……………あたし、悠輔に嫌われてるのかなあ」

ともえはあえて演技するかのようには早紀の前でそう不安な様子を見せた

「そんなことはないと思うよ。だってあの秋葉原での1回しか会ってないじゃん」

「うん……………」

それは嘘だった。本人はどうか知らないけどあたしと悠輔は周知の仲だ。

それはこんな小娘が中に割って入るような隙間もない深い仲だったはずだったのに

「でも、なんかあたしあの時悠輔に避けられていた感じがする。何でだろう？」

「それは知らないけど……」

「ねえー。今度早紀とあたしと悠輔3人で会わないかな？ あたし悠輔の誤解といてあげたいし……」

「……」

その問いに早紀は一瞬とまどったような表情を浮かべたが、すぐに表情を和らげ笑って見せた

「いいよ。全然大丈夫」

「ホント！」

「大体悠輔もおかしいわよ。こんなカワイイともえちゃんを警戒しなくてもいいのに 何考えてるのかしら？」

そう言うと早紀は怒りを飲み込むかのようにアセロラホットティをごくりと喉に流し込んだ。

そう、どんどん飲んじゃって。

ともえはそう思いながらニコニコとした表情を変えずに彼女にメニューを出した。

「そうそう、サイドメニューもあるんだけど、何がいい？ お勧めはティラミスかなあ〜オムライスは女の子には重いと思うし……」

「……あ、じゃあそれで」

早紀は一瞬ぼんやりとしていたが、ともえのその一言に咄嗟に反応した。

それを聞いてともえはニヤツと笑みを浮かべ言った。

「じゃあ、ティラミスね。待ってて」

ともえはそう言つとまたカウンターの奥へと引つ込んでいった。

早紀はそれから出されたアセロラホットティに口を付け続けた。

相当暖かい飲み物に飢えていたのだろう、彼女は一気にぐくぐくとそれを飲み干していた。

やっぱり、今日のあたしツイてる！

遠巻きでその様子を見てともえはついつい嬉しくなった。

これで悠輔は絶対に邪魔できない場所に早紀を連れて行けること

ができる。無抵抗のまま彼女をさらって

やがてカウンター越しの早紀は眠そうに目をこすりだし、そして崩れ落ちるようにカウンターで深い眠りについていく。

「あれえ？」

ともえはあえてとぼけるように早紀に近づいた。

「早紀ちゃん寝ちゃったの？ 困った娘ね……」

どうやら眠り薬効いたみたいね。

それを確認するように巴は彼女の手を取り脈を確認する、そして営業スマイルのまま隣のカウンターに座る体格のいいスーツ姿の客を見た。

「あおう……お願いがあるんですけど……」

「なんだい？」

そう言うと男は身体をゆすりと蛇のようにぎょろりと鋭い目でもえを見た

だがともえはそんな男の目を見てもいつものあの態度を貫いた

「お客さんが寝ちゃったんですぅ〜ここで寝られると困るんで別室に運んでいただけませんかぁ？」

「ああ、お安い御用で （お任せ下さい。お嬢様）」

男はともえに『心読』で一言そう伝えると、カウンター席から立ち上がりニヤツと笑みを浮かべた。

それを見てともえはにっこりと笑って手を叩いた

「本当ですかあゝ。助かりますう (頼むわよ。蓮堂)」

ともえは『心読』と共に男にそう眼で合図する。

その病んだように暗い瞳は一瞬、優しい癒しのメイドの顔から誰もが恐れる戸隠の女頭目の顔に変化した。

アキバの人気メイドともえに頼まれた男蓮堂はともえに一礼するとぐったりと寝込む早紀を抱くとそのまま店を出て行く。

やったあ。この戦、勝ったわ……

ともえはその後ろ姿を見送りながら軽いガッツポーズをした。

見ていらっしやい。藤林悠輔 あなたに最大の苦痛を与えてやるわ。

許婚相手の私がいるのに彼女なんか作って浮気をした罰よ。覚えておきなさい

「さあて、そつうまくいくかな」

背後でその低い声を聞いてともえははっと振り返った。

そこには全くの気配を殺しオレンジジュースを飲むツートンメッシュのピアス男。お笑い芸人『トーキョーハンター』の渋谷系のツッコミ担当の風間英太がいたのだ。

「あなた　いつの間に？」

彼の顔を見てともえは呆然となった。

何故、今まで気付かなかったのだろう　いくらともえが早紀に集中していたからとは言え英太ほどの忍者の気配を全く拾い損ねたなどあり得ない話だ。

それともこの男、完璧に気配を消す術でも使ってメイド喫茶に潜入してきたとも言っのだろうか？

「ずっと見てたぜ。俺」

英太はそういうとオレンジジュースの中の氷をストローで突つきながらともえを睨んだ。

「あの娘こどうするつもりだ？」

「どっするって……」

「どうせ、おまえの考えてることだ。あの娘こを出汁にして藤林悠輔でもおびき出すつもりか？」

「うっさいわね！　あなたに言われる筋合いないわよ！」

そう言っともえは彼の横のカウンター席に座るとつんとそっぽ

を向いた。

「それよりもあんたは何の用？」

「俺？ 俺はただ相方の様子を見に来ただけ」

そう言うと英太はちらつとうしろのテーブル席を見た。

そこには黒髪のメガネメイドとじゃんけんをしているオタクの相方マサシの姿があった。

「まあ無事そうだったからよかったよ。そんだけ」

英太はそう言うとまたオレンジジュースをストローで吸った。

それを見てともえは不満そうな表情を浮かべ英太を睨みつけた。

「あんたさ、まさか私の計画をぶち壊そうって思っていない？」

その一言に英太は表情一つ変えずに答えた

「別に」

「じゃあ、何しに来たのよ！ 黙って私の計画を見過ごす気なの！？」

「そうだけど？」

「……………意味わかんないし！」

ともえはそういうとつんと頬を膨らませた。

そんなともえを見て英太は深いため息をついてコップの中の氷をいじくりまわした

「だつてお前があいつの彼女を連れ去ろうがブツ殺そうが俺にはまーったく関係ねえし。勝手にすればっていうのが本音だな」

その一言にともえは怪訝そうな目で英太を見た。

「と言うことは、本気で黙って見過ごすってこと？」

「そう言うことだ」

そう言うつと英太はニヤツと不敵な笑みを浮かべた。

「まあ、精々藤林悠輔の女を欲望のまま痛めつけちゃえば？ まああいつは烈火の如く怒り狂つてお前を殺しに来るだろうけどな」

「そんなことあんたに言われなくたって……」

「あ、でも、これだけは忠告しとく」

英太はそう言った途端、今まではたりと消していた殺気を爆発させるように放った。

そして、ギラギラと光る瞳でともえをキツと睨みつけた。

「藤林悠輔は俺の獲物だ。お前が先に手を出したら容赦しないからな」

その一言にともえはむっとした表情を浮かべたが、すぐに口元にひやりと冷たい笑顔を浮かべた。

「あら、悠輔はあんただけのものじゃないのよ。あの人はあたしの

」

「それから」

そう言つと英太はカウンター席から立ち上がった。

「仁科ともえ この前の借りはいつか返させてもらうぞ」

「そうそう、あんたあの時あたしにぼろ負けしたんだよねー。あれでも手加減してあげたのに」

「うっさい。俺だってあの時は手加減してやったんだ。バーカ」

その一言に英太は心外したようにむっと口をへの字に曲げた。

「ともかく、俺の言いたいことはそれだけ。さてと……俺も用事があるからそろそろお暇しようかな」

「用事？ あんたの用はもう終わったんじゃないの？」

「ふん……」

その一言に英太はニヤツと笑った。

「俺も決着がついてないんだよ。お前の追ってる男との最強を賭け

た決着がな……」

33話 ツイてない悠輔

雨で濡れた東都大学のキャンパス

あれほど人込みでこった返していたその場所は大雨の影響で閑散と
していて人っ子ひとりいない。

その滝のような雨の中、悠輔はただたある場所へ急ぐためずぶ濡
れになりながら走っていた。

問題のくノ一ともえの元にいる早紀の場所に向かうだけなら簡単
だった。それだけなら何の滞りなくことは収まるはずだった。

だけど 今日の僕はどうもツイてないようだ。

絶え間なく他流派の忍者たちに追跡されまくっている のだか
ら。

その瞬間、悠輔はすつと身体をかがめそのまま前転した。

それと同時に彼の頭上を数個の手裏剣が空を切り裂いていった

「ええいつ！鬱陶しい！」

瞬間、悠輔は踝に隠してあった針を取り出すとそれを瞬くスピー
ドで投げつけた。

雨の中崩れ落ちる人影 だが今回の敵は一人だけではない。

気配は5人か……悠輔はすつと立ち上がるとメガネをすつと取り外した。

「僕は忙しいんだ。相手なら一瞬で終わらせてやる！」

そう言ったその瞬間、悠輔の瞳はまるで燃えるように赤く光った。

そして次の瞬間、濡れたアスファルトを蹴り獣のように襲いかかる5人の影

悠輔はすつとその場に立ち尽くす赤い瞳で襲ってくる影をぎりぎりまで見極める。

彼の瞳には見えていた。奴らがどんな動きをして襲いかかるか、どんな軌道で攻撃をしてくるか

そして、襲ってくる影の刃が悠輔の身体を撫で切ろうとしたその時彼は瞬時にその場から姿を消した。

はつと顔を上げる追跡者の影。悠輔は彼の頭を踏み台にしてさらなる高みへと舞い上がっていた。

悠輔の両手には合計十本の針。それを大粒の雨に紛れ込ませるかのようにならぬ頭上でうち放った。

雨とともに注ぎ込む針の雨

それに男たちは急にひるんだ格好を取る。あるものは急所を刺され、あるものは急所を逸れ　だが、今回悠輔はそれだけで終わらせる気は毛頭無かった

悠輔がきれいに濡れたアスファルトに着地したのと同時に彼は両手を横にかざした。

次の瞬間、一度放たれ死んだはずの針たちが立ち上がり男たちに再び襲いかかった。

その動きはまったくもって予想不可能。

下から上へと突き上げる針もあれば左から右へ駆け廻る針もある。

その動きに男たちは翻弄され、そして悠輔の作った罠にまんまとはまっついていく。

悠輔は顔の表情一つ変えずに男たちに背を向けたまま手を激しく操った。

すると男の一人が何かによって血を吐き倒れこみ、そしてその隣の男は一瞬で手を切断され叫び声をあげた。

男の周りには行き交う針以外にも光る何か。

それは針のすぐ後を追うように男たちを一瞬で取り囲みそして襲いかかってきた。

それは彼の宣言通り一瞬で終わった。

悠輔が手をギュッと握り前にかざしたその瞬間、男たちは一斉に血を吐き出し何も言葉を出さないまま崩れ落ちたのだった。

「手間掛けやがって……」

悠輔はそう言つとすつと立ち上がると男たちを襲つていた針を手の動き一つで手元に回収した。

そして後ろを振り向くとため息交じりに一言言った。

「そこにいるのはばれてるよ。いい加減出てきたらどう？」

悠輔は真紅の瞳を光らせ今は姿を見せぬその人物に強く警告した
それと同時にいつでも相手になってやると言わんばかりに彼は身体から禍々しい殺気を発してみせる。

「ふん……気づいていたか」

それを見て観念したのか、その男は悠輔の前にすつと舞い降りた。

大きい 相手はタンクトップを着た筋骨隆々のとてつもない大男だった。

しかし、今まで相手していた雑魚とはわけが違う。桁違いの強さが醸し出す空気だけで伝わってくるようだった。

「しかし、驚いたよ。そのワイヤー付きの針を遠くから操って複数の相手を葬り去るとは うわさ通りの恐ろしい使い手だな。伊賀の家元は……」

男のその一言に悠輔はハッと息をのんだ。

つまり、この男は自分の術のからくりを言い当てるくらいの眼力がある。それなりの実力のある他流派の幹部だということだった。

「誰だ……」

悠輔はその男から一步引くと彼を真紅の瞳で睨みつけ戦つ構えをとった。

それを見て目の細いその大男は鼻で悠輔を笑った。

「馬鹿はよせ。ボクはお前と戦う気はない」

「じゃあ、この男たちは？ 君の配下じゃないのかい？」

「知らないね……」

そう言つと大男は冷めた目で悠輔が倒した男たちを見た。

それを見て悠輔は初めて殺気を弱め、彼を湿った眼で見つめて言った。

「とりあえず名を名乗ってもらえないかな。それからじゃないと判断できない」

「ほう……それもそうだな」

そう言つと男は細い眼を皿に細め柔和にほほ笑んだ。

「ボクの名は応野邦彦。奥州応変流黒頭巾二十代頭目だ」

「応変流　か」

噂には聞いていた。東北にとんでもない使い手がいると言つことは

おそらくそれは目の前の応野邦彦その人物なのだろう。それを悠輔はすぐに感じ取っていた。

「　で、僕に何の用だい？」

「藤林悠輔　お前に警告しにきた」

「警告？」

その言葉を聞いて悠輔は初めて顔に色を見せた。

「お前はその強さから他流派から狙われ過ぎている。それは重々わかってるな」

「別に……それは悪いことじゃないと思ってるけど」

「いや、お前ら他流派の不毛な争いで迷惑を被る人だつてたくさんいる。お前だつて表の世界で友人や恋人だっているだろう　そんな彼らをお前らの利己的な争いで傷ついたらと思うといくら冷酷な忍者であるお前でも心が痛むであろう」

「　」

何を言い出すんだ　こいつ？

その説教めいた言葉を聞いて悠輔は思わず強く困惑した。

「何が言いたいだ君は……」

悠輔はそう言つとため息をつき邦彦をキツと睨みつけた。

「初対面でいきなり説教面か……そんな偉いものなのか？ 応変流つてやつは……」

「お前、本当にそんな冷酷なことが言つてられるのか？」

「なにが？」

「現に今お前の恋人はある流派にさらわれそうになっている……それでもお前は修羅の道をやめないのか？」

「……なんだつて？」

邦彦のその一言を聞いて悠輔は強く動揺した様子を見せた。

早紀が危ない　　ずっと思っていた危惧がその瞬間現実味を帯びてきた。

「やっぱり君も僕の敵なのか？」

悠輔がそう言ったその瞬間彼の身体から再び殺気が噴き出した。

そして次の瞬間には彼の手には再び数本の針が光っていた。

「違う！　ボクは警告しに来ただけだ！」

「うるさい！」

そう言った瞬間、悠輔は左右に生えた十数本の針を邦彦めがけて解き放った。

それを見た邦彦はそれを太い両手で身体をガードすると、真正面から悠輔の針を受け止めた。

針は確かに邦彦の身体には当たった。しかし、それは深くは身体に刺さらず乾いた音を出して濡れたアスファルトに落ちて行った。

「なるほど、身体鋼化か……面白い術を持っているな」

そう言つと悠輔は真紅の瞳で邦彦を見て笑った。

邦彦は少し不機嫌そうな表情を浮かべたため息をついた。

「一言言っておくが。ボクとやつても結果は無駄だぞ……」

「そんなのやってみなきゃ分かんないだろ」

そうは言つたものの、確かに邦彦の言つとおり今の手数では若干こちらが不利かもしれない。

しかも、それを相手は見切っている。

安全を取って引くべきか、それともプライドを取って戦うべきか
雨の中濡れた針を手の中で遊ばせながら悠輔は邦彦と対峙した。

「無駄な戦いはやめよう」

最初に引いたのは意外なことに邦彦の方だった

「何度も言うけど今日はお前と戦いに来たんじゃない」

「じゃあ何しに来たの？一体？」

「僕は」

そう言つと邦彦はくるつと踵を返し悠輔から背を向けた。

「ある女との決着をつけに来た。それだけだ」

「ある女？」

「たまたまその女を追っていたらお前の彼女がさらわれるのを見た
それだけだ」

それを聞いて悠輔は目を見開いて驚いた。

仁科ともえ　それが邦彦が狙う女の名前で悠輔の恋人早紀を窮
地に追いやろつとしていた女の名前。

「ボクは今からその女と決着をつけてくる」

「それで？　僕に協力しろとでもいいたいの？」

「馬鹿を言うな。お前の力などなくてもあの女など倒せるよ」

そう言うと邦彦はふつと微笑した

「だけど、お前の恋人は無事で助けられる自信はない。そっちの方はお前が勝手に助けてやってほしい」

「そんなこと……君に言われなくたって」

そう言うと悠輔は不機嫌そうに手を組んだ。

「つまり君は仁科ともえを倒す、僕は早紀を助ける　結局はそうやって協力してほしいっていいんだろ」

「お前だって嫌だろう。自分たちの流派の戦いに何の関係のない彼女が巻き込まれるのは……」

邦彦のその一言に悠輔は思わず沈黙した。

確かにその通りだった。

自分が最も恐れていたことそれが早紀が悠輔の恋人ゆえにこの戦いの渦に巻き込まれるというシナリオだった。

それを回避するため今までどれだけの苦勞をしてきたのだろう。

早紀の前で自分を偽ったり、小さな嘘をついたり　　だけどそんな小さな努力も今ではあまり意味がなかった

「わかった。今回は特別に君に協力してあげる」

悠輔は小さく笑いながらそう言うと邦彦をきつと睨み返した

「だけど、覚えておくんだな。僕は君に負けたわけじゃない！
つかこの借り 返してみせる！」

34話 邪魔

「おーっほっほっほ！ これであたしの勝ちよ！」

ともえはアテンザの後部座席で勝利の高笑いをあげた。

すぐ隣にはぐっすりと寝込む愛しの藤林悠輔の恋人である憎き進藤早紀が寝込んでいる。

こんなことをしたらきつと悠輔は怒るであろう。自分の命を狙いに来るかもしれない。

でもともえはそれでも良かった。彼と命のやり合いをしても彼の命を奪おうともそれはそれでいい結果だと思っていた。

ともえは悠輔のすべてが欲しかった。愛も命もすべて自分のものにしたかった。

そのためであれば何の犠牲も払うつもりだった。たとえ表の世界に住む彼の恋人を犠牲にしようとも

「早紀ちゃん……あなたは好きにはなっちゃいけない人を好きになっちゃったのよ」

ともえは暗く病んだような瞳で早紀を見つめると軽く彼女を小突いた

「残念だったわね。その人を好きになつたがためにあなたは命を失う 身分相応の恋をしなかった代償よ」

早紀は答えることはなかった。

ただ後部座席にもたれ気持ちよく寝息を立てるだけだった

「蓮堂！ まだアジトにつかないの!？」

そう言つともえは運転席の戸隠の忍者蓮堂に強い口調で言い放つた。

「そうは言いますが、お嬢様。渋滞にはまりまして」

「あぁッ！ もう！ 情けないわね!」

そう言つともえは不機嫌そうにつんと顔をそむけた。

「この間に他流派が襲ってきたらどうしてくれるのよ！ せっかくの人質が奪還されたら元も子もないわ!」

「ですが、お嬢様　!」

「もういい！　どっか抜け道探しなさいよ!」

ともえの疝癢に蓮堂は困った表情を浮かべながらナビで抜け道を検索しはじめた。

きゅっとハンドルを右に切るとアテンザは住宅街に抜ける小さな路地に入った。

これで渋滞地獄から抜け出せるわね。

そう思い、後部座席にごろりともたれかかったともえだが、アテナは路地に入って間もなくなぜか動きを停止させた。

面食らったともえは運転席の蓮堂に食ってかかった。

「今度は何よ！」

蓮堂はその問いに緊張した面持ちで答えた

「お嬢様……検問です」

「検問!？」

何でこんな時間に !

ともえは焦った表情で前を見た。

大雨が降る中、そこにはたった一人の少しだらしない警察官がともえたちの車を止めていた。

「すいませーん。ちょっと近所で事件があったもんで」

ぼさぼさ頭のだらしない警察官はやる気がなげに蓮堂の乗る運転席に近づいてきた。

「すこし事情を聴くために外に出てくれませんか？」

その一言に運転席の蓮堂は警戒の眼差しで警察官を睨みつけた。

だがその迫力ある目に対しても警察官はニコニコとした表情を崩

すことはなかった。

(どーするのよ！ 蓮堂！)

後部座席のともえは湿ったような目つきで蓮堂を睨みつけると警官に悟られないよう『心読』で話しかけた。

(ここで警察に捕まったら元も子もないわよ！)

(わかってますって。お嬢様)

(じゃあどうすんの！？ 強行突破しちゃう？)

(いえ……話をつけてきます)

その一言にともえははっとした。

(ちょっと、あんた正気！？)

(大丈夫ですって。相手はただの警官ひとりですぜ。こっちが本気になれば簡単に始末できるでしょうが)

蓮堂のその一言にともえはどう反論していいのか迷った。

確かに彼の言うとおり、相手はただの警察官一匹制圧するのはそう難しくない相手かもしれない。

だけどもえはこの警察官の真意を測りかねていた。

なんだろう。この嫌な胸騒ぎは……

このやる気のない警察官の顔を見た瞬間覚えた理由なき違和感にとめえは激しく動揺していた。

「なにかあつたんですか……？」

蓮堂は声を口に出してそう言うと雨の降る車の外に出た。

その一言に警察官はニヤツと不気味な笑顔を浮かべた。

「いえ、この辺の大学で女の子が一人行方不明になりました……そのの搜索ですよ」

「それはら我々は関係ありませんよ。この二人は同じ大学の友達でしてね……一人が具合が悪いから家に送ってあげてるところです」

「ほう……本当にそうなのかな？」

その瞬間、警察官の瞳が青白い光を発した。

それを見た蓮堂は初めて強い緊張感で顔をしかめた。

「お前……！」

「『心読』がだれも聞こえないと思ったのが間違いだったな。同業者には筒抜けなんだよ。戸隠さんよ！」

「！」

その言葉を聞いた瞬間、蓮堂は真っ先に動いた。

上着のそでに隠してあった小型ナイフを手に取るとそれを謎の警察官の顔めがけて突き放った。

自分のスピードなら遜色なく相手を殺れる筈だった。その刃が空を切る感覚を感じるまでは。

蓮堂はハツとした。一撃で葬ったはずの警察官は彼の目の前からぱたりとすがたを消していたのだ。

そして次の瞬間、彼は背後で今まで体感したことのないおぞましい殺気がわき上がるのを感じた。

「お前の力はその程度か」

警察官は表情一つ変えてはいなかった。

それを見て蓮堂はカッと頭に血が上った。もう一方の手にも仕込み小型ナイフを手の持つと猛烈な勢いで余裕警察官めがけて斬りかかった。

しかし、その刃はまたしても空を切るしかできなかつた。

警察官はまるで流れるかのように蓮堂の刃を紙一重でかわして見せたのだ。

「貴様　ッ！」

「雑魚は引っ込んでな」

そう言ったその瞬間、警察官はすつと身体をかがめ獣の如くの勢いで蓮堂に襲いかかった。

そして、彼が足元の水たまりにを蹴りあげた次の瞬間だった。

それは刃　いや、刃にも似た鋭さをもった水しぶきだ。

それが一瞬にして蓮堂の身体を切り裂き貫いていったのだった。

荒い息のままつつと口から流れる赤い血。彼はそのまま体中から血飛沫をあげそして崩れ落ちて行った。

「さて……と」

警察官は冷たい表情一つ変えぬまま車の中のある人物を見た。

その眼はギラギラと青白く光り、口元はひやりと恐ろしい笑みを浮かべていた。

「そろそろ、出てきて話をしないか？　戸隠の姫様よお」

その言葉を聞いてともえは車の外にでた。

その表情は意外にも凜としており、瞳は強く冴えた光を湛えていた。

「水遁とはずいぶんな技使ってくれたわね」

ともえは一言そう言つと警察官をギラリと睨みつけた。

「あんただただ者じゃないわね。何者よ」

「ふ……意外と顔は割れてないようだな」

そう言つと警察官はぼさぼさの髪を掻きあげ青白い瞳でともえを見た。

「俺の名は上月静夜　お前が追っかけている藤林悠輔の永遠の好^{ライバル}敵手である甲賀の頭目さ……」

「悠輔のライバル？　って、ソレ自分で言つての！？　寒ッ！」

ともえは上月静夜と名乗つた警察官向つて馬鹿にしたような笑顔を浮かべた。

それと見て静夜はむっとした表情を初めて浮かべ黙つたまま彼女を睨んだ。

「……まあいいや。で？その甲賀の頭目さんは何しに来たのかしら？」

「要件を言えば早い　女を渡せ」

「女つて悠輔の女のこと？」

「そう言つことだ……」

その一言にともえは狂つたような笑い声をあげた。

「アハハハハ！　なにそれ！　あんたも女使つて悠輔おびき出そうつて言つての？」

「お前らみたいな姑息な流派と一緒にされたくないな」

そう言つと静夜は深いため息をつき青白く光る目でもえを睨みつけた

「俺はただ藤林悠輔と戦つて奴の奥儀を破りたいだけ　お前みたいな疚しい理由と一緒にするな」

「何よお……あたしの理由が疚しいですつてえ！」

その一言を聞いてともえの表情がガラツと変わった。

歯を食いしばり、眼には怒りが灯り、そしてツインテールの髪を逆立て彼女は怒りに燃えていた。

しかし、静夜はそんな彼女をさらにたたみかけるかのように言い放った。

「ああ、疚しすぎて醜いね。自分の好いた男に何の力のない女がいて怒り心頭なのはわかるが、そこから何の関係のない彼女を巻き込んでまであの男を振り向かせたいのかと思うとゾツとする。お前は忍者の端くれにも置けない女だ！」

その一言でともえの中で何かがキレた。

彼女は唇を激しく噛むと暗く鋭い瞳をギラリと光らせた。

それはあまりにも一瞬の出来事だった。

ともえがすつと手を横にかざしたその瞬間、煌めく光が静夜の首を横一闪した。

彼は余裕綽々の笑顔を浮かべたまま、首から頭がこぼれおちたのだった。

雨の中濡れたアスファルトに崩れ落ちる静夜の軀と生首　それを
見てともえはニヤツと冷たい笑顔を浮かべた。

「あーら。大口叩いた割には手ごたえがないわね」

ともえの手には身体と同じくらいの長さを誇る大きな鎖鎌が握られ、ひゅんひゅんと風を切らせながら彼女はそれを軽々と振り回していた。

「あーん！もう、しずちゃんつまないじゃーん！　もっと楽しませてくれると思ったのに　！」

そう言ったその瞬間、ともえはその真実に面食らった。

目の前に転がっていた静夜の生首をふと見るとそれはただの身代わり人形の頭でしかなかったのだ。

何故　！？　あの短時間で身代わりの術を使っただけで言っ
た？

ともえは鎖鎌を振り回しながらどこかへ逃げた静夜の姿を目で追った。

しかし、静夜はすぐにもえの前に姿を現した。両手に眠りこける

早紀を抱き、住宅の上の屋根の上に立ち尽くして。

「なかなかいい攻撃だったよ。戸隠の姫さん」

静夜はそう言つと青白い瞳でともえを見下ろした。

「一歩間違つてたら本当に頭と首が離れ離れになつてたぜ……ホン
ト危ない奴だ」

それを見てともえはぎりつと歯ぎしりして彼を睨みつけた。

「ちよつとお！ その女返しなさいよ！」

「残念だな。お前が隙を作つたからいけないんだ」

「きい……ッ……！ 悔しい！」

そう言い放つともえは激しく地団駄を踏み悔しがった。

それを見て静夜は勝ち誇つたような笑顔を浮かべ言った

「まあ、そう言うことだ。戸隠の姫さんよ……世の中そううまくい
かないってことだ」

「うるさいわね！ あんた今度会つたらただじゃおかないわよ！」
「ふ……その日を楽しみにしてるぜ」

静夜は一言そう言つと迫りくる夕闇の中へと姿を消して行った

それをとめはただ呆然と見送るしかできなかつたが、直後彼女

の口元に不敵な笑顔が生まれた。

「しずちゃんったら、馬鹿ねえ」

そう言つと彼女はすつと黒と紫の基調の携帯電話を取り出した。

その画面にはGPS画像とともに赤い点が絶え間なく西へと向かつていた。

「あたしが早紀のポケットの中に発信器入れてたなんて予測できたのかしら……これでああなたの居場所は筒抜けつてわけよ」

ともえはそういつと携帯電話を両手に抱くとまた病んだようなため息をついた。

「さーって、この情報誰に教えようかしら？ やっぱり悠輔には教えるべきだよねえ。だとしたらこれつて三つ巴の戦いになるのかしら？ うーん、それつてとても魅力的！！ ともえちゃん萌えちやうわあ」

そうきやびきやびと言いながらともえはその場をスキップで後にする。

鎖鎌をぶんぶん振りまわしながら

35話 嵐が来る

「誰だ
」

東都大学の自転車置き場 悠輔の元にその電話が入ったのは大
学を出ようとして自分の大型バイクにまたがったその時だった。

それは非通知の電話だった。

だが携帯が鳴ったその直後から悠輔は何か嫌な予感が身体の中をよ
ぎっていた。

それがどこの誰かからは知らないが、悠輔は携帯に出たとたん威嚇
の声を出していたのだ。

「そう。ピリピリするなよ。家元」

電話の向こうの声は男だった。

否、このねちっこいしゃべり方 どこかで聞いたことがある。

そつだ あの男だ。自分をここまで追い込んだ張本人のあの男
だ。

「上月静夜
」

悠輔はその名をつぶやくと、ぎりつと歯ぎしりをした。

「お、声だけ聞いて俺だと気づいたか。さすがだな」

その言葉を聞いて電話の向こうの上月静夜は少し嬉しそうな声をあげた。

それを聞くだけで悠輔はなぜか心が掻き毟られそんな気分になったが、あえて冷静を装って彼に声をかけた。

「なるほど、僕の携帯番号まで裏で手に入れる力があるって言い込んでんだな」

「そう言うことだ」

本当に厄介な相手だ。

悠輔はそう心の中でつぶやいたがすぐに冷静になって電話の向こうの静夜と対峙した。

「で、何の用？」

「さっき戸隠の姫様のところからお前の女を助けてやった」

その一言に悠輔はカッと腹の底から怒りがこみ上げるのを覚えたが、それを相手に悟られないようにあえて冷たい反応で返した。

「別に君に助けてもらう筋合いはない」

「おや、彼女を殺しかねないあの女の手から彼女を救ってやったのに」

「君こそ早紀をさらって何をする気？　それで僕をおびき寄せ魂

胆なんですよ」

「おーおーえらい言われようだな。助けてやったのに人さらいみたいな言われ方ってないだろ」

その一言に悠輔は真紅の瞳で前をじっと見た。

そして電話からでも殺気じみた空気がわかるようにあえて低い声で一言言った。

「早紀に手を出してみる。それこそ君の身体はバラバラに引き裂かれるよ」

その一言に電話の向こうの静夜は不気味な笑い声をあげた。

やれるもんならやってみろ　悠輔にはそんな挑戦状に聞こえた。

「まあ、ともかく、今から俺の居場所をお前に送る」

「ほづ……やつぱりそうきたか……」

そうやって僕を戦いの場に引つ張り出そう　って魂胆か。

悠輔はそう思い口元に蔑んだ笑みを浮かべ言った。

「いいよ。君の挑戦受けてあげる」

その一言に電話の向こうの静夜は深いため息をついた

「それがなあ、家元。この勝負かなりの邪魔が入ると思うんだが…

…」

「それは覚悟の上だよ。今日はそう言う一日だから」

そう、今日はそう言う一日なのだ。

今日一日でどれだけの忍者に会ったと思っっているのだろう。しかもどいつもこいつも油断のならない頭目級の相手ばかりだ。

「ともかく覚悟しとけよ。上月静夜。君だけは僕の手で決着をつける！」

電話の向こうの上月静夜はその言葉に対し鼻で笑うような声を出した。

「やれるもんならやってみなよ。家元」

そのねちっこい声に無性にムカついた。

これ以上それがばれるのがいやだったからこちらから乱暴に電話を切ってやった。

悠輔は深いため息をつくとき合を入れたように真紅の瞳で前を見て、エンジンペダルを踏み大型バイクを起動させた。

「で、君はどうするつもりだい？」

悠輔は独り言を言うようにある人物に語りだした。

それは自転車置き場のすぐそばにある立派な大木のすぐ袂、一人の大男が悠輔の様子を探るように腕を組んで立っていた。

「ボクは　ただあの女を追っただけだ」

その男、応野邦彦は顔色一つ変えずに悠輔にそう言った。

それを聞いて悠輔は蔑んだような笑みを浮かべた。

「君と仁科ともえとどういう因縁があるのか知らないけど、ボクはその関係に関しては介入する気はない。勝手にすればっていうのが正直な感想だよ」

「ああ、そうしてもらおう方がこっちも楽だ」

そう言つと邦彦は巨体を揺らしすつと起き上がった。

「ボクもお前の決闘には関知する気はない。勝手に流派同士殺し合いをすればいいさ」

「つまり、君は今回僕の邪魔をしないんだね」

「そう言うことだ」

それを聞いて悠輔は呆れ半分の笑顔を浮かべた。

どうもこの応野邦彦の意図が計り知れない部分があるが今回はかりはどうやら敵対することはなさそうだ。

「それじゃあ、あとは自分で何とかしてくれる？　僕は忙しくなつたからね」

「お前に言われなくてもやるつもりだ」

「その様子じゃ、仁科ともえの位置をつかんでる様子だね　なか
なかやるじゃん」

その一言に邦彦ははっと悠輔を見た。

彼はにやにやと笑いながらバイクのエンジンの回転数を上げた。

「応野邦彦　また相まみえることを楽しみにしてるよ」

悠輔はそう言うのとバイクにまたがると爆音を出しながらその場を
颯爽と走り去って行った。

それを見送りながら邦彦は徐々に空恐ろしさが身体に渦巻いていた。

その瞬間疼き出す右肩の古傷　その昔、真紅の瞳を持つ男に付
けられた傷

その男と全く同じ瞳を持つ悠輔との出会いは邦彦の考え方を若干
変えていったのは事実だった。

あの男　いつか決着をつけないとこちらが危ない。

いつか、甲賀の頭目上月静夜と対峙した際彼が言っていた言葉。

『俺たちの争いを止めるために力を使いたいって言うなら、俺より
まずあの青年を何とかしないと話のつじつまが合わないぜ』

確かにその通りだ。彼を本気で何とかしない限りこの争いはいろ

んな人を巻き込んで永遠に続く。

それだけの恐ろしい求心力が藤林悠輔という若者には備わっている。

否、それは彼が生まれ持った宿命さだめみたいなものかもしれない

どちらにしろ、次こそは自分の手でこの戦いを終わらせなければならぬ。

邦彦はすつと拳を握り、曇天模様の空を睨んだ。

嵐が来る　　！

36話 BEFORE 彼の正体

ぴちゃん、ぴちゃん

絶え間ない冷たい水音が耳に響き渡る。

早紀は摩天楼の下の暗い暗い闇の中一人起き上がった。

ここは？

ふと見上げるとそこ薄暗く狭い空間だった。

廃工場の資材置き場だったところなのだろうか、無造作にトタンや鉄骨が置かれつづれた段ボールが山積みになっている

雑然と散らかったその部屋に早紀はぐったりと寝込んでいたのだ。

どうして私、ここにいるんだろう？

早紀は重たい身体をゆっくりと起こしながらぼんやりとする頭の中でそれを考えた。

よく思い出してみるとつい数時間前まで自分の彼氏の大学で大学祭を楽しんでいたはず。

それからどうだったっけ？ 確か悠輔がどこかに行ってしまった、立腹していたところに

ともえちゃん？

そう仁科ともえに偶然出くわしたのだ。それから

「……？」

なぜか不思議に思いだせない。

そこからどうしてかこの廃工場の資材置き場に場面ががりりと移っていることに早紀は激しい戸惑いを覚えた。

一体何が起きたというの？

悠輔は？　ともえは？　一体みんなどうしたっていうの

「起きたか？」

その低い声を聞いて早紀ははっと顔をあげ警戒感を露わにした。

真っ暗な暗闇の中、一人の男がブーツを鳴らしてこちらに歩いてくる。

早紀は思わず恐怖で身体を震わせた。

だって、こんな状況　サスペンスドラマで拉致された女の子と同じじゃない。

きつとこの男だってワルモノに決まってるんだから！

「怖がることはない」

男は早紀の前でとまると彼女に向い優しく手を差し出した。

男は背が高く、真っ黒なコートを羽織り、両腕はまるで中世の騎士のような重厚な手甲をつけていた。

それを早紀は異様なものを見るような目つきで見つめた。

「誰！」

早紀は男の手甲の手を避けるように一歩引いた。

それを見て男は困ったように笑いそして早紀の視線に合わせるかのように身体をかがめた。

「だから、怖がるなって。俺はあんたに何もしない」

男は意外にも優しげな瞳をしていた。否、優しそうに見えたのかもしれない。

だけどぼさぼさの黒髪の中覗く瞳は自分に対して悪意を持っていないように早紀は感じたのだ。

「一体……なんなの！」

早紀は半分泣きべそをかきながら男を責めた。

「なんで私は東都大学からこんなところにいるの？ 悠輔は、ともえちゃんは あなたは一体何者なの!？」

「それは……どこから説明すればいいのかわからないな」

そう言つと男はぼさぼさの頭を掻きわけ苦笑した。

「とりあえずあなたはあの女　仁科ともえに睡眠薬を飲まされて
今まで昏睡状態だったんだよ」

「え　！？」

その言葉を聞いて早紀は絶句した。

そう言えば　あの東都大学内のメイド喫茶でともえの入れたホ
ットティを飲んだ覚えはある。

ただどあれに睡眠薬が入っていたなんて

「意味わかんない」

早紀は一言そう言つとぶすつと頬を膨らませ訝しげに男に聞いた。

「なんでもえちゃんがそんなことしなきゃならないの？　私、あ
の娘に恨まれる覚えはないと思うんだけど……」

「さあな、それは仁科ともえの心中の話だから俺にはわからん」

そう言つと男は深いため息をついた。

「でも、あなたは確実にあの女に殺されかけるところだった。あの
女ならそれをやりかねん」

「そんな　」

その言葉を聞いて早紀は急に身体に恐怖が這い上がり身体がガクガクと震え始めた。

早紀は訳がわからなかった。なぜ自分がこんな目に合うのか、ともえは何の目的でこんな仕打ちをしたのか

ただこの目の前の男もすべてを知っているわけではない。だとしたらますます何もかもが分からなくなった。

「混乱するだろうな……」

そんな動揺と恐怖で震える早紀を男は手甲の手で優しく撫でた。

「あなたは何も知らなくていいんだ。その方がいいことだって世の中たくさんある」

「でも……」

「ただ、あなたはもう引き返すことのできないところに来てしまったのかもしれない。たった一人の男を愛してしまったがために」

「たった一人の？」

早紀はその言葉を聞いて呆然とした。

悠輔だ。彼が全ての元凶だっていうの？

あの無愛想で情けない東大生の彼のどこにそんな力があるって言うの？

「一体？」

あなたたち何者なの？

そう聞こうとしたその瞬間早紀の口の前に男の手がすつと指を立てた。

まるで、聞くな　と言わんばかりに。

「さて……と」

そう言つと男はすつと早紀の前に立ち上がると彼女を見た。

「あんたはそろそろこの場を立ち去った方がいい。これから余計な客が大勢やってくる」

「余計な客？」

「死にたくなかったら、さっさとここから立ち去れ」

その言葉を言った男の視線は一瞬だけ鋭く青白い光を昂げる。

それを見て早紀はまるで縛られるような緊張感に襲われた。

男はそれを見て冷淡な表情を浮かべまた踵を返してその場を去ろうとしたその時だった。

「待って！」

早紀のその一言に男の足が止まった。

「私、確かに何にもわからない馬鹿な部外者なのかもしれない。だからあなたは立ち入るなって言いたいんだらうけど　　やっぱり知りたい！」

その一言に男は早紀の方を振り返らず黙ったまま聞いていた。

それが彼なりの優しさだったのかもしれない。

「何から聞いたらいいんだらう　　いっぱい有りすぎて分かんないや。でも、これだけは教えて！　悠輔は　　一体何者なの？　あの人は一体なにを隠しているの？」

「それを知ったら引き返せないぞ」

男のその一言に早紀はごくつと息をのんだ。

だけでもはや彼女の選択肢に引き返すという言葉など毛頭なかった。

「教えて！」

早紀の強い言葉に男は一瞬沈黙した。

彼も迷っているのだらう。　　真実を教えるべきか否か

　　だけど彼はすぐに意を決して、早紀の方を振り返ることなくさりりと言った。

「藤林悠輔は 忍者なんだよ」

「へ？」

最初、早紀は男の言っていることは冗談だと思った。

馬鹿言わないで！ 今の時代忍者なんているワケないじゃない！

そう反論したかったけど男の言葉から伝わる真剣さがそれを阻んだ。

「信じようが信じまいがあんたの勝手だ。だけどこれだけは言っておく。藤林悠輔は若くして伊賀忍者を率いて忍者界のトップに君臨し続けている。あんたはそんな恐ろしい男を愛してしまったんだ！」

嘘だ！

早紀は何度そう言って男の声を遮ろうとした。

だってその悠輔は自分の知ってる悠輔とは大分違う。

あのどこか頼りなくて情けないような眼鏡面の彼の中にどこにそんな面が隠れているというのか

「何度も言うが、信じないならそれでいい。だけど……これからここで起こることは全部真実だ。あんたの彼氏の正体を確認したいなら見て行くがいいさ」

「……」

その一言に早紀は黙り込むしかできなかった。

もちろん信用なんてできない。荒唐無稽すぎる話なのだ信じられないわけではない

「ただど　彼が嘘を言っているようにも早紀には思えなかった。だとしたら真実は一体

「待って！」

また歩みを進めようとした男を早紀は再び制止させた。

そして彼の猫背ぎみの背中を見つめながら一言言った。

「あなたは　悠輔をどうしようってするの？」

その一言に男は初めて早紀の方を振り向いた。その顔は不気味なくらいの満面の笑みに満ち溢れていた。

「倒すよ」

「え？」

「向こうも俺を倒しに来る。どちらが倒れるかは神様次第ってところだな」

早紀はそれを聞いて急に怖くなった。

男の話の意味はまだ分からずじまいだけど、なぜか怖くて怖くて仕方がなかった。

「もし、俺があんたの彼を殺しても恨みっこはナシだからな」

「え？」

その言葉を聞いて瞬間、男の後ろ姿は糸を引くかのようにすっと闇に消えた。

そして、どこからともなく聞こえる彼の声だけが早紀の耳に残った。

「あんたは好きになっちゃいけない男を好きになってしまったんだ。引き返すなら　今しかないよ」

37話 BATTLE 1 ともえVS邦彦

これは悪い夢か何かだろうか

男が去ってから早紀は呆然とその場に立ち尽くしてそのことばかり考えた。

悪夢としか思えない。

友人でもあった仁科ともえに睡眠薬を盛られて、眠りから覚めたら目の前にいた見知らぬ黒コート男に藤林悠輔の正体を教えられた。彼は忍者であると

ああ、私おかしくなってる。きっとまだ睡眠薬の影響が残っているのかもしれない。

だから悪い夢のような今が存在するし、幻のような黒コート男が見えたんだ。

夢ならいつか醒めるもの。それならいつそのこと今すぐ醒めてほしい

早紀はそう思いながらふらつく足でゆっくりと立ち上がった。

とにかくあの男の言うとおり、ここから出よう。それが一番の夢の醒める道だ。

恐怖と薬の影響で足がとてもふらつく。まるで雲の上でも歩いているかのように足場が不安定に思えた。

だけど一歩ずつ足を前に踏み出して早紀は薄暗い資材置き場のドアへと近づいた。

そして、ぎいっと錆びついた鉄のドアを開けると、そこはただ広い大きな空間だった。

おそらく工場が稼働していた時はここに機材や資材がたくさん置かれていたメインの工場だったのだろう。

だけど、工場が引き払った今は何もなく静寂と暗闇が支配するただの広い空間になっていた。

やだ、本当にサスペンスドラマみたい。やっぱり私拉致られたのかしら？

早紀はそんな考えが頭によぎったがすぐに考えを変えその部屋を縦断するように出口へと歩きだした。

その時だった。

カッソ、カッソと厚底ブーツを鳴らす音がこの広い空間に響き渡る

早紀はその音にはっと顔を上げるとそこには街明かりに照らされた一人の少女の影。

大きなツインテールにフリフリのコスロリワンピースにリボンがついたヘッドセット

その姿を見て早紀ははっと息をのみ警戒の表情を出した。

「ともえ　ちゃん？」

その少女の影はどんどん早紀の方へと近づく。

それと同時に彼女の手には鈍く光る何かが握り、それをゆっくりと振り回していた。

それはとても長い鎖、そして、その先には大きな鎌のような刃物がついていた

「あーら、早紀ちゃんもうお目覚め？」

彼女は不気味に笑いながら一言そういった。

「できればずっと寝ててもらいたいところだったけど、邪魔が入っちゃったわね……」

そんな不気味に笑う彼女をみて早紀は初めて怖いと思った。

だけど逃げようとしても足が自由にきかない。恐怖で完璧に怖じ気づいている。

「どうして」

早紀はそんなともえに悲鳴に近い声で言った。

「どうしてあなたはこんなことをするの！？　私があなたになにか恨まれることしたの！？」

「やったわよ」

そう言うともえの瞳がその瞬間、暗く光った

「あんたはあたしの大事な男性ひとを盗った。それだけでも十分万死に値するわ」

「何で　！　あなたと悠輔何か関係でもあるっていうの!？」

「ええ、あるわよ……大ありよ」

ともえはそう言うと急に病んだようにふうつとため息をつくときらきらと瞳を光らせた

「あんたが悠輔と出会う遙か前、あたしと悠輔は結ばれる予定だったの。そう　あたしたちいわゆる許嫁ってところかしら」

「い……許嫁!？」

そのことを聞いて早紀は度肝を抜かされた。

何かの間違いだろう。そう一瞬は訂正しかけたけれどもえはさらに悦に入った表情で語り続けた

「あれは確かあたしが14の時だったかしら　親に15歳の藤林悠輔の写真を見せられてこの人と将来結婚するのよっていわれたの。まあお見合いの話は両家の思惑のうちにお流れになっちゃったけどあたしはその時から悠輔って人に夢中！　だってすっごくいい瞳してるし、なんて言っちゃってすっごくイケメン！　それは5年たった今でも気持ちよかったですよ!？」

「はあ……」

「だから……あなたが悠輔の女だってことがとにかく気に入らないのよ！」

そう言った瞬間、ともえは振り回していた鎖鎌を止めて早紀に向かってそれを構えて見せた。

「あんたみたいいな素人同然の一般人が悠輔みたいな高貴な人とつきあうなんて許せない！」

「そんなこと言われたって」

そう言つと早紀は声を震わせ反論した。

「私だつて知らないわよ。悠輔のことなんて表の顔しか知らなかったのに」

そつだ。私の知っている悠輔は表の顔なんだ。

あの無愛想で頼りない東大生の姿はすべて彼の表の顔　だとしたら裏は？

「許せない！　そんな覚悟で伊賀藤林流の家元と付き合つてただなんて　！」

そう言つたとたんともえの表情が急に怒りに染まった。

金髪のツインテールを逆立て瞳は恐ろしいぐらいにつり上がって

いた。

「進藤早紀！ おとなしくここで死になさい！ それがあなたのため
め 悠輔のためなのよ！」

ともえがそう言ったその瞬間、彼女は右手に持った鎖鎌を早紀め
かけて放った。

風を切って空を切り裂く光り輝く鎖鎌。

ダメだ……私ここで死ぬんだ

早紀はその瞬間、そう感じ恐怖でぎゅっと目を閉じた。

……
……
……？

あれ ？

一行に襲ってこない刃に早紀は恐る恐る瞳をあけた。

早紀のすぐ目の前には一人の男がいつの間にか仁王立ちしていた。

悠輔 ？ 否違う。

あの黒コート男 ？ それも違う。

それは彼らとは比べものにならないほど巨大な背中だった。

「探したぞ　仁科ともえ」

大男はともえの鎖鎌を全くの素手で握っていた。

そこから血は出ているのだがそれ以上のダメージは受け付けていないように見えた。

「あんだ　！　誰よ！」

ともえはその大男の顔を見て初めて表情に焦りを見せた。

それを聞いて大男はにやつと笑みを浮かべともえの鎖をぎゅっと引いた。

「応変流　　って言えば話が早いかな？」

「応変流ですって？」

その言葉を聞いてともえは大きな瞳をさらに大きくして驚いた。

「　あんたが応野邦彦だって言うの？」

「ああ……そうさ」

その名を聞いてともえは少しだけ心当たりのあるような苦々しい表情を浮かべた。

だがすぐに彼をキツとにらむとまるで牙を見せるように唸った。

「あんだね！　あたしの仲間たちを次々と血祭りに上げてるってヤ

ッは
」

「襲われたからやり返したただけだ……」

「うるさい！ 大体出てくるタイミングが最悪！ せっかくあたしの敵を殺れる絶好のタイミングだったのに！」

そう言うともえは恨めしそうに邦彦と呼ばれた男を見た。

それを見て邦彦は若干あきれた表情を浮かべた。

「この可愛い一般人がお前の敵か これだから戸隠の忍者は低レベルだと言われるんだ」

「うっさい！ あんたみたいな色のない男にオトメのコイゴコロなんてわかるはずないでしょ！」

「やれやれ……誰のせいでここまでこじれたんだか」

邦彦はそう言うつと後ろで震え続ける早紀をちらつと見た。

その糸のように細い目はただひとつここから出て行けと強く言っているようだった。

「ともかく、戸隠の姫さんや。ボクはここで君を殺すよ。それが君たち戸隠との因縁を解決する唯一の方法だからな」

「あたしを殺すう？ やれるもんならやってみれば」

そう言うともえはすつと手をかざすと小さく呪文を唱えた。

すると次の瞬間、邦彦の足下からもやっと紫の煙が勢いよくわき上がった

思わず咳き込み煙から目をかばう邦彦　その隙を突きともえは高く跳躍し邦彦の首めがけて鎖鎌を振り抜いた。

それを邦彦は右腕一本ではじき飛ばした。鋼化した邦彦の身体はどんな刃でさえ通さなかった。

だがその手もともえは十分考慮していた。

次の瞬間彼女はワンピースのポケットからたくさんの紙を振りまいた。

ともえが手を振るとそれは意志を持ち白く小さな蜻蛉のように飛び立ち始めた。

そしてみるみるうちにそれは邦彦の巨体にべたべたとくっつき始めた

「小癩な……」

邦彦はそう言つと静かに目を閉じた。

そして小さく息を吸つと次の瞬間彼の細い目はかっと見開いたその瞬間、彼の全身から激しい闘気が勢いよく放たれた

吹き飛び粉々に引き裂かれる小さな紙の蜻蛉たち

さらに追撃するかのように邦彦は地面を蹴ると猛スピードでとも

えめがけて岩のように大きな拳を振り上げた。

メリメリつと地面に埋め込まれる邦彦の拳。その瞬間大地は地響きをあげ地面は激しくえぐりあがった。

ともえはまたしても高く跳躍しそれを避けた。そして深く息を吸って次の攻撃に備えた。

邦彦もすぐに体勢を変えた。空を飛ぶともえめがけて手をかざすと、そこから狂おしいくらいの光と衝撃波が放たれた

だがともえはそれを焦ることなく口を大きくあげた。

次の瞬間、彼女の声に大気が震えた。

邦彦の放った闘気でさえかき消すような衝撃波が彼とそして後ろで呆然と戦いを見ていた早紀に襲いかかった。

それは耳の鼓膜を直接痛める超音波のような音だった。

邦彦は思わず耳をふさいだ。そしてよためくように思わず片膝をついた。

それは、無敵の鋼鉄の身体を誇っていたはずの邦彦が初めてダメージを受けた瞬間だった。

「あーら。身体は硬いようだけどどいやら耳は普通のような」

ともえはすつと地面に降り立つと苦痛に顔をゆがめる邦彦を笑った。

「くっ……『音撃』か……」

衝撃でふらふらする頭を上げ邦彦はともえを苦しそうににらんだ。

尊には聞いていた。戸隠には自分の声を使って相手を攻撃する秘術があると……

だが、ここまでも激し強い力があるとは 邦彦は思いもしなかった。

「うふふ……あたしの声ステキでしょ。そんなに聞きたいならもう一度聞かせてあげる」

そう言つともえは手を前にかざすとまた大きく息を吸った。

まずい 邦彦はぎゅっと唇をかんだ

ともえの『音撃』をもう一度食らって無事でいられるかわからない。
い。
ましてや

邦彦ははつと後ろを振り向いた。そこには耳をふさいでそのまま失神した早紀がぐったりと倒れている。

何の訓練もしていない彼女がこの術をもう一度食らえば確実に命はない。

そのためには 何とかして彼女を黙らせないと。

邦彦は右手を横にかざすとそこに自らの闘気を溜め始めた

今度は彼女の声にかき消されないようにフルパワーをぶち込むつもりだった。

しかし、様子が変わったのはともえの方だった。

次の瞬間彼女は何かに気づいたかのように、術を貯めるのをやめて側転して何かをかわした。

直後彼女の頭を正確に狙って通り抜ける二つの細く煌めく光

ともえ、邦彦　そこにいる誰しもがそちらの方向を振り向いた。

コッソ、コッソ

彼はゆっくりとした足取りでこちらに近づいてくる。

真っ黒なＴシャツの上に背中に籠をあしらった真っ黒な陣羽織、そして額には目が覚めるくらいの真っ赤な色の長い鉢巻きをくくりつけて。

もはや彼の瞳には眼鏡は存在していなかった。ただ有るのは暗闇に赤く光る真紅の瞳だけ。

昼間の顔、情けないエリート東大生の仮面を脱ぎ捨てた藤林悠輔はその瞬間、夜の顔、日本最大の忍者流派伊賀藤林流の家元『百地悠輔』としてこの場に舞い降りたのだった。

38話 BATTLE 2 悠輔VSともえ

「きゃあ！ 悠輔！」

彼の姿を見て真っ先に反応したのはともえであった。

「いやーん。やっぱり悠輔は似合わない眼鏡よりその格好が似合うう〜！ もう、超カツコイイ！」

ともえのその一言に悠輔は無言のまま冷たい視線で返した。

その視線には若干の怒気も混ざっていた。

「お前……ボクを助けたのか？」

邦彦は大きな身体をよろめかせながら悠輔の方を向いた。

だが彼はその一言を笑い捨て言った。

「助ける？ 馬鹿を言うな。僕は早紀を救いたただけだ」

「やだー。悠輔まだあの女に未練があるのお〜」

その一言にともえは不機嫌そうに口をとがらせた。

そんな彼女をまるで軽蔑するような視線で悠輔は見下した

「君は最低の忍者だ」

「え……」

その一言にともえの表情が凍り付く。

だが悠輔は口撃を止めることはしなかった。

「君が僕に何の恨みがあるかは知らない。だけど、一般人の早紀を僕たちの争いに巻き込むなんて僕は君を 否、戸隠流を軽蔑する」

その言葉を聞いて邦彦は言っではいけないことを言ってしまった
なと思った。

その証拠にそれを聞いたとたんともえはわなわなと身体を不気味
に震わせていた。

「ひどい……悠輔」

ともえは泣きべそをかいていた。

「だいたいさあ……あんたが一般人と付き合い出すのが元凶じゃないの！ 伊賀藤林流の家元ならそれなりの相手と付き合いなさいよ
」！

「誰だよ。そのそれなりの相手って」

悠輔はその一言に半ばあきれ顔で深いため息をついた

それを見てともえはさらに怒りを瞳に溜めた。

「バカ！ いい加減に思い出しなさいよ！ 元許嫁の顔くらい

「！」

「は　？　元許嫁？」

その一言に自信ありげな悠輔の表情が初めて曇った。

それは全くの寝耳に水だった。

何かの間違いだろう　いつから伊賀藤林流は戸隠流とそう言う関係になっただ？　長年対立しあつた流派じゃなかったのではないのか　？

「やだあ……本当に忘れてる」

悠輔のその困惑した表情にともえは不機嫌そうに口を曲げた。

「ねえ、覚えてないの？　あんたが15の時だと思っただけ。こんな可愛いくノーのお見合い写真見せられなかった？」

「……………」

その一言に悠輔は首をひねった。

悠輔はどうしても思い出せなかった。過去にあった婚約の話も少女だったともえの面影も

「ごめん、本当に記憶にないかも……………」

「ええええ！　そんなあー！」

その一言にともえは衝撃を覚えた。

「何かの間違いじゃない！ あたしは5年間ずっと悠輔のことを思っ生きてきたのよ！ それなのに何？ あんたはそれを知らないで一般人の早紀と付き合ってたの！？」

「そんなこと言われたって。そんな婚約、記憶にないもんはないんだ」

「あああ！ もういい！ 期待したあたしがバカだった！」

そう言うともえは鎖鎌の切っ先を悠輔めがけて構えた。

「藤林悠輔！ もう一度言うわよ あたとあの女どっちが伊賀藤林流の家元にふさわしいと思う！？」

「そんなこと急に言われても……」

悠輔はその言葉に困惑しきりの顔を浮かべたが、すぐに彼は冷静を取り戻した。

鋭い真紅の瞳でともえを射貫くと重たい言葉で一言言い放った。

「ただどこれだけは言える。僕はくノ一を恋愛対象に絶対にしたくない。君を見て強くそう思ったね」

ああ、また言ってしまったな。

遠巻きにその様子を見ていた邦彦は悠輔の言葉に対しそう思った。

その瞬間、邦彦が危惧したようにともえの中で何かキレたようだった。

「ひどい」

彼女はそう言つと半泣きになりながら悠輔を睨んだ

その瞳は深く暗い闇を湛え、唇をぎゅっとかみ、右手で再び大きな鎖鎌を振り回し始めた。

「こんなにあんたを想っているのにそんな言い方ひどすぎる！いくら悠輔でも　その言葉は許せない！」

そう言つたその瞬間彼女は悠輔めがけて鎖鎌を放つた

ひゅんと風を切り音速のごとく回転し悠輔を襲う刃

だが悠輔の真紅の瞳はその軌道を完璧に予測していた。

彼は軽く身体を反らしその刃を回避する。そして後に続く鎖を片手一本でつかむと彼は鋭い瞳で彼女を見た。

「これが君の答えかい？」

「ええ、そうよ」

そう言つともえは病的なほどの笑顔を浮かべた。

「あたしはあんたを殺してでも一緒になる。それがあたしの　答えよ！」

ともえはそう言つと悠輔に握られた鎖を強く引いた。

その瞬間、まるで生命が宿つたかのように再び悠輔に襲いかかる鎌。

悠輔は瞬時に鎖から手を離すと軽く跳躍してその一撃を難なく回避した。

「わかつたよ」

とんつと軽やかに地上に舞い降りた悠輔は腰ベルトに付けた一対の釵を勢いよく抜いた。

それをまるで遊ばせるように手の中で回転させながら悠輔は真紅の瞳でともえを見た。

「それが君の答えなら僕も答えよう。この刃でね」

そう言つた瞬間、悠輔は地面を蹴りともえめがけて獣のように躍りかかった。

それに対しともえは鎖鎌を自らの頭上で激しく振り回しそして一撃一撃を放ち続けた。

ともえの鎖鎌は一直線に走り抜ける悠輔に次々のように襲いかかった。

それはまるで彼女を守るように暴れ回る龍のよう。一撃がくる度に激しく地面をえぐっていく。

しかし悠輔はその龍の一撃の一つ一つを見落とすことはなかった

彼は一撃がくる度に瞬間的に速度を上げそれを難なくかわしてみせる。その様子は瞬間移動でもしているかのようだった。

それを見てともえは瞬時に戦術を変えた。印を結び素早く呪文を唱えると彼女の周りに生命が宿った小さな紙が無数に現れた

それは紙の刃のように悠輔めがけて一気に襲いかかった。

だが、悠輔はそれを見ても焦るそぶりを見せなかった。

悠輔はカツと真紅の瞳を見開いた次の瞬間、彼の周りは激しい灼熱に包まれた。

ともえの紙の刃はあっけなく彼の前で音もなく燃え尽きていった。

「火遁結界　！」

それを見てともえは激しく動転した。

伊賀は火遁を得意としているとは聞いていたが、これほどまで瞬間的に最高位の術である火の結界を作り上げるなんて　なんて言う使い手なのだろう。

「どつしたの？　もう妖術は終わり？」

揺らめく灼熱の陽炎の中、悠輔は真紅の瞳を光らせにやっと笑って見せた。

そして次の瞬間、彼は小さく手をかざすとそこから大きな炎が立ち上った。

「それならおとなしく 死ね！」

そう言ったその瞬間、悠輔の周りをうごめいていた炎がまるで彼の命令を聞くかのように大きく燃え上がりともえめがけて襲いかかった。

まるで巨大な二体の蛇のごとく蛇体をくねらせともえに食らいつく炎。

しかしともえはその炎を高く跳躍し飛び越えると、下界で炎を操る悠輔めがけて手をかざした。

「こうなったら……結界ごと吹き飛ばしてやる ！」

ともえはそう言つと息を深く吸い込み再びあの技の構えをとった。

ともえは自信があった。これが決まれば悠輔の炎の結界も解けるし、彼に深刻なダメージも与えられる。

形勢逆転を狙った一か八かの大技 それが戸隠流奥義『音撃』だった。

彼女が口を開いたその瞬間周りに音の衝撃波の輪が放たれた。

その声は激しく大気を震わせともえの辺り一帯を文字通り吹き飛ばした。

やった！

その瞬間ともえは勝利を確信した。

土煙の中もはやそこには悠輔の炎の気配もなにもない。

ともえは下に向けてにやつと病的な笑みを浮かべたその時だった。

それは飛び上がったともえの背後に立ち上った殺気だった。

「
」！

ともえははっとしてそちらの方を振り返る。しかし、もうそれは遅かった。

すぐ背後には先ほどの『音撃』を直撃したはずの悠輔の真紅に光る瞳。そして彼の手には鋭い釵が握られていた。

次の瞬間、悠輔は隙のできたともえの首筋に釵を激しく打ち付けた。

ともえは何もできなかった。そのまま地面に叩きつけられることしかできなかった。

立ち上る土煙。

決定的な一撃を食らったともえは痛む身体を必死に起こそうとした。

だが、ともえにもはや反撃する力など残っていないかった。

「くっ……結構効くな。戸隠の『音撃』は」

地面に優しく降り立った悠輔は、その瞬間耳を押さえ身体をふらつかせた。

「どうやら先ほどのともえの一撃は全くの無効だったワケじゃなかったらしい」

「　　なんで？」

ともえは痛む身体を起こしながら悠輔を見た。

「何で私のあの術をかわせたの？　意味わかんない」

「ああ……これだよ」

悠輔はそういうと耳から何かを取り出てそれをともえの方に投げた

耳栓　それを見てともえは絶句した。

「しかし、これをしてこのダメージっていうのはちょっと恐ろしいな。なかったらと思うとぞつとぞつとするよ」

「……………」

その一言を聞いてともえは黙ったまま悔しそうに土もろとも拳を握りしめた。

悔しいがこれ以上の反撃は無理　　自分は悠輔に完璧に負けたの

だから

「さてと……どうしようかな」

そう言つと悠輔は釵を手の中で踊らせながら蹲るともえの方へと近づいた。

「殺せばいいじゃない……」

そんな悠輔を見てともえは悔しそうにそうつぶやいた。

「あたし、悠輔に殺されるならそれはそれで本望だよ。さあ、早くやっちゃったらいいじゃない！」

「うーん、彼女そう言ってるけど……応変流の頭領さんはどう思う？」

そう言つと悠輔は奥で片膝をつき耳をかばう邦彦を見た。

「ボクは……」

「大体、どつう事情があるか知らないけど彼女は君の獲物だったんでしょ？」

その一言に邦彦は怒つたように悠輔を睨んだ

「情けで譲つてやるっていいたいのか！」

「あいにく僕はそこまで優しくくない」

「じゃあ、何なんだその態度は　ボクに了解取る必要ないだろ！」
その一言に悠輔はにやつと邪悪な笑みを浮かべともえの手を踏んだ。

徐々に力の入る悠輔の足に、ともえは激痛に苦悶の表情を浮かべた。

「僕は君に借りを作ってやりたいんだ」

「借り？」

「そう、応変流と戸隠流になんの因縁があるかは知らないけど、僕が今彼女を殺さずに君に譲ればそれはそれで借りができる。そうすれば君たち応変流は僕たち伊賀に頭が上がらなくなる……」

その一言を聞いて邦彦の表情が一気に怒りに燃えた。

かっと思開いた鋭い瞳で悠輔を睨み付けると、まるで牙を見せるように歯を食いしばった

「お前　それが目的か！」

その言葉に悠輔は邪悪な高笑いをあげた。

そして真紅に染まった瞳で邦彦をにらみ返した。

「当たり前じゃないか。この状況を利用しないわけにはいかないだろっ」

「くそっ！」

そう言ったその瞬間、邦彦は手を前にかざし悠輔めがけて闘気を放った。

まるでともえから離れると言わんばかりに

悠輔はそれを軽く跳躍でかわすと、言われたとおりにともえから離れて着地した

「それが君の答えか……」

そう言うと悠輔の瞳がまた真っ赤に光った。

邦彦はゆっくりと巨体を揺らし立ち上がり彼を睨み返した。

「藤林悠輔　お前を生かしてはおけない」

「ふうん……面白いこと言うじゃない」

「伊賀と戦うことはこの勢力争いに参戦すること　応変流としてそれを避けてこようとは思ったがもう我慢できない！　お前を倒さなければこの戦いは永遠に終わらない！」

そう叫ぶと邦彦は岩のような拳を振り上げ地面を思いっきり殴りつけた。

その瞬間、彼の周りから地面を割るような激しい衝撃波がものすごい勢いで走っていく。

悠輔は瞬間的に側転してそれをすんでの所でかわした。

しかしその次の瞬間土の波のような衝撃波は地面をいとも簡単に引き裂いていった。

「土遁 か」

巻き上がった土煙の中悠輔は釵を構えながら一言そうつぶやいた。

なるほど この舗装されてないむき出しの地面ならば彼のお得意の土遁が使いたい放題というわけか……

「面白い。ならばこちらは火遁で迎え撃とう！」

そう言うと悠輔は素早く印を結んだ次の瞬間、彼の周りに再び紅蓮の炎が纏わり付いた。

そして手を水平に振ると数個の火の玉が邦彦めがけて猛スピードで放たれた。

それを見て邦彦は瞳を閉じてもう一度手をかざし自らの周りに闘気を纏わり付け始めた。

そして溜めた闘気を解き放つため目をカッと開いた その時だった。

ザンっ！

悠輔と邦彦の間に一本の真っ赤な棒が突き刺さる。

その光景に悠輔も邦彦も驚きを隠せなかった。

「誰だ　！」

悠輔はキツと虚空を睨んだ。

そこには黒と金のツートンカラーのソフトモヒカンにじゃらじゃらとピアスをした一人の男　腕に摩利支天の入れ墨を彫った風魔忍者の風間英太が棒の上に器用に一本立ちしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5102i/>

摩天楼の忍たち

2010年11月14日14時54分発行